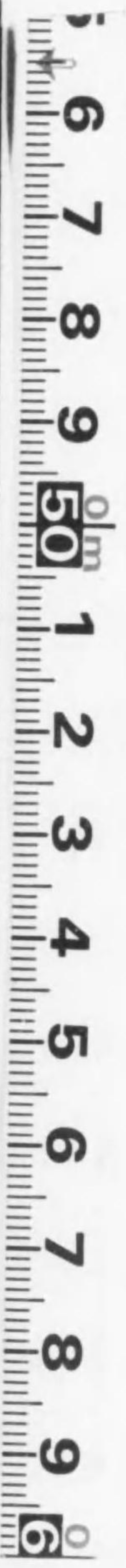
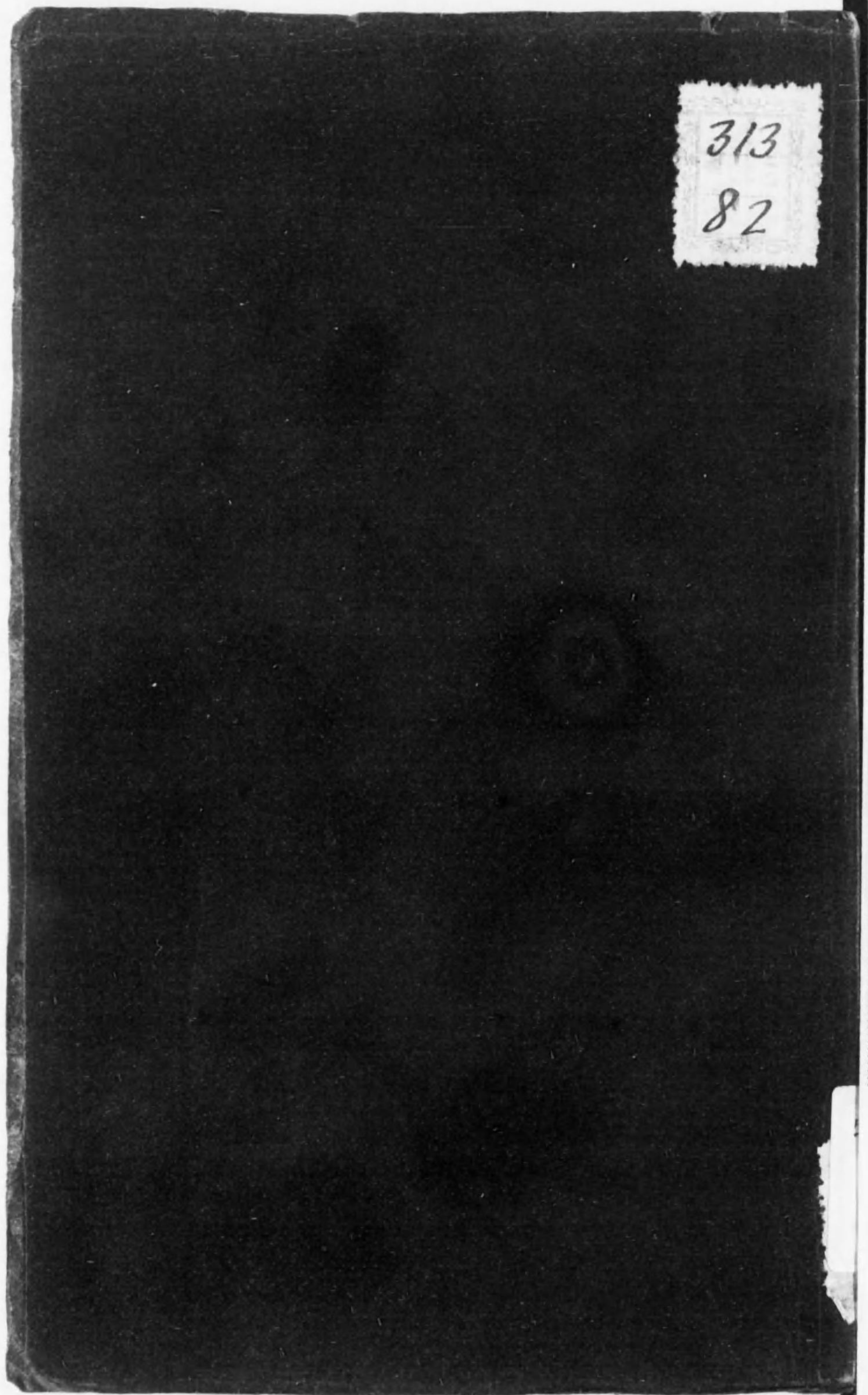


始



313  
82



特234  
538



著章斐藤齋



## 小 引

- 一、本書は著者が各種實業學校の歴史教科書に充てんが爲に編纂した<sup>實業教育</sup>外國史及び<sup>統</sup>外國史新教科書並びに高等女學校の教科書に充つべき<sup>女子用</sup>外國史新教科書によつて外國史を教授せんとする各位の爲に教師用書として編纂したものである。
- 一、本書は著者が多年にわたり東京高等師範學校附屬中學校に於て外國史を教授した際の教授草案を印刷したものであるから、著者の外國史教授案と云つてもよい。勿論教壇に立つに方つては毎年之を改訂加除したものはあるが、本書を利用せらるゝ際は常に本書に加筆して教授資料を増補し又は削除せられんことを望む。
- 一、本教科書の特色とする所は東西兩洋の歴史を打つて一丸とし、生徒をして統一ある世界史的知識を得しめんことにあるは生徒用書の例言に述べてある通りである。随つて教授資料を整理するに際しては其の基本となるべき年代概念を定めておくことが必要であるから、左にこれを掲げる。

上古史 東洋史教科書では多く夏・殷・周の三代までを上古史としてゐるけれども、これは西洋紀元前三世紀の中ごろであまり舊い。のみならず支那帝國の統一は秦より前漢後漢を経て完成し、諸隣國もこの頃に至つて支那の威に服したのである。また西羅馬帝國の滅亡と南北朝の分立とは共に西洋紀元五世紀に當るからこの頃を上古史の終りとすべきである。

中古史 東洋史教科書では秦の統一（西紀前二二一年）より宋の滅亡（一二七九年）まで千五百年間を中古史としてゐるけれども、年代の長さから云つても文化發達の跡から考へても至當とはいはれない。やはり隋・唐・宋の文化を中古史の中軸として其の前には南北朝の分立、文化の衰微（即ちヨーロッパの暗黒時代に當る）を含めて説き、末尾には蒙古族・土著族の興起並びに西歐に於ける地理上の發見を説けば、西力東漸の原因もわかり明末に於ける東西交通の端を啓けることも自ら明かになるであらう。

近古史 東洋史に於ては蒙古の興起を以て近古史の初とするけれども、強暴な

る蒙古族の侵略、建國は近世的色彩を帯びてゐない。清の康熙帝こそ露國のペートル大帝と殆ど時を同じうし、乾隆帝は普王フレデリック大王と同時代であるから、この時代を近古史とすべきである。其の前に清の太祖の勃興した頃は明の末葉に方り西歐の宗教改革時代にあつてゐるから、ジュネスイツト教の宣教師が傳道に熱中したのも當然のことである。

近世史 近世史は歐羅巴にあつてはフランス大革命より東亞にあつては清の嘉慶帝以後現代までをさす。

一、基本となるべき年代概念を經とし東西文化の相影響する所を緯として織り成されたものが世界史であるから、本書によつて教授する時は生徒はよく世界大勢の推移する所を見、東西兩文化の關係をも知り、歴史に對する興味も湧き、他日實社會に立つに至つては世界の活舞臺に眼光を放つてよく趨舍をあやまらざることが出来るであらう。

一、女子用外國史新教科書中、女子に關する教材をば五號活字を以て記述してあるが、

これについては特に教授資料を掲載する必要もあるまいと思つたからこゝに省いたのである。

昭和二年三月

著者識

# 外國史教授用書目次

教科書進度の標準……………(一一六)

緒論……………

第一 歴史教授の目的……………一

第二 外國史教授の目的……………二

第三 本書の取扱方……………四

第一編 上古史……………七

第一章 古代文明諸國……………八

第一支那……………第二印度……………第三埃及……………第四西南亞細亞諸國……………

第二章 希臘……………三五

第三章	羅馬	四
第四章	上古に於ける東西二大帝國の崩壞	五四

第二編 中古史

第一章	ゲルマニア民族の諸王國	六三
第二章	サラセン人の勃興 其の文化	六九
第三章	唐の隆盛及び其の文化 宋代の東洋	七四
第四章	中古歐羅巴の社會狀態 十字軍	八五
第五章	西歐諸國王權の發達	九四
第六章	蒙古族の興起	九七
第七章	土耳其の興起	一〇二
第八章	文藝の復興 地理上の發見	一〇五
第九章	明の衰勢と西歐人の東漸	一〇九

第三編 近古史

第一章	宗教改革	一一四
第二章	宗教戰爭 西班牙の盛衰	一二〇
第三章	和蘭の隆興 英國の革命	一二六
第四章	佛國の強盛	一三〇
第五章	露西亞の勃興 ポーランドの滅亡	一三三
第六章	清の興隆 清・露の交渉	一三六
第七章	普魯西の興隆	一四〇
第八章	英佛植民地の爭 亞米利加合衆國の獨立	一四四
第九章	近古の文化	一五〇

第四編 近世史

第一章	佛蘭西大革命	一五六
-----	--------	-----

第二章	ナポレオンの業	一六五
第三章	神聖同盟 アメリカ諸國及び希臘の獨立	一七五
第四章	佛國の政變 クリミア戰役	一七九
第五章	伊太利及び獨逸の統一	一八六
第六章	露土戰役	一九三
第七章	西方の東漸と亞細亞の情勢	一九六
第八章	阿弗利加及び太平洋洲に於ける列強の經營	二〇七
第九章	十九世紀末に於ける歐洲の形勢	二二三
第十章	世界大戰	二三〇
第十一章	世界の改造	二三〇
第十二章	最近文明の進歩	二三五
第十三章	大戰後に於ける東洋・西洋の趨勢	二四二

(目次終)

## 外 國 史 教授用書

齋 藤 斐 章 著

### 緒 論

#### 第一、歴史教授の目的

歴史教授は單に過去の記録を教へて之を暗記させることを目的とするのではない。過去現在に於ける人類の精神生活の進化發達せる過程を知らしめ、其の間知らずく將來に於ける進化發達の進路を暗示するものである。さて精神生活は知・情・意の三方面にはたらくものであるが、知は感覺・知覺・記憶から始まつて想像・推理・判斷の高尙な作用となるので結局思想を養成することになるから、歴史の取扱ふ所は思想・感情及び意志即ち活動(行爲又は行動)にあるといつてよい。歴史を教ふるに當つて、單に人間の活動(又は行爲)即ち事實ばかりを取り扱つて活動の動機たる思想感情に立ち入らないのは間違つてゐる。他の詞を以て言へば、何時・何事が起つたといふ事實を教ふるのみで、なぜ斯くくの事實が起つたかを等閑にしてゐるのは現時の通弊である。一つの事實即ち

行動を話す時には、必ず其の行動の動機たる思想・感情を理解せしめねばならぬ。人間活動の動機たる思想・感情に觸れしめることによつて初めて生徒の思想・感情を養成することが出来るのである。思想を以て思想を制すといふは、危険思想の感染を受けさせぬ爲には、まづ生徒に健全なしつかりした思想感情を造り上げておくにあると云ふことである。恰も病氣に犯されない爲には抗體即ち病氣に抵抗し得る所の體力を作つておかねばならぬと同様である。而して生徒の思想・感情の養成は主として歴史科に於てしなければならぬ。東洋諸國・西洋諸國の歴史を學ぶ間に生徒の思想が練り上げられて行く、否、教師は生徒の思想感情を練り上げることを努めねばならぬのである。其の思想・感情を練り上げるには單に史實を詮索し記録を教へるのみではいけない。歴史教師は「歴史は人間の活動(又は行爲)及び活動の動機たる思想・感情を取り扱つて生徒に健全なしつかりした思想・感情を作り上げさせることを目的とするものである」ことを忘れてはならぬ。

## 第二、外國史教授の目的

我が國の青年に外國史を教授する目的は過去現在に於ける世界文化の進化發達した徑路を知らしめる間に將來如何なる文化を作り上げべきかの暗示を得させるにある。現在の世界文化はすべて過去から譲り受けた遺産であるから、百年、五百年、千年、二千年と過去に溯つて其の順程を辿らな

ければならぬ。然るに現在から過去へと溯れば溯るほど、文化系統がだん／＼細い／＼流れになつて仕舞ふ。例へば現代の日本は東洋西洋の兩文明が複雑に織り込まれてあるけれども何千年の昔に溯れば東洋諸國とギリシア・ローマの別々の文化系統に分れ更にバビロニア・エジプト・印度・支那などの源流にまで溯るのである。それ故文化の始源に溯れば、東洋西洋其れ／＼別々に發達し時代の進むに従つて次第に接近して東西諸民族の接觸は繁くなり文化も融合して遂に渾一せる世界文化を形づくる様になつたのである。従來の教科書は東洋史・西洋史と別々に取り扱つてゐるから世界文化系統を分析理解することが出来ないのみならず、東洋史教科書は支那人の爲に編纂されたもの、西洋史教科書は西洋人に學ばせる爲に編纂された様に見えて、日本國民の思想を練り上げることにつてはちつとも考へてゐないのである。これでは歴史を學んだ爲に却つて外國崇拜の思想をあふり、やがて危険思想となるかも知れぬ。著者はこの弊を除かんが爲に外國史を編纂し、世界文化系統を辿つて太古に於て別々に發達した東西諸民族の歴史、東西兩文化の其れ／＼の特徴を述べ、時代の進むに従つて次第に東西文化が融合せられて渾然たる世界文化を形づくられる趨勢に説き及してゐる。これによつて生徒は歴史的知識の統一を得て數千年間に亘つて一貫せる世界文明史を理解することが出来るのである。本書を使用するに際してはよく／＼この趣旨を體して外國史教授の眞目的を達せられんことを希望して已まぬ。



### 第三、本書の取扱方

#### 時代の区分

本書は世界文化發達の階段に本づいて上古史・中古史・近古史・近世史の四つに別つて之を四編とした。第一編上古史は世界文化の始源から説き始め、まづ東洋では支那と印度、西洋ではアフリカ洲の東北端エジプト及び西南アジア諸國について其れれ、別々に發達した所の文化の特徴を述べ、進んで西洋文化は希臘時代・羅馬時代に至つて完成の域に進み、東洋文化は前漢後漢の世となつて爛熟の境に入つたことを知らしめ、遂に東西兩文化が接觸して互に影響せられたことを説き最後に東西の二大帝國(即ち後漢とローマ)が何れも他民族の侵入によつて瓦解したことを述べて上古史の終とした。

第二編中古史は、西洋に於てはゲルマニア諸民族の建國より封建制度の成立と其の潰裂、サラセン文化の特徴と其の西洋諸國に及せる影響を述べ、東洋に於ては唐の隆盛より宋の文化に及び宋末に蒙古族起り前後三回の遠征によつて西洋諸國民を驚かし、に東西兩民族の衝突折衝が始まり土耳其族の興起によつて遂に東ローマ帝國といふ老大國が亡び土耳其帝國之に代つてコンスタンチノールを首都として永く東歐に雄視するに至つた時を中古史の終りとした。殊に十字軍以後一方には

封建制度の衰頽を來し、他方には古學復興の氣運盛となり新大陸・新航路の發見あつて終に近世文明の端が啓かれ、遂に世界が渾一せられたのである。

第三編近古史は十五世紀の始から十八世紀末に及び、約三百年間に互る。前半は宗教改革時代、後半は絶對君主時代といはれ、遂に英佛澳露普の五大強國が勢を競ふに至つたが、東洋ではこの間明衰へて清新に興つて清初の文運隆盛を現出したる外、世界史の上に貢獻する所は殆どなかつた。

第四編近世史はフランス革命以後現代に至る百數十年間に互る。專制主義次第に跡を絶つて自由主義盛となり世界の趨勢は民主立憲の政體を促進するに至つた。この間、西力の東漸はアジア諸國の存立を危くしたが、我が國の興隆によつて西歐列強の侵略は阻止せられ、世界大戰後、國際聯盟の力を以て世界の平和を維持せんとしてゐる。大戰中、露獨澳の三帝國は共和國となつて強國としての地位を失ひ、今は歐洲の英・佛・伊三國に我が國及び米國を加へて五大強國と云はれる。西洋文化は十四世紀に古學復興の氣運起つてより次第に進歩し、十八九世紀以後精神文化、物質文化共に前古未曾有の發達を見たが、東洋文化は數千年間の歴史あるに係らず、寧ろ衰退の境に入つてゐる。我が國は先に支那文化を同化して東洋文化、爛熟の域に進み、最近西洋文化を攝取して現代文化を作り上げたのである。されど、東西文化を融合して渾然たる世界文化を建設することは今後における我が國民の努力に俟たねばならぬ。

## 第一編 上古史

### 本編大旨

本編は四章より成る。第一章は四つの中心地に起つた古代文明について別々に説き初めたが、この中、東洋の二文明は西紀前二世紀の末(前漢の武帝)から接觸の端が開かれ、紀元一世紀には印度文化が支那に入つて支那文化と融合するやうになつた。又西洋文明の二中心は其の地域が近接してゐる丈、其の接觸も早く、前六世紀にペルシア王國が先づ西南アジアの地を併合し更にエジプト王國をも領有したから、此の世紀の終には西洋の所謂古代文明諸國の文明が殆ど融合せられた。故に第一章に於ては世界には東西の兩文明が別在してゐたことを理解せしめるがよい。

第二章の希臘史の終にアレクサンドル大王の東征があつて希臘文明が東漸して印度の文化に影響を與へたから、是より印度文明と西洋文明との接觸が始まつたのである。第三章の羅馬史に於ては、まづ希臘文化が羅馬に入つて所謂グレコローマ文化と云ふが出来上つて、希臘羅馬兩文明が接觸融合することになり、羅馬帝政時代に入つて後(西紀二世紀ごろ)羅馬帝國と後漢との交通が開けたから、羅馬文明と支那文明とが接觸するやうになつたのである。第四章は羅馬帝國と後漢とが相前後して崩壊したことを述べ、兩帝國滅亡の後には東西何れも蠻族の侵略に悩まされること二百餘年の

永きに及んだことを知らしめ、中古史の序幕に移る伏線となすのである。最後に上古史を通じて之を概観せしめ東西兩洋の文化發達の徑路を比較對照せしめることを要する。こゝに歴史に對する興味が生徒をそゝるものがあるであらう。

## 第一章 古代文明諸國

### 本章の主眼點及び取扱方

本章の取り扱ふ所は世界文化系統から見れば其の源流である。抑、大河の源流は山脈のあちら側、こちら側から流れ出て別々の方向に流れて行くが、幾つかの溪谷を通り過ぎて後遂に合流して一つの大河となるものである。世界文化の流れも之と同じで、本教科書の第二頁にある世界文明發源地圖に示した通り、東方では黄河・揚子江兩河の流域に支那の文明、印度河・恒河兩河の流域に印度文明が起り、西方ではナイル河流域にエジプト文明、チグリス・エウフラテス兩河の流域にバビロニア・アッシリアの文明が起つた。これらの四つの文明の中心は其のはじめ別々に發達したのであるから、本教科書は第一支那、第二印度、第三エジプト、第四西南アジア諸國の四項に分けて説明してある。この四項を取り扱ふには、四つの文明を別々に説明してよい。其の間、相互ひの連絡を計らんとしてこぢつけるのは却つて良くない。但し第四項西南アジア諸國の終に至つてベルシアを説

明する時、ベルシアの君主獨裁治下にあるギリシア植民地人は自由を尙べる民族性の本質から遂にベルシアと衝突したといふことを一言してつぎの第二章希臘との聯絡をつけて希臘の歴史を教授する時の豫備智識とするがよい。

### 主要教材の解説

【人類發達の階段】 人智の開けない原始時代には、家を建つることを知らないから、穴居生活をして野獸を獵つたり河海の魚を漁どつたりして食物を得且つ獸の皮で衣服を造つた。故に狩獵時代又漁獵時代といふ。稍、進んで野獸を馴らして之を使役することを知りこゝに獵師は牧畜者と化し狩獵時代去つて牧畜時代が新に起る。狩獵時代・牧畜時代には一定の居處がなかつたが更に進んで植物を培養して其の收穫の時期を待つことになればこゝに定住する必要が起つて来る。之を農耕時代と云ふ。この時代になると、牛馬を馴らして耕作を助けしめ、石を磨いて家具武器を作つたから、磨製石器時代とも云ふ。我が國でも今石鏃・石槍などの外、素焼の土器などを同時に發掘するが皆この時代の遺物である。土地を耕して土着するやうになれば、多くの人々が附近に定住するから、數多の部落が出来る。そこで部落と部落との闘争が起つたり交際したりするからこゝに部落の長即ち酋長を以て指揮する必要が起る。其の部落がだん／＼附近を併合して大きくなり、こゝに都市生活が起るのである。この部落や都市の大きくなつたものは國家である。こゝに至つて政治組織社

會組織が作り上げられるのである。

【古代文明の四中心】 世界最古の文明には四つの中心があつた。我が國に近い所から云へば、支那・印度・西南アジア諸國及びエジプトである。年代順にあけると、エジプトが一番古く、今より五千年前に王國が出来てゐたから極く若く見積つても六千年以前に開けたのであらう。次は支那で今より五千年前、其の次は印度で今より四千年前に建國されたのである。西南アジア諸國ではバビロニアが一番古く、四千年前に王國が出来てゐたといはれるから、これも五千年以上古い國で、其の淵源は支那よりも古い譯である。アッシリアはもとバビロニアの植民地から獨立し後には強大な王國となつた。フェニキア・ヘブライはもつと新しい。

氣候は何れも溫和で動植物の生育も盛であつた。エジプトのメンフィスは北緯三十度でバビロニアのバビロンは三十一度位である。印度の恒河は北緯二十三度前後であるから一番熱いけれども印度文明の發祥地は寧ろ印度河上流地方であるといはれるからやはり三十度前後であり支那の揚子江は三十度位である。けれども支那文明の發祥地は黃河流域であつて北緯三十五六度の所である。これら四大河の流域は土地平坦で交通の便もよいから人々はこゝに土着することを好み農耕に従事したが、地味肥沃であつて収獲も多いので人口次第に蕃殖し、多くの部落・都市が起つた。かくて文化は早くこゝに發達してそれ〴〵王國を造つて政治機關も整ふやうになつた。

かくて時代を経るに従つて印度と支那の文明が融合して東洋文化の特色を發揮し、エジプトと西南アジアの文明が互に接觸して西洋文明を作りこれらの文明は希臘に入つて西洋文明の成熟期に入つたことは第二章にゆづる。

【歴史上に活動せる人種】 世界の諸人種の分類は獨乙の學者ブルーメンバッハの説が最も廣く行はれてゐる。ブルーメンバッハは世界の人種を白色人種(ヨーロッパ人種)黄色人種(アジア人種)銅色人種(アメリカ人種)褐色人種(マライ人種)黒色人種(アフリカ人種)の五つに分類してゐる。其の中、白色黄色二人種のみが世界の文明にたぢさはつてゐるから、之を悉しく述べる。

ハム種(エジプト人)

白色人種

セム種(バビロニア、アッシリア人、フェニキア人、ヘブライ人、アラビア人等)

アリア種(アジア(印度人、ベルシヤ人即ちイラン人))

ヨーロッパ(ギリシヤ人、ラテン人、ケルト人、ゲルマニア人、スラヴ人等)

黄色人種

孤立語種(漢人、チベット人、苗越人)

膠着語種(日本人、朝鮮人、滿洲人、蒙古人、土耳古人)

孤立語種・膠着語種と云ふは言語學上の分類であるけれども、同じ人種の中で親疎の關係を知る

には語系によるのが一番よい。我が日本人は漢人よりも朝鮮人の方がより近い親戚に當ると云ふことは語系の上から結論されるのである。抑孤立語といふは詞其の者は凡て孤立してゐるから、一つの詞と他の詞の關係を知つた上でなければ意味を解することが出来ない。膠着語は之と異なり詞と詞とはテニヲハによりて結びつけられるからテニヲハは恰も膠ニウツの川をなすのである。左に圖解して例を示さう。

孤立語 ① ② ③  
膠着語 ④ — ハ — ⑤ — ヲ — ⑥ — ス

孤立語は人殺犬の上に昨と云ふ詞があれば過去になり明と云ふ詞がつけば未來になる。又彼といふ詞が殺の上に加はれば犬に殺されたことになるのである。

膠着語はテニヲハによりて意味が如何やうにも變るのである。即ち人ハ人ニ人ヲと云ふやうにテニヲハを變へることによつて意味が變るのである。朝鮮語・蒙古語・土耳其語・滿洲語は其の單語こそ全く日本語と異なつてゐるけれども、テニヲハをつけることは日本語と同様であるから語系から云へば同じ種類に屬するのである。

## 第一 支 那

【支那の開闢】 支那は世界最舊國の一つである。西紀前三千年ごろ、漢人種が黄河の上流地方から河に沿つて下つて來て今の陝西省山西省地方に定住したのである。この地は黄土で植物の成育に適してゐるから、其のまゝ土着して農耕生活を營んだ。殊にこの地方の地質は丘陵を掘つてすぐ穴居することが出來たから家屋を建築する必要もなかつた。今でも陝西省地方の人民は穴居生活をしてゐるものが多い。然るに黄河沿岸地方には漢人種の來ない前に苗人種が既に先住してゐたが漢人種次第に勢力を張つて苗人種を揚子江沿岸に逐ひやつた。それだから黄河地方と揚子江流域が支那古代文化の中心であつたのである。

漢人種が追ひ／＼繁殖し部落も次第に増加するに従つて部落間の交通も盛になり文化も發達して立派な國家を形づくるに至つた。支那の歴史に万国とあるのはつまりこれらの部落を指したものである。西紀前二七〇〇年ごろ部落の長に黄帝といふあり、他の諸部落を征服し之を統一して支那帝國の基を開いた。この頃、文化大に發達し養蠶の法をはじめ船や車を作り指南車(磁石の始)も發明せられたといふ。又蒼頡に命じて始めて文字を作らしめ音樂を定めて人民を慰めたから支那人は黄帝を國の開祖とし漢人の大祖先として尊び、最近の革命(明治四十四年)當時には清の年號を廢し黄帝紀元四千

六百九年と記した程である。

【堯舜の世】 黄帝の後三百餘年の後、帝堯といふ聖天子出で始めて曆法を定め一年を三百六十六日とし之を十二ヶ月に分ち二年乃至三年に閏月をおいて四時を正した。即ち太陰曆である。帝堯の時、舜の孝悌賢明なるを知り宰相に擧げて政を行はしめ、帝の二女娥黄女英を妻はした。堯は帝位を己の子丹朱に譲らずして舜に譲つた。帝舜は禹・稷・皋陶・契等の賢臣を用ひ、官制を整へて天子の權を固くし、又苗人種を征して漢人の勢力を揚子江以南に伸ばした。帝の父は後妻に迷つて舜を虐待したが、舜は孝悌の道を致して善に遷らしめ、二十四孝の第一人といはる。五教を明かにして父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝なるべきを教へた。帝堯帝舜は聖天子と尊ばれ支那百王の模範といはる。帝堯は陶唐氏、帝舜は有虞氏であつたからこの二帝の時代を唐虞の世ともいふ。

【夏殷周三代】 堯の晩年に黄河に大洪水あり舜は鯀をして治水をなさしめたが成功しなかつた。よつて更に鯀の子禹に命じた。禹は外に居ること八年、三たび家門を過ぐれども入らず、九川を決して海に至り、道路を通じ水運を開いたから万民始めて業に安んじた。帝舜は禹を宰相に擧げて庶政を統べしめ、後帝位を己の子商均に譲らずして禹に譲つた。禹は天子となり國を夏と號して安邑に都した。天下を九州に分ちて貢賦を定め又五服の制を定めた。即ち國都の附近方千里を甸服といひ甸服の外を侯服、侯服の外を綏服といふ。これ迄を中國といふ。其の外を要服といひ要服の外を荒服

といふ。要服・荒服は即ち東夷・南蠻・西戎・北狄の地である。

禹の子啓は賢明であつたから禹は王位を啓に譲つた。これが王位世襲の始である。夏は十七代目に暴虐なる桀王出で末喜を寵して侈を極め慾を縱にし民財をつくしたので、國人大に怨んだ。湯王よつて兵を出して桀王を攻めて南巢に放逐し自ら天子の位に即いた。夏は四百餘年で亡びた。

湯王は國を商と號し都を商に定め、賢相伊尹を用ひて仁政を施した。十一代盤庚の時、都を般に遷して國號を殷と改めたから殷の世とも云ふ。三十代紂王に至り酒池肉林の樂に耽つて政治を顧みず、民心全く離反したので周の武王は兵を出して殷を滅した。殷は六百餘年で亡びた。

周の武王は舜に仕へて后稷を主どつた棄の子孫である。武王の曾祖古公亶父は北狄に攻められて岐山の下に移り、國を周と號した。亶父の少子季歴の子は即ち武王の父文王である。文王海に釣して賢才呂尚を得、尊んで太公望といつた。武王は太公望の計を用ひ八百の諸侯を會して紂王を討ち滅し、自ら代つて天子となり鎬京に都し國を周と號した。武王大に宗族功臣を封じて封建の制度をはじめ、封土の大小によつて公侯伯子男の五爵を定めた。武王死して子成王幼少であつたから叔父周公旦が攝政となつて制度を作り禮法を定めた。これより三百年間は周の隆盛時代である。後世禹王・湯王・文王・武王と共に周公を聖人と尊んでゐる。

支那の禪讓放伐と我が國體

支那太古の政體は共和政體に似てゐる。多くの酋長（群后といふ）は彼等の中で最も有徳有力の者を擧げて天子に戴いた。天子廢立の權は群后の手にあつたから天子の子でも徳望が無ければ父の後をつぐことが出来なかつた。だから堯は位を舜に禪り舜は禹に譲つたのである。夏の桀王が殷の湯王に放たれ殷の紂王が周の武王に伐たれたのも、この思想に本づいたのである。故に孟子も一夫紂を誅すといつてゐる。後世、支那に易姓革命の絶えず行はれるのはこの思想この國民性に基づくものである。我が國が万世一系の天皇を戴くのは根本的に國體を異にしてゐる。我が國人は早くこの相異の點を看取して儒教の長所たる仁義忠孝の道だけを取り入れたのであつた。

【春秋の世】 周の十二代目幽王は暗愚にして政を亂し西方のトルコ族の侵入するに及び、遂に殺された。其の子平王は蠻族を避けて都を洛邑に遷した。之を周の東遷といふ。これより約三百年間を春秋時代といふ。孔子の作つた春秋に記されてゐる時代である故、其の書名を採つたのである。この間周室衰へて王命下に行はれず、強大な諸侯は王命を藉つて小諸侯に號令した。之を覇者といふ。其の中齊の桓公、晋の文公、楚の莊王、秦の穆公、越王勾踐は尤も名高い。之を五覇といふ。齊の桓公は管仲を用ひて富國強兵の實をあげ諸侯を會して自ら盟主となり夷狄を攘ひ王室を尊ぶを以て志とし、功業最も盛であつた。我が神武天皇紀元前後のことである。

越王勾踐は春秋の末に出で、吳王夫差と戦ひ勝つて之を亡した。はじめ夫差の父闔閭、越王勾踐

## 教科書進度の標準

一 教科書の進度は、土地の情況と教授時間の多少によつて一様ならざるべけれども、今、假りに外國史教授時間數を總計四十週八十時間（毎週二時間）として各週に割り當て大體の標準を示したのである。これを三學期にわりあつれば左の通りである。

第一學期 十四週（二十八時間）

第二學期 十五週（三十時間）

第三學期 十一週（二十二時間）

合計 四十週（八十時間）

二 こゝには實業外國史のみについて教科書の進度を割り當てたれども、（統外）外國史新教科書及び（女）外國史新教科書の場合も

勿論この標準によつて定められたし。

女學校にては毎週の教授時數を一時間とし、二年間に亘つて外國史を教授することになつてゐるから、こゝに示せる進度の標準に準じ、第一週とあるところを二週間に引き延ばして教授するを可とす。實業學校にて毎週教授時數を一時間とせる場合も之に準せられたし。

三 若し外國史を四十時間に切りつめて教授する時は本表に一週二時間としてある部分を一時間にあつべく、又百二十時間を割り當てる場合は本表にて二時間とあてたる部分を三時間に引き延ばすやうにせられたし。

四 全體にわたつて教授時間數に不足を生ずる恐れある時は必ず上・中古史に於て省略すべく、近世史教授の時間數を切り詰

めることは歴史教授の本旨に反するものである。

週		<b>教授要項</b>  實業教 育外國 史頁數
第一週	<b>【第一學期】</b>  <b>第一編 上古史</b>  第一章 古代文明諸國 世界文明の起源 古代文明の四中心 第一 支那 支那の開闢	
第二週	夏殷の世 周の初世 春秋の世 戰國の世 孔子老子 秦の統一 漢の興隆 漢の衰亡 漢の再興	8
第三週		12



第四週	漢の學問 東西の交通 第二 印度	16
第五週	印度の建國 釋迦 佛教の傳播 第三 埃及 第四 西南亞細亞諸國 バビロニア・アッシリア ヘブライ フェニキヤ ルシア	16
第六週	希臘の國情 スバルタ アテネの興隆 希臘の衰微 アレクサンド ル大王 希臘の文化	20
第七週	羅馬の興起 外國征服 ケーザルの業 帝政の盛時 第三章 羅馬	24

第八週	基督教の起 帝政の衰微 羅馬の文化 第四章 上古に於ける東西二大 帝國の崩壞 漢滅亡後の支那	32
第九週	三國 晋・南北朝 ゲルマニア民族の羅馬帝國侵入 西ゴート王國 ヴァンダル王國 アッチラ王國 西羅馬帝國の滅亡 上古史總括	36
第十週	東洋文明二中心の融合 西洋文明二中心の融合 東西 兩文明の接觸 我が國の文化的地位	39
第十一週	第二編 中古史 第一章 ゲルマニア民族の諸王國	

第十二週	東ゴート王國 東羅馬帝國の復興 フランク王國 ンバルチア王國 アングロ、サクソン族 第二章 サラセン人の勃興 其の文化 マホメット教 サラセン帝國 サラセンの文化	44
第十三週	第三章 唐の隆盛及び其の文化 宋代 の東洋 東西概観 唐の盛時 唐の衰亡 唐代の文化 東西の交通 遼の興隆 五代 宋の建國 遼の隆盛 神宗の新政 遼金の廢興 宋金の和議 宋 代の文化	48 52 56
第十四週		

第一週	【第二學期】 第四章 中古歐羅巴の社會狀態 十字軍 暗黒時代 羅馬法王 フランク王國 獨逸皇帝と羅馬 法王 封建制度 十字軍 十字軍の結果	60
第二週	第五章 西歐諸國王權の發達 英蘭の起り 憲政の確立 佛蘭西王權の伸張 百年戰 役 諸國王權の確立	64
第三週	第六章 蒙古族の興起 蒙古族の勃興 成吉思汗の西征 拔都の西征 旭烈兀 の西征 元の世祖 東西の交通	69

第九週	第八週	第七週
兩名相 ルイ十四世 西班牙繼承戰役 佛國の學藝・ 風俗	和蘭の隆興 英國の革命 共和政治 名譽革命 大不列顛王國	ルータールの宗教改革 チャールズ五世 新教の弘通 耶蘇會 第二章 宗教戰爭 西班牙の盛衰 西班牙の強大 和蘭の獨立 英蘭の隆盛 佛國宗派の爭 三十年戰役 三十年戰役 の結果
91	88	84

第七週	第六週	第五週	第四週
第一章 宗教改革	第三編 近古史	東西兩人種の衝突 我が國の文化的地位 中古史總括 明の衰勢 西歐人の東航 基督教の東漸	元の末路 第七章 土耳其の興起 土耳其の建國 帖木兒大王 東羅馬帝國の滅亡 第八章 文藝の復興 地理上の發見 古學の復興 美術の復興 地理上の發見
79	76	72	

第十週	第五章 露西亞の勃興 ポーランドの滅亡 ペートル大帝の新政 北方戰役 カザリン二世とポーランドの滅亡	
第十一週	第六章 清の興隆 清露の交渉 清の興起 清の極盛 清の學藝 清露の交渉	95
第十二週	第七章 普魯西の興隆 普魯西の興起 埃太利繼承戰役 七年戰役 フレデリック大王の功業	98
	第八章 英佛植民地の争 亞米利加合衆國の獨立	

第十三週	莫臥兒帝國の衰勢 英・佛の植民貿易 英佛の植民地戰争 亞米利加合衆國の獨立	103
	第九章 近古の文化 科學の進歩 哲學・文學 革新文學	
	近古史總括 歐洲の大勢 東西の交通	107
第十四週	第四編 近世史 第一章 佛蘭西大革命 革命の原因 革命の發端 王政の顛覆 恐怖時代	
	第二章 ナポレオンの業 ナポレオンの外征 ナポレオンの帝政	113

第一週	【第三學期】 第三章 神聖同盟 アメリカ諸國及び希臘の獨立	120
第二週	神聖同盟 亞米利加諸國の獨立 希臘の獨立 第四章 佛國の政變 クリミア戰役 七月革命及び其の影響 二月革命及び其の影響 佛國の第二帝政 クリミア戰役	122
第三週	第五章 伊太利及び獨逸の統一 伊太利の統一 獨逸統一の計畫 普墺戰役 普佛戰役 統一の完成	126
第四週	第六章 露土戰役	

第十五週	ナポレオンの全盛 露國遠征の失敗 ナポレオンの末路 ウィーン會議	118
------	----------------------------------	-----

第七週	露土戰役 ベルリン會議 第七 章 西力の東漸と亞細亞の情勢 西力の東漸 英領印度 阿片戰役 長髮賊、英佛軍の侵入 露國の東方經營 佛國の安南經營、清・佛の交渉 英・露・佛の衝突 北清事變 清朝の滅亡 支那共和國 第八 章 阿弗利加及び太平洋洲に於ける列強の經營 世界政策 列國の阿弗利加經營 列國の太平洋諸島經營 北美合衆國の發展 第九 章 十九世紀末に於ける歐洲の形勢	138
第六週	133	
第五週	129	

第八週	三國同盟對露佛同盟 露獨の接近と日英同盟 三國協商 第十 章 世界大戰 大戰前のバルカン半島 大戰役の破裂 大戰役の經過 露國の革命 大戰の終局 平和條約の調印 第十一 章 世界の改造 歐洲形勢の激變 新興の諸國 國際聯盟 第十二 章 最近文明の進歩 物質文明の進歩 文學・美術 勞働問題と博愛事業 世界共同事業 第十三 章 大戰後に於ける東洋・西洋の趨勢 日獨戰爭と日支交渉 支那近事 歐洲諸國の不安	142
第九週	145	
第十週	149	
	153	

(終)

と戦つて敗死したが、夫差は薪に臥して具さに艱苦を嘗め勾踐を會稽山に破つて父の仇を報いた。其の後、勾踐は膽を嘗めて會稽の恥を雪がんことを期し、遂に吳を亡し名臣范蠡を用ひて國勢強大を極めた。春秋時代の初に北部が強かつたが、この頃より南部が強盛となつて文化も次第に南方に及んだ。

【戰國の世】 春秋の後二百年の間を戰國の世といふ。この時代には春秋時代の諸侯多く亡びて唯秦・楚・燕の三國のみ益々強大となり、齊は其の臣田氏に奪はれたから前のと區別して之を田齊といふ。又新たに興つた韓・趙・魏はもとの晋の地を三分して獨立したから合せて三晋といふ。以上の七王國は各々獨立して王と稱した。之を戰國七雄といふ。

戰國の初、秦の孝公は商鞅を用ひて富國強兵の策を講じてより國力强盛となり、漸く他の六國を壓せんとした。蘇秦は合從の說を唱へ六國同盟して秦に當る策を立て、六國に遊說して遂に同盟の長となつた。そこで秦は蘇秦の友張儀を用ひて離間策を行ひ、六國をして各々秦に和せしめた。之を連衡といふ。從は縦に通じ南北を日の縦とするから南北に相近接してゐる六國が連合することを合從といふ。又衡は横に通じ東西を日の横と云ふから六國が各々西に向つて秦と連和することを連衡といふ。これより青年は蘇秦張儀の成功を慕ひ、合從連衡の說を唱へて諸國に説いた。これを縱橫家といふ。六國の君主は策士の言に迷ひ、或は合從し或は連衡し國是が一定しなかつたから、國

力は次第に衰へた。之に反して秦は一定の方針を執り又遠交近攻の策を用ひて益々六國を弱めたから秦は獨り強盛を極めた。この頃周の王室は僅に洛邑附近を領するに過ぎなかつたが、赧王は六國と合同して秦を伐たんことを圖つたため、反つて秦に攻め滅された。(紀元前二五六年) 周は八百六十七年で亡びた。ついで秦の始皇帝は次第に韓・趙・魏・楚・燕・齊の六國を亡して支那を一統した。紀元前二二一年のことである。

【周代の文化】 周公は中央政府・地方政治を整へ中央政府には天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官をおき、それら各政務を分掌せしめ、各官の屬は六十官つゝあつたから合せて三百六十官あつた。

税法は租を第一とした。周代には、方一里(支那の里)九百畝を九分して圃の形とし、周りの八つを私田として八家に與へ、中央を公田とした。之を井田法と云ふ。公田は八家共同して耕し、其の收穫を官に納めた。之を租といふ。この外公役に使役せしめたるは後世の庸にあたり、布帛などの産物を納めしめたるは後世の調にあたる。又戦亂が起れば農夫は召されて兵士となつた。即ち全國皆兵主義であつた。

周の世には貨幣も鑄造せられて物々交換の風は次第に少くなつた。學制は大學・小學あり、小學では洒掃應對進退の節を教へ大學では身を修め家を齊へ國を治め天下を平にする道を學ばしめ、教科目には禮・樂・射・御・書・數の六藝を課した。

【孔子・老子】 春秋の末に出た孔子は世界人類中最も偉大な人格を有する大聖人の一人である。名は丘、字は仲尼、魯の昌平郷に生る。始めて儒教を唱へ仁を教の本とし孝悌を道の始とした。實に東洋道德の根源、支那政教の標準である。孔子及び其の門人の言行を集めたるを論語といふ。大學・中庸・孟子と合せて四書といひ、儒教の經典といはる。中庸は孔子の孫子思の作つたもので、孟子は孔子の死後百年に生れ子思の門人に學んで儒教をひろめ仁義の道を説いた。孟子は又性善説を唱へたが、荀子は之に反對して性惡説を唱へた。

孔子と同時代に老子といふがあつた。姓は李、名は聃たんとといふ。無爲自然の説を唱へて孔子に反對したが、戰國時代に莊子等出でて其の説を傳へた。故に之を老莊の學と云ふ。後に儒教と並んで支那思想の一要素となつた。後世、この學説に附會して道教を創めた。

戰國時代には楊子出でて自愛説を唱へ、墨子は兼愛説を唱へた。その他、商鞅・韓非は法家の祖といはれ、孫武・吳起は兵家の祖と稱せらる。すべてこれらを總稱して諸子百家といふ。周代の學術は我が國の文化並びに國民道德上に多大の感化を與へたのである。

日の本に、仰けど高し、からくにの、おほき聖人の、道の光は。(清水濱臣)

【秦の統一】 秦の始皇帝は一統の後、國都咸陽に大宮殿を立て、權威を示し、國內を三十六郡に分ち、郡を縣に分ち、中央政府の命令を傳へて天下に行き渉らしめた。中央政府には丞相・太尉・御



史大夫をおき、各郡には守・尉・監をおいて行政・軍事・司法をそれ／＼分掌せしめた。茲に於て従来の封建制度は郡縣制度となり、中央集権の實始めて擧つた。始皇帝は又民間の武器を沒收し地方の富豪を咸陽に移り住ましめて兵亂を未然に防いだのみならず、度量衡を一にして民心の統一をもはかつた。

内に對して帝威を示すと共に、外に向つても大に國威を輝かした。當時匈奴(コトル族)は屢々北邊に寇したからまづ將軍蒙恬をして之を擊退せしめ萬里の長城を築いてこゝに三十萬人の戍兵をおき其の侵入を防ぐ策を立てた。又南越をも征伐して今の安南地方を略取し、五十萬人を南嶺に移して守備に供へたから秦の威名これより遠近に振ひ、諸外國は秦を訛つて支那と呼び遂に今日の國名となつた。

されど土木と遠征の爲に國費を要すること甚だしく國民は負擔に苦んで漸く新政を厭ふに至り學者も之を批難するに至つた。よつて始皇帝は丞相李斯の議を用ひ、醫藥卜筮と農業の書を除く外、民間の書をすべて焼き棄て、儒生四百六十余人を坑殺するといふ残忍を敢へてした。之が爲に帝の死後叛亂四方に起り一統後僅に十五年で亡びた。

【漢の興隆】 秦の末、群雄各地に起つて革命を起したが、中にも楚人項羽と沛公劉邦との活躍は最も目ざましかつた。項羽少時學書不成、去學劍、又不成、曰書足以記姓名而已、劍一人敵

不足學、願學萬人敵二年長するに及び天下の亂に乗じて兵を擧げ楚の懷王の孫心を奉じて楚王とした。楚王が諸將と先きに關中に入る者は之に王たらんことを約した。項羽關中に入らんことを期して江北を平けて西に向つた時、劉邦既に蕭何・張良を用ひて江南を從へ項羽に先だつて關中に入つた。秦の宦官趙高は二世皇帝を弑して子嬰を立てたが子嬰は趙高を殺して、劉邦の軍門に降つた。邦、咸陽に入つて秦の苛法を除き僅に法三章を約したから關中の民大に悦服した。項羽後れて關中に入り劉邦と鴻門に會したが、范增羽に勸めて邦を殺さんとした。劉邦は樊噲・張良らの計によつて免れることを得たが、羽は咸陽に入つて子嬰を殺し阿房宮を焼き自立して西楚の霸王と稱し、邦を巴・蜀・漢中の王に封じ、人をして楚王を殺さしめた。

邦徐ろに後圖を畫し、次第に勢力を張り、西紀前二〇二年遂に項羽と垓下に戦つて勝ち、羽は

力拔山兮氣蓋世 時不利兮離不逝

離不逝兮可奈何 虞兮々々奈若何 (項羽)

といふ詩を詠じ烏江に逃れてこゝに自殺した。劉邦よつて帝と稱し、國を漢と號し、都を長安に定めた。之を漢の高祖と云ふ。高祖嘗つて曰く運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如此子房、鎮國家、撫百姓、給餽餉、不絕糧道、吾不如此蕭何、連百萬之衆、戰必勝、攻必取、吾不如此韓信、此三人者皆人傑也。と實に漢の創業はこの三傑の助によつたものと云つてよい。

高祖は秦の早く亡びたるに鑑み、功臣一族を諸侯に封じて帝室の藩屏としたから、天下の大半は諸王の封土となり、帝領は僅に十五郡に過ぎなかつた。されば、諸王は朝廷を侮り高祖の孫景帝の時、七王遂に叛亂した。はじめ黠錯チヨウツツ、諸王の土地を削つて其の跋扈を抑へんしたので吳王まづ叛し、楚・趙・濟南、菑川、膠西、膠東之に應じて大亂となつた。景帝よつて周亞父をして之を平けしめた。之を吳楚七國の亂といふ。これより諸王を帝都に留らしめ使をやつて領國を治めしめたから中央政府の基礎は固くなつた。

景帝の子武帝は、建國後六十六年に立ち、始めて年號を建て、建元といふ。在位五十四年の永きにわたり、文武の功業甚だ多く、漢の極盛時代を現出した。中にも外征の功最も著るしく漢の威名内外に振ひ漢土漢人の名は支那人の別名となるに至つた。

武帝の外征

#### 一、朝鮮征服

朝鮮は殷の王族箕子の封ぜられた土地で、大同江以北を領し王險今の平壤に都して之を子孫に傳へた。四十一世の孫箕準の時、燕人衛滿來つて其の國を奪つた。滿の孫右渠に至り漢の命に背いたので、武帝兵を出して討ち亡し、其の地に四郡眞番・樂浪・臨屯・玄菟をおいた。この頃其の南部には馬韓・下韓・辰韓の三韓があつたが、其の後、高麗、新羅、百濟の三國新たに起り、漢は四郡の地を抛棄した。

#### 二、西南夷

武帝は父司馬相如をして西夷今の四川省を征せしめて郡をおき唐蒙をして兵を發して南夷今の貴州省を伐たしめ是等の地にも郡をおいた。

#### 三、匈奴

帝まづ將軍衛青をして匈奴を伐たしめて朔方郡今の内蒙古をおいたが、更に衛青の甥霍去病をして匈奴を伐たしめ去病は遠く沙漠をわたつて外蒙古の地に達したから匈奴は漠南に住せざるやうになつた。

#### 四、南越・東越

楊僕は南越を征して交趾・九眞・日南の三郡をおき、更に東越をも征服したから、南は遠く安南地方にまで國威を輝かした。

#### 五、張騫の遠使

張騫は西域諸國と攻守同盟を結んで匈奴を夾撃せんとし、従者百餘人を従へて使したが、途中匈奴に囚へられ、拘留せらるること十一歳、匈奴の婦人を娶つて子を生んだ。其の後間を得て妻と共に西奔し大宛・康居を経て大月氏國及びバクトリア大夏に至つて歸つた。(西紀前二二六年)張騫は目的を果さなかつたけれどもこれより西域諸國との交通開け西方の産物が支那に傳はるやうになつた。

後張騫は蜀の道に因つて身毒(度)に通せんことを建議し、自ら滇國(今の雲南)に行つたけれどもまた果さずして歸つた。騫また帝に説いて烏孫と同盟して匈奴を抑へんとし、烏孫王の請を入れ漢室の女(武帝の兄の孫女)を妻はして兄弟の交をなしたが、王妃は懷郷の情に堪へず僅かに詩を賦して自ら慰めた。されど匈奴この頃から次第に衰へた。

吾家嫁我兮天一方

遠託異國兮烏孫王。(中畧)

居常土思兮心内傷

願爲黃鶴兮歸故鄉

〔細君の作〕

武帝は大に土木を起し上林苑内に離宮七十所をおき方三百里の昆明池を作つて池中に水戦を習はした。かくて遠征土木の爲に多額の國費を要し重税を課したので、人民之に苦しみ騷亂處々に起つたが、次の昭帝・宣帝の二代は政治を勵み人民の休養を力めたから人民業に安んじ天下太平となつた。

宣帝の後一代を隔て成帝に至り外戚王鳳政權を恣にし鳳の弟五人同日に侯に列し世に五侯といつた。平帝の時、鳳の甥王莽女を納れて皇后として政權を執り遂に帝を弑して孺子嬰を立て、自ら假皇帝といひ、ついで眞皇帝の位につき國號を新と改めた。前漢は十三世二百十四年で亡びた。

【漢の再興】 王莽は諸制度を急に改め重税を課したので、人民の不平甚だしく群雄四方に亂を起し、王莽は忽ち敗死して新は僅に十五年で亡びた。

群雄の中、漢の王族劉秀は昆陽の戦に王莽の軍四十二萬を討ち破つて威名を揚げ、遂に衆に推されて皇帝の位に即き、都を洛陽(古の洛邑)に奠め赤眉の賊其他所在の群雄を征服して天下を一統した。之を後漢の光武帝といふ。

光武帝は専ら内治に意を用ひて人民の休養を圖り教化を盛にし名節を勵ましたから、風俗敦厚となり節義の士の輩出したことは後漢を第一とする。子明帝・孫章帝はよく父祖の業をつぎ、内は政治を整へ外は西域諸國を威服せしめて國運隆盛を極めた。

はじめ明帝は寶固をして北匈奴を伐たしめ燕然山(外蒙)にまで進んだが、寶固の部將班超は命を受けて西域に使い、不入虎穴不得虎子と揚言して深く中央アジア地方に入つて或は國王を威服して歸降せしめ、或は國王を擒にして其の地を沒收し、二十餘年の後には西域五十餘國皆質子を漢に送つて歸服するやうになつた。よつて章帝は西域都護府を龜茲におき班超を之に任じ、後、班超を定遠侯に封じて功を賞した。班超は又甘英をやつて大秦(帝國)に使せしめたが、甘英は安息國(今のシリア)を経て條支國(今のシ)に至り海を臨んで歸つた。これが支那のローマに通じた始である。

章帝の次に和帝立つたが、この頃より外戚宦官代るゝ政權を恣にしたので、漢室は次第に衰へた。桓帝は外戚の專横を嫌ひ宦官の力を借りて外戚を誅したから、これより宦官は功を恃んで政權を執り、外戚に代つて專横を極めたので、政治は益々亂れ、賊徒四方に起つて遂に後漢の滅亡を見

るに至つた。

【漢の學術】 秦の火坑以來、古書は殆ど滅んで學問一時衰へたが、前漢の武帝は大學を興し五經(詩・書・易・春秋・禮記)博士をおき儒教を以て國家政教の標準としたから、學問これより興隆した。この時儒者に董仲舒・孔安國あり文人に司馬遷・司馬相如が出たが、中にも司馬遷の著はした史記は後世修史の手本となつた。

後漢の光武帝は一統の後、學校を立て文教を盛にしたから、後漢も學問盛に起つて儒者に馬融・鄭玄出で、四書五經の註釋を作り、文人には班固あり妹昭と共に前漢書を著はして名高い。

【東西の交通】 張騫の遠使は破天荒の冒險的大旅行で最初の遠使には十三年を費し同行者百余人中、唯張騫と一從者のみが歸ることを得た。これが爲に漢の事情が西域諸國に傳はり又西域諸國の文物は支那に輸入せられるやうになつた。葡萄・苜蓿・胡桃・石榴などは皆西域から傳來したものである。

又降つて後漢の班超(班固の弟)は西域五十餘國を従へたので、後漢と西域諸國との交通益、頻繁となつたが、この頃、蔡愔は明帝の命を受けて大月氏國に使し多くの佛像經論を白馬に荷はせ西僧迦葉摩騰・竺法蘭を連れ歸つたから、洛陽に白馬寺を立て、西僧をこゝに住ませた。これより佛教、支那に入つて支那文化の重要な一要素となつた。

後漢の代はローマ帝國隆盛時代にあたり、東境はエウフラテス川にまで弘つてゐたから班超の遣した甘英はローマ帝國領内に入つたのである。ローマも早く漢の富強を知つて交通せんとしたけれども中間の安息國に妨げられて果さなかつたが、ローマ帝安敦(アウレリウス・アントニヌス)は使を洛陽に遣し海路より後漢に通じたから、この後、羅馬の商人は今の東京地方に來て珠玉・琥珀・瑤珉などを輸入し、支那よりは絹を持ち歸つた。中にも絹は最もローマ人に珍重せられ、一時は絹と黄金とは同一の重量で賣買されたといはれる。クリスト教宣教師が蠶卵紙を杖の中に入れて支那から持ち歸つたのは西紀五五〇年頃といはれる。

## 第二 印度

【印度の建國】 印度は今から四千余年前、アリア種一派が中央アジアから南下して來て先住のドラヴィダ族を逐ひやつて建てた國である。始は印度川の上流地方を占領してゐたが、後、次第に西南方に延び恒河流域にまで弘まるには約一千年間を費してゐる。かくて土人と混住して印度文化を作り上げたのであるから、印度文化はアリア民族の文化といつてよい。

印度人は宗教思想早く發達し、婆羅門教を開いた。婆羅門教の根本思想はブラーマ(梵天)を以て宇宙万物一切の本源となしてゐると云ふことにある。其の經典を吠陀經(ウヰタ)といひ、四種姓の區別を嚴

重に立てゝゐる。ブラーミン(僧族)はブラーミンの口から、クシャトリア(武士)はブラーミンの肩から、ヴァイシア(平民)はブラーミンの腰から、スドラ(奴隸)はブラーミンの足から生れたと言ひ傳ひられ、先天的に區別あるものと信じてゐた。されば四種姓の區別は頗る嚴重で互に社交することなく又結婚することさへ禁じられてゐた。就中、ブラーミンは最高位を占めて宗教と學術とを獨占してゐたから、他の三種姓のものは其の壓制に苦しんだ。かゝる時に出て宗教を改革し社會を救つたのは釋迦である。

【釋迦】 釋迦は中印度のカピラ城(今のネパール地方)主淨飯王の子で母を摩耶夫人といふ。幼名は悉達シッタタといふ。社會の腐敗と人生の無常に感じて衆生濟度の念を起し遂に王宮を捨て、山に入り、苦行六年の後、佛陀伽耶の菩提樹下にて正覺を得て佛陀(覺者の意)となつた。其の教は即ち佛教である。

釋迦は成道の後四十餘年の間、諸國を巡つて説教し、慈悲を説き一切平等を唱へ「正道を行へば種姓の別なく皆成佛し得る」と説いたから、僧族の壓制に苦しんでゐた三種姓は、皆喜んで之に歸依した。釋迦の死は孔子の死せる五年前であつた。(西紀前四八四年)

【佛教の傳播】 釋迦の死後、二百年許を経て中印度のマガダ國に阿育王出で、厚く佛教に歸依し其の保護傳播に力を盡したから、佛教は北は中央アジアより南はセイロン、東はビルマより西はシリ

アにまで弘まつた。阿育王の建てた佛塔は今も印度の各地に發見せらる。

阿育王の後更に三百年を経て中央アジアの大月氏國にカニシカ王出でて、其の領土は北西印度から天山南路にまで廣まつてゐたが、王もまた佛教の傳播に力を盡したから、大月氏國は佛教流行の中心となつた。蔡愔が佛教を求めたのはちようどカニシカ王の時であつたから、喜んで僧侶を送つて布教せしめたのであつた。かくて佛教は支那より更に朝鮮・日本にも傳はり、東洋の一大宗教となり佛教藝術は東洋文化の重要な要素となつたのである。

### 第三 エジプト

エジプトの文明はナイル川の賜といはる。ナイル川は源を北緯三度の地に發し長さ三千八百余哩に及び毎年七月より十月にかけて高さ二十五呎乃至三十三呎の大洪水あり、減水の時泥土が沈澱するので土地は自然に肥沃となり穀物よくみのるから人民早く繁殖しこゝに國家が作り上げられたのである。

紀元前三四〇〇年頃、メネスが第一王朝を始めてから紀元前五世紀の頃まで二十王朝つゝいたが、紀元前一三〇〇年頃(第十九王朝)が最盛時代といはる。ラメス二世は即ち第十九王朝の末頃の王である。彼の有名なピラミッドを建設したのは第四王朝時代(二八五〇—二七〇〇年)である。

エジプト人は世界中最も宗教好きの民族であるといはれ、エジプト文化の大部分は宗教思想に基づいて發達したのである。エジプト人は多神教信者であつたから、幾多の神殿を建造し神像を彫刻した爲に建築彫刻の進歩を促した。又靈魂の不滅を信じたから屍體を保存して靈魂の歸來する時に其の入るべき肉體を保存せんとしてミイラを作ることに苦心した。之が爲に臟腑の解剖、防腐劑及び香水の發明をも促した。國王の墳墓として巨大なるピラミッドを建造したのも同じ動機から出ている。クフ王のピラミッドは一番大きく約一メートル立方の石灰岩二百三十萬個を積み重ねたといはれ、十萬の人夫が二十年間(洪水期)の勞作に成つたものであるといふ。カイロの西方ギゼイに建てられ高さ直立百三十七メートル余、方形の底邊の長さは各二百二十七メートルである。其の附近に大スフィンクスがある。王の頭に獅子の體軀をつけたもので高さ二十メートル長さ五十七メートルに達する。

又神殿若しくは王宮の前にオベリスクを建て、神徳又は王の功業を記してある。文字は象形文字といひ、はじめ物象をかたどつて之を造つたのであるが、後には省略して簡單にし、之をバビルスに畫いた。バビルスはナイル川の岸に生ひた莎草カヤツリの纖維で造つたもので英語のペーパーもバビルスから訛つたのである。

エジプト人は洪水を豫知する必要から早く天文氣象の研究をなし、曆が非常に發達した。今日、一年を三百六十五日として四年毎に閏日をおくのはエジプト人の創見にかゝる。

#### 第四 西南アジア諸國

【バビロニア・アッシリア】 バビロニアの文化はチグリス・エウフラテス兩河の賜といつてよい。兩河の間はメソポタミア平野といひ土地尤も肥沃であるから人民早くこゝに土着して農耕に従事した。

紀元前二三〇〇年頃ハンムラビといへる王が法典を編纂したといはれるから、少くともこれより一千年以前に文化が相當發達してゐたことであらう。この法典は頗る發達したもので舊約全書にあるヘブライ人の政治道德思想の先蹤であるといはれる。この國人も多神教を信じ尤も日月星辰を尊崇したから、天文の觀測を怠らず、星座表はバビロニア人の創見といはれる。圓を三百六十分すること及び一週を七日、一日を二十四時、一時間を六十分、一分を六十秒とすることもバビロニア人の創めたのである。

この地は廣大な平野であるから岩石木材がなかつたので、家屋は凡て粘土又は瓦を以て作り宮殿の廣大なことは驚くべきものであつた。文字は楔形文字であつて粘土の板又は圓筒にしるして燒き付けたから瓦文書とでも云ふべきである。

バビロニア人はチグリス川上流の山地に植民したが、前一三〇〇年頃植民地が獨立してアッシリアの王國を建て、八世紀にバビロニアを亡して大帝國を興したが、七世紀の頃、バビロニア人起るに及びアッシリア王國は爲に亡された。(前六〇)之を新バビロニア王國と云ふ。この王國は五三八年ベルシア王キルスに亡された。

アッシリア人は建築の上に木材又は石材を加へたけれども大體バビロニアと大差がないからこゝに説明を省く。

【ヘブライ】ヘブライ人ははじめバビロニアの地に住したが、異教徒から追放され、ヨルダン川の南バレスチナの地に移つた。其の後飢饉にあつてエジプトに逃れナイル川の下流ゴーセンに住した。舊約全書によればジョセフがエジプト王の信任を受けてこの地を與へられ、ヘブライ民族全部こゝに移住したが、後、大に蕃殖したのでエジプト王は之を恐れ臺にしようとした。然るに、ヘブライの族長モーゼ之を悟り、ヘブライ族を率ゐて逃げ出したが、埃及の兵之を追うて紅海の岸に至つた。この時、紅海の海水が左右に退いて一條の陸路が海底に現はれ、モーゼ等の一行は難無くアジア大陸に着することを得、モーゼはシナイ山上にて族人に十戒を授けた。かくてヘブライ族はもとのパレスチナに歸つてヘブライ國を建てはじめは族長政治を行つた。其の後王國となつたがダヴィッド・ソロモンの二王は尤も名高い。ソロモンの死後ヘブライ王國はユダヤ・イスラエルの二國に分れた

が、この民族をユダヤ人といふはユダヤ國の名から起つたのである。ユダヤ民族は多神教の間に立つて獨り一神教を信じ、唯一の天帝イエホヴァを信じた。これをユダヤ教といふ。イエス、クリストはユダヤ教を改革して現代の世界的宗教を創めたのである。ユダヤ民族の歴史もユダヤ教の教旨も皆舊約全書にくはしく載せてある。

【フェニキア】フェニキアはユダヤの北方、地中海に面してレバノン山脈を背景とする地方である。早くから多くの都市が海岸に發達したが、後各々獨立の國家をなすに至つた。幾多の都市國家が商業上のことから同盟を結んで有力な都市を盟主とした。中にもシドンとチルが最も名高い。

この地は細長い傾斜地で耕作に適しなかつたから、漁業・航海業が早く發達した。殊にレバノン山から船材を切り出すので、造船が盛に行はれ、地中海を乗りまはして沿岸到る處に商店を設け、植民地をおいて商業貿易を營んだ。また航海術に長じてジブラルタル海峡を超えて遠くアフリカの西岸ヴェルデ岬に至り西北はブリテン島にまで達したからアフリカの黄金・象牙・羊毛、イスパニアの銀、イギリスの錫を輸入し、自國産の紫染料・硝子・銅器を輸出した。

フェニキア人は埃及文字の中から簡易な文字二十余を探つて聲音を現はす文字を作つた。はじめ商人の符徴の用にしたのであるが非常に便利であるため、ギリシヤ人に採用せられ、後次第にヨーロッパ諸國に傳はつて今のアルファベットとなつたのである。

【ベルシア】 バビロニア以下の諸族は皆セム族であつたが、ベルシア人はアリア族に属し今のヨーロッパ人と同じ種族である。前六世紀の頃、キルスといふ英雄出でてまづ國內を統一し、ついでメチア王國・新バビロニア王國を亡して大帝國を立てた。其の子カンビセスは埃及を征服し、ダリウス一世に至り、東は印度川より西はドナウ川までを従へて空前の大帝國となつた。よつて全國を二十餘州に分ち各州に知事をおいて支配させたから中央集權制が始めて完成した。

ベルシア人にゾロアステルといふあり、世界は善神と惡神の争ひであるから人々は善神の保護を受けて惡神を滅さねばならぬと説いた。之をゾロアステル教又はベルシア教といひ、二元論に基いてゐるから又二元教ともいふ。この宗教は火を善神の分體として崇拜したから拜火教とも云ふ。今もベルシア・印度に行はれてゐる。殊にボンベイにはこの信者が十万人に近いといはれる。この宗教では地を惡の神の支配であるとして屍體を土中に埋むることを禁じた。又屍體を火又は水に投ずることは神聖を汚すものとして之を許さなかつた。其れ故屍體を塔の上に横たへおきヴァルチュアと云ふ食肉鳥の餌食にするのである。ボンベイにある墓地には多數のヴァルチュアを飼養して屍體を食はせるのである。つまり鳥の胃腸の中が天國とでも云ふべきものであらう。この屍體を載せる塔を靜寂塔といふ。

## 第二章 希臘

### 本章の主眼點及び取扱方

希臘の建國は東洋諸國と全く異なり、澤山の小さな都市國家から成り立つてゐる。而かも其の數は一時二百以上あつた。それ故、希臘の歴史を完全に知らんとせば、これ等多數の都市國家の歴史を調べねばならぬわけである。しかし其れは不可能であり、又無益のことであるから、單に其の代表たるアテネとスパルタの二國についての歴史を知ればよい。何故なればこの二國は指導者の位置に立つてゐて、幾多の都市國家はアテネ・スパルタの何れかの感化を受けてゐるからである。しかもアテネの政體は民主的でスパルタのは貴族政體であり、アテネは學問藝術に長じスパルタは勤儉尙武の風が盛で恰も兩極端である。希臘の歴史を取り扱ふにはまづこの主眼點を心得ねばならぬ。次に希臘は西洋文明の母といはれるほどで、文學哲學科學政治より建築彫刻に至るまですべて其の端緒をこゝに開いてゐるから希臘史を授ける時によくこれらの文化要素を説明しておけば近世史に至るまでよく領解し得るのである。唯宗教は多神教を信じクリスト教がまだ起らない頃であるから、これは中世以後に説明する外はない。

### 主要教材の解説



【希臘の國情】希臘の地は港灣に富み東方には數多の島嶼が庭の飛石のやうにつゞいて小アジアにまで列つてゐるから、海上の交通早く開け、埃及・フェニキア等古代諸國の文化を輸入して文化が著しく進んだ。殊に希臘人は獨創的知見に富んでゐるから、他の文化を輸入するに止まらずよく自己の特色を加へて新味を與へ、遂に西洋文明の先覺者となつたのである。

されど國內に山多くして交通不便であつたから、都市國家は各々獨立の行動を取り、相互に反目することさへ多かつたから、政治上の統一は全く無かつた。況して自由を尊ぶ民族性を以てゐたので、他のものから支配されることを嫌つてゐるから、常に烈しい競争をしてゐた。これがやがて文明の進歩を促すことにもなつた。

しかし希臘人お互ひが同一民族であり、同一の國語を有し同一の神を信ずると云ふ感じは持つてゐた。殊にオリンピアにあるゼウス神殿の前で四年毎に行はるゝオリンピック、ゲームには凡べての希臘都市から選手を出して優勝を競つたから、この間に選手間の交際もあり觀覽人同士が親しみ合ふこともあつて、知らずくゝ團結の氣運を促したのである。又デルフィに祭つてゐるアポロ神は、希臘人の最も崇敬する所で、私事でも公事でも自ら決定し得ない時は必ずアポロ神の神託を受けたのである。それ故、こゝには神託を告げる巫（イタ）をおいたし、神殿の修築祭祀の舉行などに關する協議をなす爲に宗教同盟を作り、關係各國から常設委員をおいた。この同盟によりても民族的の團結心

が養成せられた。これらの事情によつてたとひ政治的統一が無かつたにせよ、有事の日には一致團結することが出来た。

【スパルタ】希臘といふ名はローマ人のつけたもので、已等自身はヘレンの子孫であると思ひ、ヘレンスといひ、其の國をヘラスといつた。ヘレンスはドリッア・イオニア・アケイア・エーオリアの四つに分たれる。スパルタはドリッア族に屬しアテネはイオニア族に屬する。

スパルタは早くから尙武の氣象に富んでゐたが、リタルグスの憲法によつて國民は凡て軍事的訓練を受くることになつた。誕生の時まづ體格検査を受け病弱のものは山に棄てられる。七歳以後は國立教育所に寄宿し、三十歳まで共同生活をする。三十歳になれば家庭を作り貴族の列に入る。女子も體育を勵み愛國心を養成して良妻賢母たらしめることを期した。政體は貴族政體であつて平民、奴隸は勿論これらの教育を受けないし、政治に參與することも出来なかつた。二人の王あつて行政を掌り其の下に元老院と平民會とあつて政治を議したが、王の上には五人の監督官があつて毎年人民から選舉せられた。

【アテネの興隆】アテネははじめ王政であつたが、間もなく共和政體となつた。執政官（アルコン）九人は任期一年であつて行政を分擔する。四百名會と平民會があつたけれども、自由を尊ぶ平民は貴族のみが政權を握つてゐるのを憤り、不平であつた。紀元前六世紀の頃、ソロンといふ賢人出でて改革をし

たが、貧富によつて等差をつけたので平民の不平は癒されなかつた。其の後、一時僭主政治が行はれたけれども、紀元前五世紀の末、クリステネス出でてからすべての平民に參政権を與へ眞の民主政治となつた。これよりアテネは國民一致して國事に當り、學問藝術も次第に進歩して遂に西洋文明の母といはるゝに至り、スパルタと對立して希臘の兩中心となつた。小アジア海岸にある希臘植民地がベルシアに併呑せられてから、植民地人はベルシアの壓制を憤り遂に獨立の旗をあげ、本國アテネも之を助けた。(紀元前五〇〇年) ベルシア王ダリウス一世、大に怒りまづ植民地の亂を平けついで大軍を發して希臘に入寇した。第一回は四九二年、海陸兩軍を出したが、艦隊はアトス岬沖にて暴風に逢ひ、陸兵はトラキアの土人に擊破せられて引き返した。第二回は四九〇年で希臘人の内應によつて海路を取りアテネと背中合せなるマラトンの野に上陸した。アテネ大に驚き急使を馳せてスパルタに助を求めたが、援兵の到らざる前にアテネの勇將ミルチアデスが一万の兵を率ゐる謀をめぐらして十倍にあまる軍を擊破したので、殘兵は逃れ歸つた。

ダリウス一世は第三回遠征の準備中に死し、子クセルクセスは父の後をつぎ、海陸の大軍を出して入寇せしめた。時に紀元前四八〇年である。陸兵二百万と號す。ヘレスポント海峡に船橋を作り之を渡り終るに七日七夜を要したといはれる。希臘ではコリントに大會議を開き、アテネ・スパルタ一致して防ぐこととなり、スパルタ王レオニダスは一萬の兵を率ゐて北境テルモピレーの險を守

つた。レオニダスはベルシア軍を狹路に扼して大に敵を惱ましたが後敵軍間道より背後を衝くに及び、同盟國の軍を歸らしめ、スパルタの手兵三百と共に壯烈な最後を遂げた。

これよりベルシア軍は潮の如くアテネに入り、老幼婦女、難をサラミス灣内の諸島に避けた。灣内にはベルシアの戦艦七百余艘、ギリシアの艦隊と對峙したが、スパルタの將軍は恐れて遙に南に逃れて自國を守らうとした。テミстокレス之を憂へ、間者を敵に出して其の遁路を塞ぐべきことを密告した。之が爲にギリシア艦隊は袋の鼠の如く、今は窮鼠猫を嚙むの大勇猛心を起し、敵艦目がけて突進し、ベルシア艦隊は總崩れとなつて敗退した。陸上にあつて戦況如何にと凝視してゐたクセルクス王は、この様を見て色を失ひ、倉皇歸國し三十萬の大軍をマルドニウスに托して留めた。翌年マルドニウスの軍大敗し、同年海軍もミレー岬附近で全滅の悲運に陥つた。

祖國を累卵の危より救つたアテネは確に第一の戦功者であつた。従つてアテネは戦後優越の地位を占め、四七七年にはデルス同盟の長に推され同盟諸市より船艦又は金錢を徵收し大艦隊を作り共用の資金を管理することとなつた。英傑ペリクレスが出たのはこの時である。

ペリクレスは博學にして力強い雄辯家であり、大政治家であつた。まづデルス同盟本部をアテネに移しピレウス港を修築してアテネ市及びピレウス間に城壁を圍らし外敵の侵入を防いだ。又一代の名匠を集めてアクロポリス丘にあるバルテノンの神殿を修築し建築彫刻の粹を集め丘腹には劇場

を立て、エスキルス・ソフォクレス等の創作劇を上場せしめて市民に観覽せしめた。文學者技術家この時に輩出してギリシアの文化は黄金時代を現出した。

【ギリシアの衰微】 スバルタはアテネの隆盛を妬み、紀元前四三一年植民地のことより兩國戦を開き、ギリシアの諸國は兩國の何れかについて戦つた。之をペロポネス戦役といふ。スバルタはアテネを包圍しアテネは城壁に籠つて固守したが、悪疫起つてペリクレス以下城中の者約四分の一は斃れてしまつた。スバルタも海上より本國を攻撃されたので、十分兵を送ること能はず、四二一年兩國間に休戦條約が結ばれた。されど間もなく戦が再開せられ、アテネの海軍はスバルタの將リサンドルの爲に全滅の厄に逢ひ、前四〇四年アテネは降参しデルス同盟を解散した。

この後スバルタがアテネに代つてギリシアの覇權を握つたが、到る處に貴族政體を強いたので不平を抱くもの多く、民主主義を抱いてゐるテーベの爲に覇權を奪はれた。

テーベはエオリア族の建てた國である。エバミノングラス・ペロピダス等はスバルタの壓迫に堪へず、一時、アテネに逃れたが、同士と共に農夫に假裝してテーベに入り、まづスバルタの守兵を驅逐し、前三七一年にレウクトラの戦にスバルタの大軍を粉碎して民主政體を建て、スバルタに代つてギリシアの覇權を握つた。されど、後九年マンチネアの戦にエバミノングラス戦死してより、テーベもまた衰へ、これより希臘諸國次第に衰へ、北方にマケドニア王國興るに及んで之に併呑せられた。

【アレクサンドル大王】 マケドニアは久しく希臘人から北方の蠻族と卑しめられてゐたが、フィリップ二世立つに及び希臘の文化を輸入し、殊にエバミノングラスに學んで軍制を改良して密集長槍隊を創設した。歩兵を十六人宛の正方形に並べ各人に約二十尺の長槍を持たしめ、前後左右に轉換して敵と戦ふから恰も移動する砲臺の様であつた。

フィリップ二世はまづ外交手段を以て希臘人を懐柔したが、獨り雄辯家デモステネスは其の野心を看破して北方の獅子の恐るべきを説き、前三三八年遂に同盟軍を作つてマケドニア軍とケーロネアに戦つたが、大敗したので、希臘はマケドニア王の權下に服することになつた。

フィリップ二世の子アレクサンドル大王は非凡の英主であつた。少時アリストールの教を受け、二十歳を以て王となり、まづ希臘の内亂を鎮め、前三三四年の春四萬五千の兵を率ゐて東征の途に上つた。

東征の順路は地圖に示す通りである。中にもグラニクス川の戦、イッソスの戦、アルベラの戦は三大戦といはれる。ペルシア王ダリウス二世は六十萬の大軍を以てイッソスに迎へ撃つて大敗したので、復讐の念已みがたく、百萬の兵を以てアルベラに陣した。大王はイッソスの戦後、フェニキアに至りチルス市を破壊して希臘の商敵を亡し埃及を征してナイル河口にアレクサンドリア府を創設し、更に引き返してペルシアに向ひアルベラの戦に大勝してペルシアに致命傷を與へた。大王はこれ

より中央アジアの南部に至り印度河を渡つてパンジャブの地を侵したが、將士歸國を欲したので印度河の河口から海陸に分れて西に歸り、パピロン城に入り前三三三年熱を病んでここに死んだ。

大王はまづダリウス三世の女を娶り、將士一萬人にペルシア婦人を娶らしめて人種の融合を図り、習慣・儀式等はペルシアの風に倣ひギリシアの學者藝術家を各地に移住せしめてギリシア文化を普及せしめ、政治的に統一するのみならず、東西文化を融合せしめんとしたが、業半ばに死んだのは惜むべき限りであつた。大王の死後、大帝國分裂しマケドニア・シリア・エジプトの三國となつたが、何れも希臘文化を傳承して學藝大に發達した。之をヘレネス文化といふ、中にもエジプトのアレクサンドリアには一大圖書館あり、五十余万冊を蔵してゐたから、各國の學者ここに集まつて研究し、學者の淵藪、學問の中心地となつた。

【希臘の文化】希臘人は藝術的天分を有し、美に對して敏感であつたから最も美術工藝に秀でてゐた。殊に大理石に富んでゐたので、建築彫刻は尤も發達し永く後世の模範となつた。

建築はペリクレス時代の頃ドリア式・イオニア式が行はれたが、アレクサンドル大王の頃からコリント式が新たに起つた。この三様式は希臘建築の要素であるばかりでなく、西洋建築の要部をなしてゐる。

彫刻は變化に富み神像ばかりでなく多くの肖像を作つたが、今に残つてゐるものも少くない。

建築家にはイクチメス、彫刻家にはフィヂアス・ブラクシテレスなどが優れてゐる。

國語は希臘人のあらゆる創作の中で最も美しいものといはれる。この美しい國語で美しい詩歌戯曲を書いたから、希臘文學は世界中最も卓越したものといつてよい。最初に起つたのは叙事詩で、ホーマーはイリアッド・オヂッセイの二大編を作つた。イリアッドはトロイ戦争の勇壯を歌つたものである。ヘシオズも叙事詩を詠んで名高い。叙事詩について叙情詩が起つた。ビンダルスや女詩人サッフォーが名高い。ペリクレス時代には劇詩の大家が現はれ、悲劇家にはエスキルス・ソフォクレス・エウリピデス、喜劇家にはアリストファネスが最も名高い。喜劇は日常の生活政治上の失敗などを滑稽的に諷刺したのが多い。

最後に散文が現はれた。前六世紀の頃、イソップは寓話を書いたが、前五世紀頃にはヘロドツスがペルシア戦役史を書き、史學の父といはれ、ツキチデスはペロポネス戦役史を書いた。

希臘人は思案に耽つてゐる間に宇宙の本體は何かを研究し後には人間の本性をも研究するやうになつた。ソクラテスは汝自身を知れと説き知行一致説・良心説を立てた。ソクラテスの門人プラトンは人間の理性並びに理想的國家について説いた。プラトンの門人アリストートルは希臘哲學を大成し數學・物理學・倫理學・政治家等あらゆる科學を創めたが、殊に學問研究の方法として論理學といふをはじめ一つの前提(真理)から他の結論を引き出す方法を案出した。三段論法といふはこれだ

ある。

### 第三章 羅馬

#### 本章の主眼點及び取扱方

羅馬の建國はアテネ・スパルタの建國よりほんの少し後れたのみであるけれども文化發達の程度は遙に後れてゐた。これは羅馬史研究の權威者モムゼンの言ふ如く地形上、羅馬と希臘は背中合せをしてゐたから羅馬の希臘文明と觸接することが甚だ遅かつたことが主な原因であらう。地形上、背中合せをしてゐると云ふは希臘の地形が東方に港灣多くして文化早く發達したるに反し、羅馬は東方に港灣少くして文化發達せず、寧ろ西方に向つて發展したことを意味するのである。

國民性から見れば希臘人が思索に耽るのに反して羅馬人は實際的で法治生活を喜んだから、哲學・文學は發達しなかつたが、法律學に於ては後世の模範となり、土木建築の如きも實用的な宏壯堅牢のものを考案した。又羅馬には家族制度が發達して統治從順の美風が馴致せられて一家一國といふ團體生活を好んだから國運の興隆するに及び強大な國家を作り地中海を包容する一大國を建設して凡て之を羅馬化するに至つたのである。これらは大に希臘人と其の趣を異にしてゐるから教授の際生徒をしてよく比較對照せしむることが肝要である。

#### 主要教材の解説

【羅馬の興起】 羅馬はもとチベル川の下流沿岸にある小都市から起り次第にイタリア半島にある都市國家を併合し、最後にアジア・アフリカ・ヨーロッパの三大洲に跨る大國となつてもこの小都市の名を其のまゝ國名とするに至つた。故に羅馬建設の歴史は取りも直さず羅馬市の建設史である。羅馬市は前七五三年ロムルスが建設したと云はれる。はじめロムルスは弟レムスと共に山林に捨てられ狼に育てられて成長し二人でチベル川の涯にあるバラチン丘に城廓を立てたが後不和となり、兄ロムルスは弟レムスを殺して己の名を以て都市に名づけたと云ふ。これがラテン人の祖である。其の後、エトルリア人とサビニ人が附近に來り住し共同して國家を作り上げた。はじめの二百余年間に七人の王が相尋いで立つたが、前五〇九年市民は國王を廢して新に共和政を立て貴族の中から統領二人を選んで行政・軍事・司法を統べしめた。されど平民は貴族の專横を怨んで反抗し、四九四年遂に聖山に立てこもつて新都を立てようとした。元老院議員アグリッパが身體諸器官の有機的なるに喩へて平民に諭し平民より護民官を出すべきことを約し和睦してローマに歸つた。これより先、王政時代に元老院・貴族會及び兵員會の三つを設けたけれども何れも貴族のみが選出せられる規定であつたが、この頃より平民會が設けられこの後貴族會は有名無實となり、貴族平民が一樣に參政權を行使することになつた。それでも尙貴族が平民を壓迫することが多かつたから前四五〇年平

民は貴族に強請して十二銅表を發布させた。これが成文律の始である。其の後、前三六七年に至りリキニウス法案が作られて統領其の他の官吏は其の半數を必ず平民より出すこととなり、行政上司法上共に貴族・平民が全く同等となり國民一致して國事に盡すやうになり、次第に勢力を半島内に伸ばし最後に前二七二年希臘植民地の盟主タレントゥムを陥れてイタリア全半島を統一するに至つた。一小都市が次第に膨張してこゝにイタリア全半島までに擴張されたのである。

【外國征服】 イタリア半島の統一を遂げたる羅馬が海外に勢力を伸ばすべきは自然の勢である。この頃、フェニキアの植民地たるカルタゴは強大なる獨立國として西地中海の制海權を握り、コルシカ・サルチニア並びにシ、リー島に勢力を張つてゐたから、羅馬が海外に發展せんとせばまづカルタゴと雌雄を決せねばならなかつた。前二六四年この二強國はまづシ、リー島に於て衝突した。これがポエニ戰役の始である。第一ポエニ戰役は前二六四年から二四一年迄、第二ポエニ戰役は前二一八年から二〇一年まで、第三ポエニ戰役は前一四九年から一四六年までつゞいた。第一戰役にカルタゴ敗北して和を請ひシ、リー島を抛棄し莫大の償金を出すことを約した。これよりカルタゴは勢力を挽回せんとしハミルカル、バルカスをしてイスパニアに入つて土地を拓き兵力を養はしめ大に富強を増した。バルカスの子ハンニバル大志あり父の遺志をついで羅馬に報復せんとし、前二一八年七萬の兵を率ゐてイスパニアを發しピレネー山をこえてフランスに攻め入り、更にアルプスの

大山脈を越え、風雪に阻てられ土賊に脅かされて多くの將卒を失ひポー川の平原に達した時は、三萬にも達しなかつた。されどこの地の土人は羅馬を怨んでハンニバルの軍に投じたから忽ち五六萬の大兵を得たる處に羅馬軍を破り遂にカンネーの大戦(前二一六年)に羅馬軍の主力を粉砕した。されど其の後羅馬はコルネリウス、スキピオをしてカルタゴの本國を侵さしめたので、ハンニバルは急いで歸國し、前二〇二年ザマに戦つて敗北し、後アジアに逃れ去つた。翌年カルタゴ和を乞ひイスパニアの地を割き莫大の償金を出し羅馬の許可なくして外國と開戦せざることを約した。

其の後、カルタゴは銳意國力の恢復を圖つたが、羅馬の元老院議員老カトーはカルタゴの殷盛を見、「カルタゴ滅さざるべからず」と絶叫して已まなかつた。其の後羅馬はカルタゴが條約に背いて隣國ヌミチアと戦へるを口實として前一四九年兵を出し、スキピオ、エミリアスをしてカルタゴ市を包圍せしめた。カルタゴの市民は羅馬の無情を怒り國に殉せんことを期し、老幼男女を併せて七十七萬人、一齊に立つて敵を防ぎ凡ての鐵器を熔かして刀劍を作り、婦人は髪を切つて弦となし、三年に亙つて抗戦したが、前一四六年力盡きて遂に滅亡した。これが第三戰役である。かくてこの民族は全く亡び羅馬はアフリカ縣とした。

羅馬はこの間に三たびマケドニア王國を征し、カルタゴ滅亡の年遂に之を亡し又コリント市を毀つて希臘の商業に最後のとゞめを刺した。是より先、前一九〇年には、シリア王の軍をマグネシア

に破つて小アジアの地を割かしめたから羅馬の勢力は東方にまで擴まり是より隆盛に赴いた。

外國征服の結果征服地より多くの分捕品償金貢物等が羅馬に入り、天下の富羅馬に集まつたから市民は漸く奢侈遊惰に流れ奴隷が著るしく増加した爲に農民は競争に堪へずして貧困となり遂に家産を失つて浮浪の身となつて羅馬に集中して來たので今や羅馬には中産階級全く亡びて富民と貧民との二階級となり、富民と貧民の争次第に烈しくなり、遂に各黨を立て、對抗し未曾有の内亂を醸したのである。

貧民の爲に社會を改良せんと企てたのはグラックス兄弟を魁とする。されど二人共に富民黨に忌まれて何れも殺された。しかし之を導火線として貧富兩黨が公然政權を争ふこととなり羅馬は戰亂の巷となつた。貧民黨はマリウスを首領として富民黨と争つたが、富民黨はスラを首領として之に對抗し、スラをして東征の功を成さしめ最後にマリウス黨を殺戮してしまつた。これよりスラは終身のチクタトルに擧げられて富民の勢力は次第に強くなり、共和政治の實は漸く失はれてしまつた。【ケーザルの業】 スラ死して後、富民黨はボンベイウスを首領としたが、後ボンベイウスの武勳赫赫たるを忌んで之を除かうとした。この時ケーザルは貧民黨の首領として人望高く富豪クラッパスもグラチアトル(鬪者)の亂を平けて武功を立てた。これらの三人は意氣投合して三頭政治を作り羅馬の政權を彼等の手に收めた。之を第一回三頭政治といふ。(前六〇年)かくてケーザルはガリア、

クラッパスはシリア、ボンベイウスはイスパニアの太守として任地に赴くこととなつたが、クラッパスはバルチアと戦つて敗死し、ケーザルはアルプス大山脈を越えてガリアを征服すること八年、其の武功は一世を驚かし市民敬慕的となつた。ボンベイウス之を見て嫉妬の念禁する能はず、元老院の命令を以てケーザルを召喚し、軍隊を解散せしめんとした。ケーザル之を聞いて急ぎ歸國し、ルビコン川を渡るに臨み「運は天に在り」と叫び、軍を率ゐて羅馬に攻め入つたところ、市民は歡呼してケーザルを迎へたので、ボンベイウス等は狼狽して元老院黨と共に東方に逃れた。ケーザルよつてボンベイウスを逐うてテッサリアに至り、ファルサルスの戦に之を撃破し、逃ぐるを逐うてエジプトに入つたが、土人はボンベイウスの首を取つてケーザルに獻じた。ケーザルは流石に暗然として涙を垂れたといふ。ケーザルはそれより小アジア・イスパニアの叛亂を平けて羅馬に凱旋したのは前四五年である。

凱旋の後、ケーザルは終身のチクタトルとなり、インペラトルの稱號を受けて文武の大權を一身に収め、大に政事上の改革を圖り、又エジプトの曆を採用した。故にこの曆をユリウス曆といふ。十六世紀の改正前まで全歐に行はれ、露國は最近の革命(一九一七年)までこの曆を用ひた。然るに共和政の熱愛者ブルッスは野心家のカッシウス等に嗾かされ共謀してケーザルを元老院に刺さうとした。ケーザルはじめ鐵筆を以て防いだが親友ブルッスの手に懐劍の閃くを見、「汝ブルッスもか」

といひ、上衣を以て顔を蔽ひ刺さるるがままにして斃れた。前四四年のことである。

【帝政の盛時】 ケーザルを葬むる日、マルクス・アントニウスはケーザルの徳を頌して共和政の破壊者にあらざることを演べたので、市民は激昂してブルツス等を仆せと叫んだ。ブルツス等大に失望し禍の我が身に及ばんことを恐れて東方に逃れた。ついでアントニウスはケーザルの養子オクタヴィアヌス及び將軍レピダスと共に第二回三頭政治を作り(前四三年)間もなくブルツス等をフィリッピの野に亡した。これよりアントニウスは希臘以東を、オクタヴィアヌスはイタリヤ以西を、レピダスはアフリカを領することとなつたが、レピダスは間もなく除かれ再び二人の争となつた。アントニウスはバルチアとの戦に敗れてよりエジプトに入り女王クレオパトラの色に迷ひて其の妻オクタヴィア(オクタヴィアヌスの妹)を離別し遂に東方の羅馬領をクレオパトラの子(ケーザルの子と稱するもの)に與へんとした。オクタヴィアヌス大に怒り大軍を發してアントニウスを征したるにアントニウスはクレオパトラの艦隊と連合してアクチウムに陣した。オクタヴィアヌスは大に之を破り逃ぐるを遂うてエジプトに進んだ。アントニウス・クレオパトラ相ついで自殺しエジプト王國ここに亡びた(前三〇年)

オクタヴィアヌス凱旋の後、アウグスツスの尊號を受けついでインペラトルとなり統領・護民官・元老院議長等のあらゆる要職を一身に集めて政權を獨占したが、ケーザルの横死に鑑み方めて

共和政體の假面を装つた。しかし其の實は彼の獨裁する所であつて共和政は形式のみに止まつたから、歴史家はこれ以後を帝政時代といふ。アウグスツスは帝都を壯麗にし自ら誇つて瓦造の羅馬を受けて大理石造の羅馬を後世に残したと云つた。この頃、學問・藝術も盛に起りヴァーヂル、ホラチウス・オヴィヂウス等の文人輩出してラテン文學の黄金時代を現出した。

【帝政の衰微】 この後二百年ばかりは賢君時に出でて國運なほ隆盛を極めたが、二世紀の末より漸く衰へた。一二六年にはベルシア王朝新に起つて、バルチアを亡し羅馬の東境を犯し又北方よりゲルマニア民族來寇して屢々帝國を苦しめた。これより、軍人益々跋扈して廢立を恣にし、二十九帝の中、終をよくしたものは五君に過ぎなかつた。

紀元二八四年チオクレチアヌス帝立つに及び、頽勢を挽回せんとしてアウグスツス以來の共和政の假面を脱ぎ棄て、東洋風の尊大なる態度を以て人民に臨み、衣冠を莊麗にして皇帝を絶對無限の權力者と仰がしめたから、これより名實共に君主專制の國體となり、衰運に傾いた羅馬に新生命を與へた觀があつた。されど帝の企てた二皇帝二副王に分治せしめた四分政治は失敗に終り、帝の死後間もなく争亂が起つた。コンスタンチヌス大帝はまづ天下を征服して一統の政治を布き都をビザンチウムに奠めてコンスタンチノーブルと改名し(三三〇年)全國を十余州に分ち地方官を出して之を治めしめた。



大帝の死後再び内亂を生じたが、テオドシウス一世は一たび之を一統し、後天下を兩分して二子に分け與へ、長子アルカヂウスを東羅馬、ホノリウスを西羅馬の皇帝たらしめた。東羅馬帝國はこれより一千余年間つゞいたが、西羅馬帝國は四七六年蠻族の爲に亡された。この時を上古史の終とす。

【基督教の起】 イエス、クリストは前四年十二月二十五日(クリスマス祭)ユダヤの國イエルサレムの附近ベトレヘムに生る。父をヨセフ母をマリアといふ。廿九歳の頃自ら天帝の使者と稱して説教しクリスト教を創めた。人民は歡喜して救世主即ちクリストと呼んだ。然るにクリスト教はユダヤ教と異なりユダヤ民族の爲の宗教でなく博愛主義四海兄弟主義であつたから、ユダヤ人は彼を虚言者と罵り羅馬の官吏に訴へたのでクリストは遂に十字架上に磔殺せられた。紀元三〇年春分の頃である。

クリストの教義は新約全書にくはしい。「人類は愛を根本とす」といひ、「平和の世界、神の王國を現出せよ」と説いてゐる。四海兄弟主義博愛主義は實に人類史上始めて見る所であるから之を人類發達史の一段階と云つてよい。

クリストは十字架上に磔殺されたけれども其の使徒等は熱心に師の福音を傳導した。中にもペートルとポールとは羅馬に來つて布教した。羅馬法王はペートルの後繼者と稱して其の墓所に立てられたセント、ペートル寺を護つてゐる。

羅馬時代の皇帝はクリスト教徒が羅馬の神殿の前に拜跪せざるを見てローマの宗教を破壊するものとして之を壓迫したから信徒は非常な迫害を受けた。けれども信仰心は之が爲に益々強くなり、コンスタンチヌス大帝立つに及び大帝の母ソフィア信仰最も篤く又大帝が戰勝を祈つた時、夕陽に十字架現れたるを以て大に喜び之を旗印として大勝を博したので、大帝はクリスト教徒の爲に寺院を立て、三一三年勅令を發してクリスト教を公許しついで三二五年小アジアのニケーアに宗教會議を開いてアリア派を排しアタナシウス派を正教と定めた。アリウスはクリストは神にあらずといひ、アタナシウスはクリストは神と同體なりとし三位一體の説を奉じてゐる。其の後テオドシウス一世の時、クリスト教は羅馬の國教となり、全國民に信仰せらるるやうになつた。

【羅馬の文化】 羅馬は家族制度を重んじ家名を尊び祖先を崇拜し家長權は絶對無限のものとして之に服従した。かくて團體的精神著るしく發達し個人よりも家、家より國家を重んずるに至り、國家觀念が最も鞏固のものであつた。國家を維持するには秩序を守り法律を遵守せねばならぬから、國家的觀念と法的精神を結びつけてここに羅馬魂をなしたものである。

羅馬法は始めは習慣法によつたもので、前四五〇年、十二銅表が出來てから成文律が次第に發達し、多數の異民族を統一する爲に規則法令を定めて法律は完全に發達した。殊に共和政末葉より帝政時代にかけて法律學者輩出し、法理學も起つた。三世紀にガイウス・パピニアヌス等の學者は判

官の訓令、判決例及び勅令・伺ひ指令等を整理編纂して羅馬法を完成した。

希臘人が理想的藝術的國民なるに反し、羅馬人は法的實際的の國民であつたから建築土木の如きも規模宏大にして堅牢無比のものを尊び、エトルリア人の穹窿形様式を利用して希臘の圓柱様式を巧に混和した。公會堂・神殿・半圓劇場・大競技場・凱旋門・水道など、羅馬市の内外に聳えた。文學は發達しなかつたけれども、アウグスツス時代は羅馬文學の模倣から脱して堅實雄健なる特徴を發揮するに至り、ヴァーギル・ホラチウス・オヴィヂウスは三大詩人といはれる。この時を羅馬國民文學の黄金時代とする。其れ以後間もなく衰へ、トラヤヌス帝以前までは銀時代、其れ以後は銅時代といはる。

羅馬人の政治生活に演説は重要な武器であつたから、雄辯術及び修辭學が最も發達しホルテンシウス・キケロは最も名高い。

#### 第四章 上古に於ける東西二大帝國の崩壞

##### 本章の主眼點及取扱方

上古の末、東方の後漢と西方の羅馬帝國とは前後して崩壞した。即ち後漢は二二〇年に亡びて三國鼎立の世となり四三九年南北朝對立の世となり西羅馬帝國は四七六年に滅亡した。而かも帝國滅

亡の後は何れも他の蠻族の爲に蹂躪せられて土崩瓦解するに至つた。この兩帝國の滅亡については其の間に、何等因果關係の有るわけでは無い。唯東西其の軌を一にすると云ふ點に於て觀念が聯合されるのみである。しかし兩者を比較對照することは尤も興味あることである。此にあつては黄色人種中のトルコ族・チベット族・蒙古族即ち五胡の侵入であり、彼にあつては白色人種中のゲルマニア民族の大移住であつた。五胡の侵入は山崩れが崩壞した岩石を以て豊饒な土地を埋没した如くであり、ゲルマニア民族の大移住はナイル川の洪水が土壤を持ち來つて肥沃の土壤を沈澱せしめたる如きものであつた。故に五胡の侵入、南北朝の分立は文化の衰微退歩を來したに過ぎなかつたが、ゲルマニア民族の大移住は一時舊文化を破壊しても更に新要素を加へて遂に近世文明を作り上げたのである。これが東西兩洋の歴史に大きな相違を來した所以である。上古の末には、東西の兩文化は僅に接觸したと云ふに過ぎずして中古末以後に於ける如く或は衝突し或は融合するやうのことは殆ど認められなかつた。唯僅に中央アジア及び印度に於て希臘文化の影響を受けたことが注意すべきことである。

最後に上古史總括の取扱について一言する。上古史とは紀元四五世紀ごろに至るまでを云ふのであるが、中古史に入るに先だつて上古史を概見せしめる必要がある。勿論總括にとめてあまりこまかなことに涉らぬがよい。譬へば或る港の地形を概觀するに丘陵の上から見渡すやうな者である。

あまり細かい街區などに注意せずに港灣の方向位置形状等の大體を概観するに止めるがよい。故に上古史ではまづ第一東洋文明の二中心即ち支那・印度の文明の關係について確實な智識を得させる。次に西洋文明の二中心即ち埃及と西アジア諸國の文明が接觸融合して遂に希臘羅馬の文化を形づくるに至れる徑路を知らしめる。かくて後、東西兩文明の接觸が上古の末頃即ち後漢と羅馬帝國との間に行はれたことを述べて藝術等に及せる影響を概見せしめる。最後に我が國との關係であるが、我が文化は尙幼稚であつて世界歴史の舞臺に現はれるに至らなかつたから、唯漢學佛敎の傳來した年代を支那及び羅馬の歴史に引きあて、説明するに止めてよい。

### 主要教材の解説

【漢滅亡後の支那】 後漢の靈帝の時、學者陳蕃・李膺等は同志と謀り宦官の害を除かんとしたが、謀泄れ宦官等は黨人七百余人を禁錮した。之を東漢黨錮の禍といふ、ついで袁紹は兵を發して宦官二千余人を殺し、宦官の禍これより除かれた。されど群雄この頃より四方に蜂起して天下は大亂となつた。黃巾の賊まづ起り、董卓は少帝を廢し獻帝を擁して都を長安に遷したが、卓は間もなく臣下に殺された。獻帝逃れて洛陽に至るや曹操兵を率ゐて入朝し、帝を許(河南省)に遷し、帝を挾んで天下に號令し、黄河の南北を征服しついで南方を經略せんとして劉備と衝突した。

劉備は漢の景帝の裔で夙に大志を抱き漢室の興隆を圖り關羽・張飛と兄弟の交を結んだ。三たび諸

葛亮(孔明)を草廬に尋ねて之を輔佐とし、「我の孔明あるは魚の水あるが如し。」と云ふに至つた。曹操八十万の大軍を率ゐて來り攻むるや、孔明備に勸めて吳の孫權と同盟せしめた。孫權はその意氣に感じ共に軍を出して曹操の軍と赤壁(湖北省)に戦つたが、周瑜、兵三万人を率ゐて江を溯りて敵を攻撃した。部將黃蓋は戰艦十隻に枯れ柴を載せ油を灌ぎ走舸を其の尾に繋ぎ旗を立て、降を乞ふまねしで敵に近づき、急に火を放つて敵艦に突入し敵艦を焼き盡したから、敵軍狼狽して爲す所を知らず、周瑜・劉備の軍水陸より之を攻め、操大敗し身を以て免れた。西紀二〇八年のことである。これより劉備は巴・蜀・漢中の地を取り、孫權は江南に、曹操は江北を領して天下三分の姿となつた。

二二〇年曹操死後子丕、自立して帝となり國を魏と號し、翌年劉備帝位に即き漢室を再興した。蜀漢の昭烈帝は是である。やがて孫權も建業(今の南京)に都し國を吳と號した。これを三國といふ。

昭烈帝の死後、諸葛亮は後主禪を輔け必ず漢室を恢復せんとし、屢々出でて魏を伐つたが、魏は依然として強く其の將司馬仲達がよく防いだから、孔明は志を得ずして陣没した。孔明が出陣の時後主に上表した前後二回の出師表は後世から誠忠發露の至れるものとして讀誦せられる。又劉備の友關羽は備と苦樂を終始し、忠義を以て著はれ永く武運の神、幸福長壽の神として崇拜せられ、今も支那到る處に關帝廟が建られてある。

魏の司馬仲達は死諸葛、走三生仲達、との笑を後世に遺したけれども、よく蜀漢の來寇を防いで功

あり、孫司馬炎に至り、遂に自立して帝となり、國を晉と號し後に吳を亡して其の地を併せ、一時支那を統一した。之を西晉といふ。されど子惠帝の時、八王亂を起し骨肉相殘害すること十余年に及んだ。この頃學者は多く清談に耽つて一人の國事を憂ふるものなく、無爲恬淡を尙び、奇行多く虚名を事とした。竹林の七賢は尤も名高い。

かく漢族の元氣衰へたるに乘じ、匈奴(トル)塞内に侵入して遂に洛陽を取つて懷帝を虜にし、ついで長安を陥れて愍帝を虜にして共に之を殺し自ら漢王と稱した。漢は後に趙と改めた。之を前趙といふ。この時、可馬懿の曾孫司馬睿は建康(元の)に都して帝と稱し僅に江南の地を領した。之を東晉といふ。東晉は百余年の國祚を保つた。

江北では、其の後、匈奴の別種羯の酋長石勒、自立して後趙を立て、鮮卑(蒙古族)の酋長慕容皝は前燕を建て、氏(チベット族)の酋長苻健は前秦を立て各、王と稱して興亡相ついだ。中にも苻健の姪苻堅は賢相王猛を用ひて江北の地を一統したが、更に東晉を亡して支那を一統せんとし九十万の大軍を率ゐて南征した。東晉の名相謝安の姪謝玄は約九方の兵を以て淝水(安徽省)に邀撃して大勝を得た。苻堅は身を以て免れ前秦これより衰へ、慕容垂自立して後燕を立て羌(チベット族)の酋長姚萇は後秦を立て、前秦の地は四分五裂した。かくて蠻族の國を建つるもの前後十六國に及んだから之を總稱して五胡十六國といふ。其の興亡表を左にかゝる。

漢族	蒙古族	チベット族		トルコ族		種	國號	始祖	國都	興	亡	滅したる國
		羌	氏	羯	匈奴							
前涼 西涼 北燕	南涼 南燕 西秦 後燕 前燕	後秦	後涼 前秦	後趙	北涼 夏	漢(前趙) 北涼	劉淵 沮渠蒙遜 赫連勃勃	平陽(後長安) 張掖(甘肅省) 統万(陝西省)	三〇四 三九七 四〇七	三二八 四三九 四三一	後趙 後魏 後魏	
張重華 李暠 馮跋	慕容皝 慕容垂 乞伏國仁 慕容德 秃髮烏孤	姚萇	苻健 呂光	石勒			成都 長安 姑藏(甘肅省)	襄國(後鄴)	三一四 三五一 三八六	三四七 三九四 四〇三	東晉 後秦 後秦	
姑藏 墩煌(甘肅省) 龍城(內蒙古)	龍城(後鄴) 中山(直隸省) 宛川(甘肅省) 廣固(山東省) 廉(甘肅省)後樂都	長安							三八四	四一七	東晉	

五胡の中、鮮卑の拓跋珪、勢最も強く、平城(山西省)に都して帝位に即き國を魏と號した。之を後魏の道武帝といふ。孫太武帝の時、諸王國を亡して江北を一統し、孝文帝の時、都を洛陽に遷し姓を元と改め、胡服胡語を禁じ禮樂を制し制度を定めたから、これより漢風に化した。されど之が爲に文弱の弊起り、國勢も次第に衰へた。孝武帝の時、大丞相高歡は帝を逐うて孝靜帝を立てたから孝武帝は長安に入つて宇文泰にたよつた。これより西魏・東魏に分れたが、後、高歡の弟高洋自立して帝となり國を北齊と號し、宇文泰の子宇文覺は西魏に代つて帝となり國を北周と號した。

これより先、東晋は淝水の戦後、國勢次第に衰へて内亂起り、劉裕之を鎮定して大功を立て終に篡立して國を宋と號した。これより宋を南朝、後魏を北朝といふ。宋は八帝六十年にして齊の祖蕭道成に亡され、齊は七帝二十四年にして梁の祖蕭衍に亡され、梁は四帝五十五年にして陳の祖陳霸先に亡された。

北周の宰相楊堅は北齊を亡して功あり、遂に篡立して國を隋と號し兵を江南に出して陳を攻め亡し、南北を合一した。陳は五帝三十二年にして亡び、後漢の滅亡後、三百七十年、南化分立後、百八十年にして支那は始めて統一せられた。

【ゲルマニア民族の羅馬帝國侵入】トルコ族は久しく支那の西北方にあつて絶えず塞内に侵入し秦漢の諸帝を苦しめ支那人は匈奴と呼んだ。然るに三國以後、支那の帝威弛むに乗じて蒙古族、チベッ

ト族も漸く支那の西境及び北境を侵し西晋以後は競うて江北に國を建つるに至り、所謂五胡十六國の興亡を見るに至つたから、トルコ族は其の競争に堪へずして西へ西へと移住し、茲に東歐に住してゐたゲルマニア民族は其の壓迫を避けて東羅馬帝國内に侵入した。かくてゲルマニア民族の大遷移始まり、西洋歴史に一轉機を見たのであるが、ゲルマニア民族はトルコ族を呼んでフン(匈奴)といつた。

はじめゲルマニア民族は今のドイツを中心として北ヨーロッパに位し、ゴート・フランク・ヴァンダル・アングロ、サクソン・ブルグンド等に分れてゐた。中にもゴート族は東西に分れ、東ゴートは裏海と黒海との北岸に居を占め、西ゴートは其の西に住し黒海の西北岸に住んでゐた。然るに三七五年ヴォルガ河畔にゐたフン族が東方から潮の如く侵入してきたので、多く之に降り、西ゴートは南に走り羅馬帝の許可を得てドナウ川の南岸モエシアに移住した。西ゴート帝國は疲弊して軍備が大に弛んでゐることを看取し縦横に國內を荒して希臘半島を過ぎて、遂にイタリアに迫つた。因つて羅馬帝は之を防がが爲にガリアの守兵を撤退したから其の虛に乗じてドイツ地方にゐたゲルマニア民族はライン川を渡つて帝國內に侵入した。即ちフランク人は今のフランスの地に、ブルグンド人はライン川上流地方に、ヴァンダル人は今のイスパニアの地に、アングロ、サクソン人はブリタニア島に侵入してそれら各王國を建てるやうになつた。

西ゴートの酋長アトリックは羅馬市に入つて金銀財寶を掠奪したが、間もなくアトリック死し同族相率ゐて西に向ひ、ヴァンダル人を逐つて茲にゴート王國を建て(四一五年)イスパニア及びフランスの西南部を領したが、後フランク人に逐はれてピレネー山北の地を棄て、八世紀の始、サラセン人に亡された。西ゴートに逐はれたヴァンダル人は北岸カルタゴの故地に移つてヴァンダル王國を建てた。(四二九年)

【アッチラ王國】 フン族は其の後次第に勢力を西方に張り、酋長アッチラはドナウ川とバルト海との間を占領して一大王國を建て、更にガリアに侵入した。羅馬帝の勇將アエチウスはゲルマニア諸民族の聯合軍を率ゐてアッチラの軍とシャロン附近に戦つて大に之を破つた。それよりアッチラは南に進んでイタリアに侵入したが、兵士は疫病の爲に惱まれ、自らも病に罹つて死んだので、其の王國は瓦解した。

【西羅馬帝國の滅亡】 西羅馬はアッチラの侵略を免れたけれども、打ちつゞく内憂外患に悩まされ皇帝は傭兵の手によつて守られてゐたが、四七六年傭兵の長オドアケルに亡された。建國以來一千年帝政となつて約五百年にして羅馬は朽木の倒るゝ如く亡びてしまつた。

オドアケルは一時イタリアを領有したが、間もなく東ゴートの酋長テオドリックに亡された。(四九三年)テオドリックは羅馬の文化を再興し、政治を勵んだから人民はよく安息することが出来た。

## 第二編 中古史

### 本編大旨

まづゲルマニア民族の勃興を説いて西歐の大勢を知らしめ、次にサラセン人の勃興と其の文化を述べて兩者を對照せしめ、更に唐宋の文化を説いて獨立的に東洋文化の特徴を發揮せし次第を知らしめむるを要す。第四章に至り中古歐羅巴の社會狀態、文化生活の大體を明かにする時はゲルマニア族サラセン族及び漢族のそれ々の文化の特質並びに其の程度を比較對照して坐ろに興味をそゝるものがあるであらう。かくてゲルマニア民族は十字軍の爲にサラセン族の文化に接觸して從來の蒙を啓き西歐諸國が政治的に中央集權制を採用すると共に、他面には古學復興の氣運を促して近世文明が作り上げられ、地理上の發見によつて世界は擴大せられて豆大の勢力内に離隔する封建思想は根底から崩壊せられた。かくて西歐人の新大陸開發・東洋經營となつて中古史の幕は閉ぢられ近世思想の發現はまづ宗教上の陋習を破壊することから端を啓くこととなつた徑路を理解せしむべきである。

## 第一章 ゲルマニア民族の諸王國

## 本章の主眼點及取扱方

ゲルマニア民族の大移住は上古の末、羅馬帝國の衰運に向へる時から始まつたのであるが、西羅馬帝國の滅亡を動機として各民族は獨立の王國を建てたのである。これが近世歐羅巴諸國の起源である。其れ故、現代歐羅巴諸國の起源を尋ねるにはゲルマニア民族の大移住から出發せねばならぬ。其れ以前の歴史即ち希臘羅馬は全く他の民族であるから文化上に負ふ所は大であるけれども現在の諸國民の歴史ではない。例へば我が國の支那に於ける如きものである。故に歐羅巴人は希臘羅馬の研究を古典クラシツクといつてゐる。英・佛・獨等のそれ々の國民史國民文學とは全く性質を異にしてゐる。漢學漢文も我が國體國民性乃至國民文學とは違つてゐるから之を古典として研究することは大に意味あることであるが、我が國民史國民文學ではないのである。其れ故、單に現代の西洋諸國の歴史のみを學ばんとするには中古史から始めればよい。羅馬以前の歴史は全く切り離してもよいのである。けれども吾々は現代の世界文化の淵源並びに其の由來を知ることが目的とするのであるから、希臘羅馬は勿論其れ以前の埃及並びに西南アジアの文化にまで溯らねばならぬのである。要するに現代ヨーロッパ諸國民の出發點としてゲルマニア民族の移住・建國を理解せしむるのである。故にあまり細々と移住の経緯を説明して生徒の頭を悩ます様のことをせず直截簡明に現代諸國の建設について理解せしめるがよい。

## 主要教材の解説

【東ゴート王國】 上古の末に述べた通り、オドアケルが四七六年に自立して王國を建てたが、僅か十七年にして東ゴートの酋長テオドリックに國を奪はれた。テオドリックは東北方から侵入し東アルプスを越えてイタリアに入り、オドアケル王國を仆して國都をラヴェンナに定めた。テオドリックは古代羅馬の道路を改修し其の法律習慣を再興したけれども五五四年東羅馬帝ユスチニアヌスの將ベルサリウスに亡され、イタリアは混亂の状態となり羅馬の文化は全く影を失つた。

【東羅馬帝國の復興】 東羅馬帝國は西羅馬帝國の滅亡後約五十年間は蠻族の來襲に逢ひ、コンスタンチノーブルは一時危殆に瀕した程であつた。幸にしてユスチニアヌスといふ英主が位に即いて外征内治に力を盡したから、東羅馬帝國は再び興隆しコンスタンチノーブルはこれより約一千年間古代文化の保護所たることを得た。帝はまづ東方ベルシア國と和を約して其の來侵を防ぎ、専ら西方の經營を事とし將軍ベルサリウスをしてアフリカに渡つてヴァンダル王國を亡さしめ、更に伊太利にわたり東ゴート王國を亡さしめてこれ等の地を併領したから、一時東西羅馬帝國を統一した觀があつた。又ドナウ川及びエウフラテス川の沿岸に幾多の要塞を築き、君府の地峽に城壁を廻らして國防を嚴にしたから、この後外國の侵入を受くることが殆ど無かつた。帝又内治にも意を用ひ君府の民衆が黨を立て、争へるを鎮め法典を編纂して羅馬法を大成した。トリボニアヌス以下十六人の

編纂委員は二十餘年間の勞苦によつて上古以來の法律を整理して法律論集・勅令集・新法典及び教科書の四大部に分つた。之をユスチニアヌス法典といふ。帝は莊嚴なる宮殿や寺院を建て内部の大石柱や碧玉紅玉のモザイク裝飾は美麗を極め、ビザンチン風の特色を發揮した。今に残れる君府のソフィア寺は當時の建築であり露國モスコウのクレムリン宮殿はビザンチン式の代表的建築である。支那から蠶卵紙を齎したのも帝の時と云はれる。

【フランク王國】 フランクの酋長クロヴィスはライン川を渡つてガリアの地に入り、羅馬帝國の官吏を逐ひやつてフランク王國を建てパリイに都した。(四八六年)これよりクロヴィスの子孫相ついで君臨すること二百余年に及んだ。之をメロヴィンガ王朝といふ。七三二年サラセン族已にイスパニア半島を領しピレネー山脈を越えてガリアに入り、フランクの西南境を侵した。フランクの宮相チャールス、マルテルは之をツールに迎へ撃つて大に之を破り、サラセン人は逃げてピレネー山脈に退いた。これよりフランクの勢力はガロンヌ川よりロアール川上流の地に及んだ。チャールス、マルテルの子ピピンに至り遂に王を廢し自らフランク王となり位を子孫に傳へた。之をカロリング王朝と云ふ。紀元七五一年のことである。

【ロンバルディア王國】 東ゴート王國亡びて後、イタリヤは東羅馬帝領となつたが、ロンバルディア族は北方よりアルプス山脈を越えてポー川の平野を占領し、五六八年遂に東羅馬の守兵を驅逐してここにロンバルディア王國を建てた。ゲルマニア民族であるけれども毛髮眼瞳共に黒きこと東洋人に似て皮膚純白にして他民族と稍異つてゐるが、今も北イタリヤ人はこのタイプを具へてゐる。

【アングル、サクソン王國】 アングル、サクソン人は早く北海をわたつてブリテン島に侵入し、ブリトン人を征服してケント・サセックス・ウエセックス・エセックス・東アングリア・ウンプリア・メルシア等の七王國を立てた。九世紀の初、ウエセックス王エグバートは他の六王國を征服して一統した。これがイングランド王國の始である。

【ゲルマニア民族の改宗】 是等諸民族ははじめ多神教を信じてゐたが、羅馬帝國內に移住するに及び、間もなく改宗してキリスト教徒となつた。残忍で戦争好きの民族性もこれより漸く穏和となり、後に羅馬の文化をも吸収して近代の文明を作り上げるに至つた。故に歴史家は古代文化、キリスト教及びゲルマニア民族性を以て近代文明の三要素と云つてゐる。

言語・習慣もはじめはゲルマニア族、固有のものであつたが、羅馬帝國に移住して羅馬市民と實際するに及んで、次第にラテン語を雜へて使用するやうになり、羅馬帝國の人々と結婚して其の習慣をも取り入れるやうになつたから、こゝに異民族によつて發音せられたラテン語の訛りが國語となつた。殊にフランス・イタリヤ等の如くラテン系種族の多數なる地方では血族からも言語からも一層ラテン語に近いものになり、昔しの羅馬人・ゲルマニア人は全く影を失つてしまつた。故に後



世これ等南方の民族をラテン國民といひ、其の國語をラテン系の國語といふ。

【ノルマン人の活動】ゲルマニア民族の大移動は六世紀頃に一段落を告げたが、九世紀から十一世紀にかけてノルマンの活動が始まつた。

ノルマン人はもとゲルマニア民族でスカンヂナヴィア半島及びデンマルク地方に住んでゐた民族である。ノルマンはノースマンの訛つたのである。北方の寒地に住み慥悍の性質を持つて海洋に乗り出し、海賊をはたらいたから、ヴァイキングといつて非常に恐れた。九世紀の頃、ノルマンの酋長ルーリクは今のロシアに入り、スラヴ族を征服して國を立てノヴゴロドを首都とした。スラヴ人は新來のノルマンをルスと呼んだ。よつて其の國をルシアと云つた。又ノルマン人の一派はフランクの海岸を荒らしセイヌ川下流一帯の地を領し、遂にフランク王からノルマンディー侯に封ぜられルアンを首府として茲に定住した。

イングランドにはデンマルクにゐるノルマン人が侵入したから、之をデーン人といつた。一〇一六年にはイングランド全土がデンマルクのカヌート大王に併呑せられ、後一〇六六年にはノルマンディー侯ウィリアム英王の位をつぎ、多くのノルマン人を伴ひ來れるよりノルマンの言語・風俗・習慣が輸入せられ、アングル、サクソンの其れと融合して特殊の發達をして今のイギリス國風を形づくつたのである。

ノルマン人が北海をわたりイスランド・グリーンランドに植民し、九世紀の末には北アメリカの東岸に達したといふ。コロンブスに先だつこと約五百年である。

## 第二章 サラセン人の勃興 其の文化

### 本章の主眼點

サラセンの文化は八世紀から十一世紀まで四五百年間に亘つて榮え、歐洲諸國民が尙未開無學の情態にあつた際、獨り文華を擅にし而かも歐洲諸國民を覺醒せしめた功は決して鮮少でない。故に中世史としても近世史の豫備としてもサラセンの歴史は最も重大である。然るに歐羅巴の學者が編纂した歴史にサラセンの文化について記述するところ甚だ粗なるは、公平な史的判斷とはいへない。吾等が西洋史を學ぶには民族の如何や東西洋の如何によつて輕重をつけてはいけない。歴史の真相をとらへて正しく文化の流れを汲むことを力めねばならぬ。本教科書が他書に比してサラセンの文化を稍々詳細に記述した觀のあるのは之が爲である。殊に現代科學の由來を尋ねると、サラセンの創見による所が多いから、この點も注意するがよい。

### 主要教材の解説

【マホメット教】アラビヤ人はセム種に屬し、永くアラビヤの沙漠に住して原始状態をつゞけて來

た。サラセンと云ふ名も沙漠の兒といふ意味で外人の呼んだのである。マホメットといふ偉人アラビアに出でて自ら神の使と稱してマホメット教を創めたのが、アラビア人物興の源となつたのである。マホメットははじめ隊商の仲間に入り貿易を營んでゐたが、その間クリスト教・ユダヤ教の感化を受け遂にヒラ山の岩窟中に入つて黙想し、後出でてマホメット教をはじめた。彼は唯一の神アラを信ぜよと説いたので、メッカ人の迫害を受け、七二二年七月十五日メジナに逃れた。之をヘジラ(逃亡)の元年といひ、教徒はこの日を紀元元年一月一日とする。後マホメットはメジナ人を改宗せしめ、まづメッカを攻め取り、つゞいてアラビア全土を征服してサラセン帝國の基を開き、六三二年に死んだ。

マホメット教の經典をコーランといふ。マホメットは左にコーラン、右に刀劍を提げて「コーランを信ぜよ。然らざれば貢賦を納めよ、兩つながら拒む者は刀劍の下に伏せ」と叫び、信徒は白刃の下には天國ありと信じたから、布教と共に多大の土地人民を領有することになつた。故に宗教上の最高權を有する者は土地人民を支配する君主權をも握るに至つた。マホメットの繼承者をカリフといひ、國王の權と宗教の最高權を併せ持つた。カリフは次第に領土を廣め、西はエジプトより北アフリカを席捲してジラルタル(ジベル、アル、タリク即ちタリクの山の意)海峡を越えてイスパニアに入り、西ゴート王國を亡しピレネー山脈を越えて今のフランスに進み、東はシリア・小アジアを

取りコンスタンチノーブルに迫つた。かくて地中海を包んだ満月形を形づくらんとしたが、東方の角は東羅馬帝に抑へられ西方の角はチャールス、マルテルにへし折られ、國旗の其れの如く半月旗をなすに過ぎなかつたから、歐羅巴諸國は依然として原狀を保つてゐた。されど、東方はサッサン王朝を仆してペルシアの地を取り、印度川より中央アジアに及んだから、唐帝國と境を接し海陸兩方面から交通を開くに至つた。カリフはオンマヤ王朝の祖ムアヴィアが都をダマスカスに定めて六一年位を子孫に傳へてより世襲となり、七五一年アッバス朝の祖アブル、アッバスが位を篡ひ都をバグダードに定めたので、オンマヤの一族アブデルラーマンは西班牙に走り都をコルドヴァに定めて自立した。これよりサラセン帝國は東西に分れて、互に富強を競ひ、學術を奨励して極盛時代を現出した。中にも東サラセン帝アルマンスル及びハルン、アル、ラシッドの時代には哲學・文學・科學が盛に起つた。

國內の産業も勃興して農業・工業・商業は未曾有の隆盛を極めた。カリフの政府は灌漑の法を講ずることを以て施政の第一要義としたから、諸種の農作物が培育せられ、西洋諸國に甘蔗・サフラン・レモン樹・珈琲・綿花・芭蕉・亞麻・アスパラガス・甜瓜・薔薇等を傳へたのは皆サラセン人である。工業は各地に發達し、歐洲近世工業の基をなした。バグダード・シリアの玻璃製造所にては、釉藥及び人造眞珠を作り、ダマスカス・西班牙にては刀劍を製し、其の他、金銀の刺繍を施せる絹・

リンネル・皮革・天鵝絨・水晶・硝子板・紙・砂糖・舍利別等を製産した。又モスリンは地名モスルより絨氈タマシクは地名ダマスクより、ガーゼは地名ガザより訛つたのである。織物の圖案はベルシア風に倣ひ、鳥・象・獅子、其の他珍奇の動物を織り出した。

商業の發展は驚嘆に價するものがあつた。當時の二大商港たるアレクサンドリア港とブシール(ベルシア灣頭)を中心とし、西は地中海沿岸の諸港より遠く大西洋に出で、東は印度より遠く南支那に船を出して通商した。陸路は隊商によりて交通し、東はバグダードを中心として中央アジアから印度の内地に及び、西はカイロを中心としてアフリカの内地に入り東岸のソコトラ、ソファアラ等に通じた。又バルト海沿岸・波蘭・シレシア等にサラセン貨幣を發見せらるゝによつて其の活動の範圍の廣大なるを知るに足る。かくてアフリカの象牙・砂金・奴隸、印度南洋諸島の胡椒・香料・眞珠・寶石・支那の絹・陶器・茶、露國の獸皮・蜂蜜・蠟等は皆サラセン人の手によりて歐洲各地に散布せられた。

されば地理的探検も著しく進歩し、イブン・バツタは七万五千哩の地を踏破したといはる。歴史家ではカルブン尤も名高く、文學ではアラビアン、ナイトが後世まで持てはやされる。

天文の觀測はサラセン人の最も意を用ひた所で、ダマスクス・バグダード・コルドヴァ等には天文臺を設け觀測機も大に進歩した。アズイマス、ゼニス・ナヂル等の語はアラビア語より來たもの

である。數學では代數は四次方程式解法までを研究し、アルゼブラの學名もアラビア語其のまゝであり、球面三角術をも完成した。殊に吾々の日常使用する算用數字はアラビア人の創めたものである。化學の研究はアラビア人の手を染めたものでケミストリーの學名はアラビア語アルケミーから訛つたものである。當時アラビアの大學は十七個所にあつたが、何れも實驗室を備へて盛に實驗した。アルケミーは煉金術と譯す。當時「哲學者の石」と稱して一切の物質を黄金に化する力があると信じられてから、哲學者の石を發見せんとして、あらゆる物を分拆したり化合させたりした結果、化學の發達を見たのである。硝酸・硫酸・火藥等は皆アラビア人の實驗發明したものである。煉金術は十七世紀ごろまで獨乙國王族の寄附金によつて研究をつゞけられたといふ。其の他アルカリ・アルコール・アルマナック等、アルの冠せられたものは多くアラビア語から起つたのである。アラビア語で定冠詞をアルと云ふからである。又エリクシルといふ不老長生の靈藥を發見せんとしたことも化學的分析を試みさせる一因となつた。

サラセンの美術はビザンチン式とベルシア式の感化を受くることが多い。殊に建築はビザンチン式の模倣に過ぎないやうであつたが、柱頭に複雑な圓頂をおいたのはサラセン獨特のものである。又マホメット教義では偶像を絶對に排斥して動物や人間の形を裝飾とすることを禁じたから直線曲線の配合によつて巧みに幾何學的模様を作り出した。サラセン建築の標本は寺院と宮殿とに見られ

る。殊に西班牙のアルハンブラ宮殿は立派に現存してゐる。

### 第三章 唐の隆盛及び其の文化 宋代の東洋

#### 本章の主眼點及取扱方

西洋では羅馬の文化が蠻族の爲に踏みにじられてサラセン文化が獨り隆盛を擅にしてゐる時に方り、東洋では唐の文華が燦然として光輝を放つてゐた。唐は三百餘年の後に亡び、一時五代の衰亂を見たけれども間もなく宋朝新たに興つて三百年の太平を得た。この間に東洋學術は爛熟の境に達した。我が國の文化は實に唐宋の文化に負ふ所が多い。故にこの章では唯西洋紀元によつて西洋諸國との時代對照をなすに留め、無理に西洋史實と比較するやうのことをせぬがよい。我が奈良時代・平安時代・否徳川時代までの文化の淵源を理解せしめることが本章の目的であるからこの點を忘れてはならぬ。教師の取扱方如何が教授の能率如何に影響するから教授の本旨を失はぬことが心掛けねばならぬ。

#### 主要教材の解説

【唐の盛時】 唐の建國はマホメット紀元の僅か四年前で、六一八年である。はじめ隋の文帝楊堅が南北を合一し永く人民の塗炭に苦しめるを救ひ、太平の基を定め勤儉を尙んで専ら人民の休養を圖

つたので、人口増殖し、即位の初、四百万に過ぎざるもの、末年には八百万を超ゆるやうになつた。然るに其の子煬帝は性豪奢を好み宮苑を作り運河を開いて黄河から揚子江までの水路を通じ、沿岸に多くの離宮を立て、多大の國費を擲ち人民は使役に苦しんだ。又盛に遠征を試み、東は臺灣から西は青海まで、南は安南から北は滿洲まで勢力を張つた。たゞ高句麗の征伐には再三失敗して國威を損じた。間もなく群雄四方に起つて革命を企て隋遂に亡びて唐の世となつた。

唐の高祖李淵は子世民の勸によつて兵を擧げ長安に入つて帝位に即き三百年の帝業を開いたが、煬帝は江都(江蘇省)にあつて臣下に弑せられ、隋は三十七年で亡びた。世民は父李淵の後をついで即位した。之を太宗といふ。太宗は希世の英主であつて賢相房玄齡・杜如晦、名將李靖・李勣、亦よく輔けたから、國內能く治まり國威外に輝き世に貞觀の治と稱した。子高宗の初は賢相名臣なほ存してよく前代の業をついだから、太宗・高宗の治世六十年間は唐の極盛時代といはる。

南北朝の末、突厥(トルコの音譯)はアルタイ山附近より次第に南下し、今の内外蒙古・新疆並びに中央アジアを併せ、北朝より歲幣を取り、一時東洋第一の強國といはれた。後内亂あつて東西兩突厥に分れたが、太宗・高宗は屢々李靖・李勣等の諸將をやつて之を伐たしめ、太宗の世に東突厥、高宗の世に西突厥を亡して凡べて其の地を併せた。又チベット及び其の南隣にあるネパール・印度も太宗の時から歸服し、安南・南洋諸島も來貢したから、亞細亞洲の大半は唐の威風に靡き、漢族

の隆盛なことはこの時を第一とする。

【唐の衰亡】 高宗は多病であつたから、政を皇后武氏に委ね、政權は其の手に歸したが、高宗の死後、武氏自ら帝位に即き、國を周と改めた。之を則天武后といふ。武后、權略あり、狄仁傑等の人材を用ひたから、國威を墜さなかつた。晩年張柬之は武后に迫つて高宗の子中宗をして位を繼がしめて唐室を復興した。されど中宗の皇后韋氏は中宗を弑して權勢を恣にし、朝廷大に亂れたので、中宗の姪隆基は兵を出して韋氏を誅し父睿宗を立て、ついで父の禪を受けて天子となつた。之を玄宗といふ。

玄宗は初め勵精治を圖り姚崇・宋璟等の名相よく之を輔けたから、天下泰平にして戸口増殖し、文藝も盛に起つた之を開元の治といふ。我が吉備眞備・阿倍仲麻呂の留學したのはこの頃であつた。玄宗また邊要の地に節度使をおいて國防を嚴にし、外寇に備へたが、晩年楊貴妃を寵して國政を顧みず、遂に突厥の降將安祿山の叛を見るに至り、唐の帝威はこれより衰へた。天寶十四年、安祿山は大軍を發して洛陽を陥れ進んで長安に迫つた。玄宗は蜀に出奔し、楊貴妃は帝の馬前に殺され、子肅宗は止まつて帝位に即き、勤王の兵を募つた。郭子儀・李光弼等、頻に賊軍を破つたが、賊將の間に内訌起つて安祿山は子安慶緒に殺され、安慶緒は其の臣史思明に殺され、史思明は子史朝義に殺され、賊勢次第に衰へ、九年の後大亂始めて鎮まつた。顏真卿・顏杲卿の二人はこの亂の始に

忠節を盡して死し、張巡・許遠は寡兵を以て賊の大軍に當り、忠烈を以て聞えた。この亂を天寶の亂とも安史の亂とも云ふ。

この大亂の間、國內の統治行き届かざるより、地方の節度使は殆ど獨立の姿となつて、中央政府の命令を奉ぜず、蠻族は頻に邊境を侵し、宦官は宮廷に專横を極めて國政を紊り、國運次第に衰へ、二十世二百九十年にして後梁の太祖朱全忠に國を篡はれた。

【唐代の文化】 唐の制度は太宗・高宗の二代に完成したもので、支那後世の模範となり、我が大寶律令も之に倣つた所が多い。中央政府は上に尙書・中書・門下の三省あり、尙書省は行政を統へ、其の下に吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部あつて政務を分掌する。地方は全國を十道に分ち、道の下に州、州の下に縣あり、州に刺史、縣に縣令をおいて民政を掌らしめた。

國庫の主なる財源は租・庸・調の三種であつた。我が大寶の制も之に倣つたのである。國防は京師に十六衛府、地方に六百三十四の折衝府あり、全國より壯丁を徵募する。刑罰には笞・杖・徒・流・死の五刑あり、君父國家に對する罪を最も重しとした。

學制は京師に大學をおき、地方に州學・縣學あり、學生は卒業の後、科擧の試験を受け及第したものには官吏に任用せられる。

儒學は漢代の學風を受け、經書の字句の解釋に力を用ひた。之を訓詁の學といふ。詩文は最も隆

盛を極め、支那史中最も華かな時代といはる。玄宗の時に、李白・杜甫の二大詩人出で、稍、後れて白居易(樂天)出で、詩才は前の二人に劣らなかつた。白氏文集と唐代の詩を集めた唐詩選とは我が國にも廣く愛讀せられた。又文章家には韓愈(退之)柳宗元(子厚)あり、何れも雄勁なる文章を書いて前代の弊をあらためた。

書道は晋の世に王羲之・王獻之父子あり、唐に至り顔真卿を始とし多くの書家を出した。繪畫は晋に顧愷之出で、世に重んぜられ、唐代には吳道玄・王維の二人尤も著はれた。道玄は佛畫を好くし王維は山水畫の祖といはる。

佛敎は魏・晋・南北朝の頃、盛に流行し、梁の武帝は三寶奴と稱し、印度の達磨はこの頃支那に來朝し、西域僧侶の歸化するもの多く、洛陽には千三百余寺、建業には七百余寺を算するに至つた。されば唐代には隆盛を極め天台・眞言等の諸派起り、何れも我が國に傳來した。太宗の時、僧玄奘は印度を遍歴し往復十七年を費して歸り、經論六百五十余部を得て還り、之を翻譯して支那史上に一新紀元をなした。これを新譯といふ。高宗の時、義淨も印度に至り往復二十五年を費して歸つた。

道敎は老子(李聃)を祖とする。唐の國姓は李氏なるを以て老子を國神として崇拜したから、全國に老子の廟を立て、これより道敎は支那の重なる宗教となつた。

以上の外、景敎・祇敎・回敎も西方から傳はつた。景敎はキリスト敎の一派でネストリウスの唱

へたもので、太宗の時阿羅本が始めて支那に傳へた。祇敎はベルシアのゾロアストル敎で、殆ど同時に傳はり、回敎は即ちマホメット敎で稍、後れて傳はつた。

【東西の交通】 唐の領土は西の方遠く中央アジアにまで廣まり、サラセン帝國と境を接してゐたから、ベルシア王國がサラセン帝國に亡された時、ベルシアの王子は唐に逃げて來た。祇敎・回敎の傳はつたのもこれからである。唐の中世以後はサラセン人、印度洋を航して今の廣東・福建の諸港に來つて貿易を營み、交州(今の東京)・廣州・泉州の諸港には多くのサラセン人居留して、犀角・象牙・玻璃・胡椒・香料等を輸入し、支那よりは絹・磁器・陶器等を輸出した。されば當時廣州在留の外人は十二万人を超えたと云はれ、唐は市舶司をおいて外國商船を取り締らせた。

【渤海・遼の廢興】 唐の中葉、今の滿洲地方に靺鞨部と稱する滿洲族あり、部長大祚榮は滿洲地方を統べ、玄宗より渤海郡王に封ぜられ、國を渤海と號した。この後、國勢次第に強盛となり文化も著るしく進歩し、我が國には奈良時代以來頻に來聘したが、唐の衰ふる頃は渤海も漸く衰運に傾いた。かくて唐の末頃、契丹族が滿洲の北部より起つて次第に南下し其の酋長に耶律阿保機といふ英雄出づるに及び、自立して帝と稱し臨潢(遼河の上流潢河に臨める地)に都した。これを契丹の太祖といふ。太祖は東の方渤海を攻め亡して其の地を取り、更に南下して支那を侵略せんとした。

【五代】 この頃、支那では朱全忠の建てた後梁が後唐の太祖李存勗に亡されたが、節度使石敬瑭は

後唐を亡して天子とならんとし、己の力の足らざるを知り、契丹の太祖に援を求めた。太祖之を機として大兵を支那に入れ、後唐を亡し其の報酬として支那の北邊十六州を割取した。石敬瑭は天子となつて國を後晋と號し、厚く契丹を遇したけれども、其の子出帝は蠻族と侮つて禮せず、先帝の約を破らんとしたので、太祖の子太宗は大兵を出して後唐を亡し、汴京に都して國を遼と號した。されど人民は蠻人を侮つて服せざるより「中國は治め難し」といひて北に去つた。よつて劉知遠は京に入つて帝と稱し國を後漢と號したが、二代四年にして後周の太祖郭威に亡された。後梁より後周までを五代の世といふ。五十余年の間に五王朝代り立ち群雄は各地に割據して王と稱し帝の威力は京師附近にしか及ばなかつた。

【宋の建國】 宋の太祖趙匡胤は一世の英雄であつた。五代の末、部下の兵士に推されて皇帝となり國を宋と號し群雄を征服して一統の基を開き、弟太宗は南征北伐してすべて諸王國を亡したから再び五代以前の統一統政治を見るに至つた。宰相趙普、嘗て曰く「臣は論語一部を讀むのみ、半部を以て太祖を助けて天下を取り、半部を以て太宗を助けて太平を成した」と。太祖・太宗は趙普の計を用ひて文治政策を取り從來の節度使が欠くる毎に文臣を以て之に代へたから、節度使跋扈の弊を一掃して中央集權の實をあけた。されど宋代武力の弱きも茲に原因するので、中世以後には終に北人の壓迫に堪へずして南遷し、僅に江南の地を領するに過ぎなかつた。

この頃、遼は滿洲に據り西は天山に至り、内外蒙古を包み東は日本海に臨み、朝貢する者、高麗・西藏等六十國に及び、東亞第一の強國であつた。眞宗の時、南進して宋を侵したので、帝大軍を發して澶州に親征し遼と對峙したが勝利の望なきを見て兄弟の約をなし、歲幣銀十萬兩絹二十萬兩を出して和を結んだ。眞宗の子仁宗の時、チベット族は西夏の國を建て屢、宋の西邊を侵したから、宋は更に一外患を加へた。遼は之に乗じて復宋に迫つたので、宋は歲幣銀絹各、十萬を増し、また西夏に對しても歲幣銀絹各、二十五萬を與へて宋の臣下たることを約せしめて和した。

【神宗の新政】 神宗は國勢の不振を挽回せんと志し、王安石を宰相にあけて新法を行はしめた。安石は富國策としては青苗・均輸・募役の諸法を、強兵策としては保甲・保馬の法を行つた。青苗法は苗のなほ青い時、官より低利で貸し、秋の收穫時に元利を還納せしめるので、一には農家の急を救ひ一には政府は利子を収めるのである。均輸法は一地方から多量に産する貨物を上納せしめ、之を乏しき地方に轉送し、有無相通せしめて政府が利益を得るのである。募役法は賦役を免する代りに錢を出さしめ、政府は無職の貧民を安い賃銀で傭ひ入れるから、貧民を常業に就かしむると共に、政府は利益を得るのである。保甲法は一種の民兵制度で農閑に武藝を習はしめるのである。十家を保といひ、五保を大保と云ひ、十大保を都保といふ。保に保長、大保に大保長、都保に都保正などをおいて統べしめる。丁男二人以上あれば一人を保丁として武藝を習はせ、大保毎に保丁五人を輪

番に夜警をさせる。保馬法は保の人々の願によつて政府から官馬を貸し下げ、又は相當代價にて買ひ入れしめ、政府は毎年肥瘠健否を検し死病ある時は之を辨償せしめた。よつて人民は農業用に使用し、征戦の時には何時でも徴發することが出来る。

此の新法は王安石の創見にかゝり舊來の殻を破つた積極政策である。運用さへ誤らなければ富國強兵の實を擧げることが出来たであらうが、安石の股肱たる呂惠卿以下の小人は之によつて私腹を肥やしたから、一利なくして百弊生じたのは惜しいことであつた。

當時の名士學者は擧つて新政に反對し、司馬光・蘇軾・范仲淹・程顥・程頤等は皆貶黜の厄に逢うた。

神宗死し哲宗十歳で即位し、宣仁太后攝政となり女中堯舜といはれた。司馬光等を登用し、新法黨を黜して一切の新法を廢止した。之を元祐の更化と云ふ。司馬光相位にあること八ヶ月にして死し、間もなく舊法黨が分裂して各、朋黨を結んで互に攻撃したから、新法黨に乗せられた。宣仁太后死し哲宗の親政となるや新法黨を登用して新法を再興し、舊法黨は皆貶黜せられた。之を紹聖の紹述といふ。哲宗死し弟徽宗即位し太皇太后向氏攝政となり、また舊法黨を登用したが、向太后死して後徽宗親政の世になつてから、又々新法黨を用ひて舊法黨を斥けた。この頃、金との交渉が始まり宋は遂に南遷するの止むなきに至つた。

【遼金の廢興】 黒龍江附近に住してゐた女眞族は是迄遼に屬してゐたが、阿骨打といふ英雄出るに及び、附近の地を取つて自ら皇帝と稱し、會寧(吉林省)に都し國を金と號した。(一一一五年)金の太祖是である。女眞の俗は幼時から騎射を習ひ戦闘を好み勇悍であつたから、忽ち滿洲・蒙古を征服し、南に進んで宋と同盟して遼に攻めた。この時、徽宗は長く遼に苦しめられたるを怨み金の起るを聞き、喜んで金と同盟して遼を攻めたが、宋兵殆ど用を爲さず、全軍が獨力で遼を亡した。しかし宋は前門に虎を防いで後門に狼を招いだ。金は遼を亡すの戦に宋の弱點を看取し、其の弱みにつけ込み背信を名として宋を攻め、忽ち首都汴京を陥れ、徽宗欽宗以下皇族官人等三千余人皆虜にせられた。之を靖康の難といふ。

【宋金の和議】 そこで欽宗の弟高宗位に即き全軍を避けて都を臨安(浙江省)に遷した。これを宋の南渡といひ、これ以後を南宋といふ。此の頃、宋に主戦論と平和論あり、軍人では岳飛・韓世忠等、學者では胡銓(澹菴)等が主戦論者であり、胡銓は高宗に封事を上つて平和論者を痛罵した。併し高宗は梓宮及び生母章氏を迎へんことを望み宰相秦檜は和議を主とし、王倫をして和を講ぜしめた。かくて宋金の和議成り東は淮水より西は大散關(陝西省)までを宋金の境とし、宋は金の封冊を受け、歳幣銀絹各二十五万を納るゝことを約した。是に於て金は東は高麗を威服し、西は西夏を懐け南は漢淮二水に至り、北は外蒙古のケルレン川を境とし東亞の最大強國となり、金の極盛時代を現



出した。

其の後、宋金が一たび戦を交へて宋の敗北となつたが、其の頃より金も次第に衰へ蒙古が北方に起るに及んで金宋相ついで亡された。

【宋代の文化】 漢唐の儒者が訓詁の學を専らとして本義の研究を忘れてゐたが、宋の儒者は本義に重きをおき、理論的研究を遂げて儒學に哲學的基礎を與へた。この新學風は北宋の周敦頤・程明道（顛）程伊川（頤）によつて創められ、南宋の朱熹に至つて大成した。故に朱子學とも程朱の學ともいふ。又宋代の創見に成つたもの故に宋學ともいふ。人生を宇宙の本體（太極）より派生するものとし我が心の本體は性善なるものであるけれども、外に發動すれば喜怒哀樂さまざまの情を發するものである。故に事物の理をきはめ物慾を去つて我が心の本體たる聖賢の道に達せねばならぬ。と説いた。これを格物致知の學といふ。王陽明の良知良能説とはちやうど表と裏との如き相違がある。

文學も五代の亂に衰へたが、宋に至つて勃興し、燦然たる文化の花が開いた。名高い文章家に歐陽修・蘇洵・蘇軾・（東坡）蘇轍・王安石・曾鞏あり。唐の韓愈・柳宗元と併せて唐宋八大家といふ。唐宋八大家文は我が國にても愛讀せられた。蘇東坡は書畫にも巧みに詩人としても有名であつた。又司馬光（温公）は資治通鑑といふ歴史書を著して名高い。繪畫では唐の畫風を繼いだものに李龍眠といふ名手を出したが、最も名高いのは宋畫である。事物の形態色彩を主とせず、墨繪により濃淡

筆勢等で氣韻生動の趣を活躍せしめようとし、最も東洋風の特色を發揮してゐる。この畫風は徽宗の獎勵によつて發達し、馬遠・夏珪の如き名手を出したが、我が足利時代に明から輸入せられて日本畫の根柢をなすに至つた。

佛教は禪宗が最も盛に行はれ、鎌倉時代に入宋した榮西・道元によつて我が國に傳へられ、宋の道隆・祖元も歸化して傳導した。隋唐の頃から佛書の印刷が始まつたが、宋の時に活字が發明せられてから、一般の書籍が容易く印刷せられて坊間に現はれるやうになつた。

#### 第四章 中古歐羅巴の社會狀態 十字軍

##### 本章の主眼點及び取扱方

中古史に於ては世界文化に三つの大きな流れがあつた。一つはサラセン文化、一つは東洋文化、一つは西歐文化である。先の二つの文化については既に述べたから、本章では最後の西歐文化を説明する。西洋文化には二つの要素があつた。即ち一つはクリスト教で、一つはゲルマニア民族の創めた封建制度である。封建制の組織の中に發達した武士道がクリストの教義と合體して仕組まれたのは十字軍である。十字軍は前後二百年に互つてゐるから、最初の動機と末葉の思想とは大きな變化があつた。はじめの熱狂的の信仰が漸く冷えると共にサラセン文化の光輝に照されて文化發達

の新氣運を生み出したのである。かくて一面には自由都市の發達を見、他面には航海冒險の氣象が激勵せられて地理上の發見と相俟つて世界が擴大せられて近世文明の素地を作つたのである。

### 主要教材の解説

【暗黒時代】 ゲルマニア諸民族の侵入によつて西羅馬帝國が崩壊すると共に、古代羅馬の文化が火の消えたやうに滅びてしまつた。文學も藝術も彼等蠻族の目には猫に小判の喩えの如くであつたから、文學の命脈は僅かに僧庵の中に氣息奄々として保たれてゐた。それ故、僧侶の外には殆ど文學を解するものなく、王侯でさへも無智といはれたのである。そうして上下學つて迷信の淵に沈んで歐洲の人々は全く教會の奴隸となつた。無學無智であつて凡てが教會の奴隸となり各人には何等の識見がなかつたから、この時代を暗黒時代といふ。この時代とても藝術が全く無いではなかつたが、すべて教會の奴隸として發達したのである。即ち建築では寺院、彫刻・繪畫としては寺院の裝飾又はクリスト・マリア若しくは使徒の肖像などに過ぎなかつた。勿論これらは五六世紀から十一世紀ごろまでのことである。

【羅馬法王】 この暗黒時代に於て羅馬法王が教會の最高權威者となつたことは自然の勢である。はじめ基督教が羅馬帝國の國教となつてから、教會は帝國內到る處に立てられたが、片田舎の寒村と都市や大都會との間には信者の多少文野の差等もあつたから各教會に自然階級が生じ、住職にも僧

侶・僧正・大僧正等、上下賢愚の別が起つたのである。かくてこゝには基督教の平等主義が破れて大僧正は僧正を、僧正は下位の衆僧を統べることになつて階級制が起つた。中にもローマ・コンスタンチノーブル・アンチオキア・イェルサレム及びアレクサンドリアは五大本山といはれ、其の住職は大長老として崇められた。然るにサラセン帝國起るに及び、アンチオキア・イェルサレム・アレクサンドリアは異教徒の手に歸したから、大本山はローマとコンスタンチノーブルとの二つになつた。兩虎並び立たずといふ諺の如く、この二大本山が次第に軋轢するやうになつたが、羅馬の大長老はベートルの後繼者を以て任じ、其の管轄する區域最も大きく、且つ俊傑相ついで出でて教徒の尊信最も厚かつたから、遂に法王と仰がれる様になつた。

この頃、羅馬教會では、蠻族に布教する便宜上、寺院に多くの偶像を据ゑたので、マホメット教徒に冷笑せられる有様であつた。七二八年東羅馬帝レオは勅令を發して偶像破棄を命じたが、羅馬法王グレゴリー二世はこれに従はざるのみならず、後には東羅馬皇帝を破門するに至つたから、こゝに皇帝と法王とは絶縁してしまつた。コンスタンチノーブルの大長老は勿論皇帝に隸屬してゐたから、是より羅馬教會とコンスタンチノーブル教會とが相對立するに至り、十一世紀に至つて兩教會は全く分離した。コンスタンチノーブルは東教會又は希臘正教會といひ羅馬教會は西教會又は羅馬正教會といつたが、希臘正教會は後にロシア人の間に廣まり、東羅馬帝國亡びてコンスタンチノ

ブルが土耳其の首都となつてから露國皇帝が希臘教會長となつた。

【フランク王國】 フランク王國の實權を握つてゐた宮相ピピンは、王號を稱せんとして羅馬法王に諮つたところ、ローマ法王は王の實權を有する者が王號を用ふべしと答へたので、ピピンは自ら王と稱し、ローマ法王は手づから王及び皇后に聖油を灌いで王たることを承認した。ピピンはローマ法王を德とし兵を伊太利に出しロンバルヂアを撃破し其の地を取つてローマ法王に獻じた。これがローマ法王領の初である。

ピピンの子チャールス大帝は蠻人中の最大偉人である。五十餘回の征伐によつて大統一の理想を實現し、八〇〇年クリスマスの日、羅馬のセント・ペートル寺に於て法王より金冠を加へられ、西羅馬帝國を再興した。帝は意を内治に用ひ地方制度を整へ實業を獎勵し文藝を保護したから古代文化が再び輝いた。殊に宮廷には學校を設け子弟をしてラテン語を讀み且書くことを學ばしめ、又學者を招き宮廷に學會アカデミーを設けた。當時の學者ではアルクインが最も名高い。

大帝の子ルイ一世はフランクの習慣法に従つて帝國を三分して三子に與へたが、後、三人の間に紛争を起して相戦ひ、八四三年ヴェルダン條約を結んで境界を定め、長子ロタールは帝號を稱して中部フランクを領し、次子ルイは東部フランクを、三子チャールスは西部フランクを領することになつた。其の後も三國の間に戦争起り、八七〇年メルセン條約によつて中部フランクは東西フラン

クに割取せられ僅にアルプス山南を領して帝號を稱することになり、後間もなく其の王統は絶えて中部フランクは亡びた。

東部フランクでは九一一年に、カロルス王朝絶え、諸侯はフランコニア侯コンラデー一世を選んで王としこれより選舉王國となつた。獨乙王國の起原である。西フランクでは九八七年カロルス王朝絶えてカペー家の祖ユーグ、カペーが王位に上りパリに都してフランス王國の基を立てた。

【獨乙皇帝と羅馬法王】 獨乙にては其の後オトー一世選ばれて王となりまづ國內を統一し、更にスラヴ人・マジヤール人を征し、伊太利に軍を出し半島を平定して法王を援けた。法王大に喜び九六二年帝冠を加へて神聖羅馬皇帝と稱し又イタリア王を兼ねしめた。これより獨乙皇帝は神聖羅馬皇帝と號し、諸王の上に立つて全歐を統一せんとの理想を抱き、屢々イタリアに出兵したが、遂に羅馬法王と衝突するに至つた。

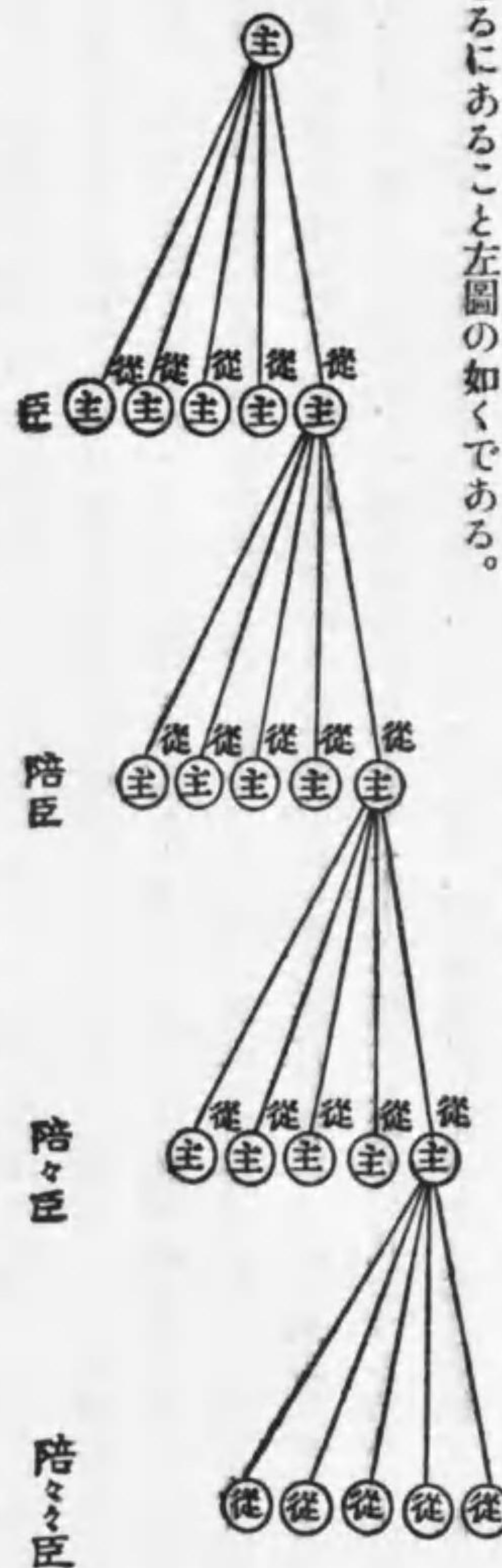
羅馬法王グレゴリー七世は非凡の才を抱き精力絶倫にして決斷力に富みまづ教會の腐敗を圖り更に獨乙皇帝より僧官任命權を奪はんとした。皇帝ヘンリー四世大に憤り宗教會議を開いて法王を廢止する決議をなした。グレゴリー七世之に屈せず反つて皇帝を破門した。當時法王の採用した武器に破門と離門の二つあつた。破門は其の宣言と同時に信者より除名せられ郷土・家族より呪はれ、信者と食を共にするを得ず、葬式さへも營むことが出来ない。離門は王侯のみに對して行ふので、

領土全部の人民は結婚葬式を営むを得ず、教會は凡て閉鎖されて寺鐘は鳴されず、主君と人民とに悲みの印として毛髪を長く蓄へしめる。ヘンリー四世が破門せらるゝや、獨乙の諸侯は一齊にヘンリー四世に叛いたので、ヘンリー大に窮し、自ら法王をカノッサ城に訪ひ三日三夜庭中に立つて罪を謝し漸くにして破門を許された。されども之を聞いた獨乙國民は法王の無情を怒り勤王の兵を起したので、ヘンリーは伊太利に進軍してクレゴリー七世を廢し之をサレルノに幽閉した。

この後も法王と皇帝との争ひ絶えず、ヘンリー四世の子ヘンリー五世は一一二二年にウォルムス和約を結んだ爲に多年の紛争が始めて止んだ。されども獨乙國內にはこの頃より勤王黨と法王黨との兩黨を生じて内亂絶えず帝權益々衰へ法王權は一時強大となつて各國の君王をも左右し、インノセント三世の如きは法王は太陽の如く帝王は月の如しと誇稱するに至つた。

【封建制度】 中世紀に行はれた社會組織・政治組織の特別な形式を封建制度といふ。この制度は八世紀の頃から起つて五百年間つゝいた。この制度の骨子は封土にあつたから之を封建制度と呼ぶのである。封土とは所有權なくして單に使用權だけを有するものを云ふ。即ち君主は何時でも臣下の封土を削つたり他へ移したり全部取り上げてしまふことが出来るのである。故に臣下は封土を與へられてゐる間だけ自由に使用し得るのである。而かして封建制度の根本精神は主從互に恩誼を以て結び付いてゐるといふ美はしい心情にある。主君は臣下に封土を與へ臣下は主君に忠誠・援助・參

與の三事を誓つて茲に主從の關係が成り立つのである、この儀式をホメージといふ。臣下が封土を與へられた時、更に之を己れの臣下に分け與へることが出来る。この場合は己れの臣下に對しては主君となる。この臣下の臣下を倍臣といふ。されば封建制度の理想的組織は井然たる階級制度たらしむるにあること左圖の如くである。



要するに、封建制度は主從互に恩義を重んじて相結合することによつて成立するから武士道がこの制度の骨子であり精神である。武士は忠義剛勇義俠廉恥を主眼とし神を信じ婦人を敬ふことを本旨とする。

この封建制度は中世紀の無政府状態に於て自衛の策を講ずる必要から起つたのである。強固なる主君は城塞に立て籠り幾千幾万の臣下を蓄へて隣國と富強を競うたので、この城塞は中世文化の中

心となり武士文學もこゝに發達した。

【十字軍】十字軍は中世紀の特質を表徴した史的現象である。實に燃ゆるが如き信仰心と封建武士の尙武的氣象との結晶から成つた神聖戰爭である。靈地イエルサレムを異教徒の手から奪還せんとする熱狂的信仰の發露であり、武裝的順禮であつた。前後二百年間に互つて全歐を震撼した大事件であつた。はじめセルジユク、トルコ人がシリアの地を侵し基督教徒の靈地に參拜する者を虐殺したり追剥したりしたので、全歐の信者擧つて之を憤り彼等の手から靈地を奪還せんことを企てた。中にも東羅馬帝はトルコの來寇を恐れて援を西歐諸君主に訴へたので遂にこの遠征軍を出すこととなつた。はじめ羅馬法王ウルバン二世は、一〇九五年クレルモンに宗教會議を開いたが、遠近より來り會する者は僧侶七百其の他の民衆あけて數ふべからず、天性の雄辯家たるウルバンは人類演說中の最大効果を來したものと云はる。聽衆は熱狂の極に達し異口同音に「神の意志なり」と叫び、來年出征の期としたるに、一刻も猶豫し得ずとペートル隱士に従つて出發する者八万人に及んだ。されど是等は烏合の衆のこととて小アジアに至り、ニケーアにてトルコ兵に虐殺せられた。

第一十字軍は一〇九六年王侯武士僧侶合せて總勢三十萬人、歡喜して出征すること恰も流罪地から放還されるものゝ如く歐洲を後にして東に向ひ、行く／＼異教徒と戦ひ一〇九九年にイエルサレムの地を奪還した。ロートリンゲン公ジェフリーは基督が荊の冠を着けたる地にて黄金の冠を戴

くに忍びずとて王たることを肯んぜず、單に靈地保護者と稱して茲に駐屯し他の多數は直ちに歸國した。ジェフリーの死後、弟バルドウィン始めてイエルサレム王と稱した。後、間もなく、トルコ人に侵略せられたから歐洲人は第二十字軍を起した。このたびは獨帝・佛王も自ら陣頭に立つたけれども成功しなかつた。其の後第三十字軍も失敗に終つたが、第四十字軍の如きはヴェニス商人に勧められイエルサレムに向はずしてコンスタンチノーブルに上陸し東羅馬皇帝を逐ひラテン帝國を立てた。(一二〇四年)これより一二六一年までウェニス商人は商權を握つたが小アジアに僻在した東羅馬皇帝急にコンスタンチノーブルを襲ひ、ラテン帝國を亡して舊帝國を再興しこれより一四五三年までつゞいた。これより先、一二二二年には少年十字軍が起つた。指導者は十二歳の佛國農夫の子であつたが、佛國の少年三萬人マルセーユに達し、海中にバレスチナに行くべき道が開かれざるに失望して歸國し五六千人は奸商に欺かれ奴隸としてアフリカに賣られた。この年、獨乙の少年も(二万乃至四万と云はる)イタリア海岸に至り同じく失望して歸國した。茲に於て無垢なる少年が神に助けらるべしとの迷信は全く裏切られ、この後に起つた第五乃至第七十字軍はもはや信仰熱もさめて侵略主義となつたが、何れも成功しなかつた。

前後八回の十字軍は皆不成功に終り多大の人命と財産を失つたけれども重大な影響を全歐洲に與へた。第一は長期に亙る遠征の爲に王侯武士は陣没又は破産する者多く、爲に封建制度の潰裂を來

し爲に近世諸王國が次第に成立した。第二は遠征の間に宗教熱冷却して法王に對する信認薄らぎ羅馬教會の權威が地に墜ちた。第三はこの遠征によつて地理上の智識を増し航海冒險の氣象を旺盛にした。第四、遠征の際サラセン文化の發達せるを見て夢から醒めた様に驚き文化發達の新氣運を促した。第五、遠征の兵士及び物資を海上より輸送する委任を受けた者はウエニス其の他イタリヤ諸都市であつたが、之が爲に多大の運送費を獲たのみならず、歸航の際、東方の産物を積載して西歐に賣り多大の利益を得、これより都市富裕となり且東西貿易の商權を握つて繁盛を極め獨立の自由都市が雨後の筍の如く起つて茲に文化の異常なる發達を遂げ近世文明を作り上げるに至つた。

## 第五章 西歐諸國王權の發達

### 本章の主眼點及び取扱方

十字軍の結果、封建制度に龜裂を生じた時に、諸王はそれ／＼の國に於て王權を伸張して次第に中央集權制を確立したことは最も注意すべきことである。近世國家の多くはこの時に出來上つたのである。英・佛・獨諸國は勿論、西班牙・葡萄牙の諸王も一流の君主と仰がれるやうになつた。王權の伸張、中央集權制の確立は封建制度に愈、致命傷を與へて近代國家が成立した。

### 主要教材の解説

【英蘭の起り】 アングロ、サクソンの立てた七王國は八二七年エグバート王によつて統一せられたが、一〇一六年丁抹王カヌート大王は一時英蘭を併合して其の子に傳へた。其の後ノルマンディー侯ウィリアムは手兵を率ゐて來り、一〇六六年ヘースチングの戰に勝つて英蘭王となりノルマン王家の祖となつた。この時多くのノルマン人を連れ來り廷臣及び最高官吏に採用したからノルマンの言語・風俗・習慣・政治が輸入せられ、多大の變遷を見たのである。ノルマン家亡ぶるに及び、ブランタジネット家王位をついだ(一一五四年)が、三代目のジョンに至り失政多く外は法王及び佛王と争つて國威を損し、内は重税を課し人民を苦しめたから諸侯僧侶等王に迫つて大憲章に署名せしめて國民の生命財産の安全を保障せしめた。其の後五十年ヘンリー三世の時、貴族・僧侶の外、郡市の代表者を召集して國事を議せしめた。これが下院の始である。今の上下兩院はかくして起つたのである。

【佛國王權の伸張】 佛國のカペー家には歴代英君出でて政治につとめ、封建制度の廢るゝに乗じて頻に強大の諸侯を亡して王權を伸張したが、フィリップ四世に至り、法王ボニファキウス八世と争ひ國民の後援を求むる必要があつたので、一三〇二年貴族僧侶及び平民の代表者を集めて三部會を開いた。これが佛國議院政治の初である。かくてフィリップ四世は一三〇九年ボニファキウス一世を廢し佛國の僧を法王に選びてアヴィニオンに住せしめた。教會史では之を法王のバビロニア囚禁

といふ。これより七十年間法王は佛王の願使に従つた。

中央集権の確立する頃は國民文學も十分の發達を遂げ國民思想が漸く強烈となつて愛國心發達し遂に國民間の衝突を見るに至つた。英佛の百年戦役は其の著しい例である、

【英佛百年戦役】 佛國のカペー家絶えてヴァロア家の祖フィリップ六世立つた時、英王エドワード三世は母が佛王チャールス四世の妹であつたから自ら王位相續の權ありと稱して佛國に出兵し茲に百年に亘る大戦争が開かれた。戦の始、英國は早く敵の海軍を破つて佛に上陸し、皇太子エドワード(黒太子といはる)武勇を以て聞え、ボアチエーの戦(一三五六年)に大勝を得た。其の後も英軍頻りに佛軍を破り佛國は殆ど全部を占領せられ僅にオルレアン城を保ち佛の運命は風前の燈火の如くであつた。この時シャンパーニュ州の農家の一少女ジャンヌ、ダルクといへるもの「汝の祖國を救へ」との神の聲に勵まされ、兵士の先頭に立つたので、佛軍の士氣俄に振ひ、オルレアンを圍める英軍の背後を衝いて潰走せしめた。是より佛軍は連戦連勝殆ど英軍を國外に驅逐した。ジャンヌ、ダルクは後英軍に擒せられ異教徒として火刑に處せられた。世にオルレアンの少女といひ獨のシルレルは劇詩を作つた。一四五三年英佛二國の間に和約成り、佛國はカレイを除く外凡ての地を回復した。

【諸國王權の確立】 英國には百年戦役後一年を隔て内亂起り國內の諸侯はランカスター家・ヨーク家の何れかについて相戦ふこと三十年に及んだ。ランカスター家は赤薔薇をヨーク家は白薔薇を徵

號としたからこれを薔薇戦争といふ。一四八五年チュードル家の祖ヘンリー七世が王位に即くに及び戦亂全く収まつた。この間に諸侯多く亡びて封建制殆ど崩れたのに加へてヘンリー七世は内政を整へ人民の安息を計つたから中央集権制全く確立した。佛國も百年戦役によつて愛國心極度に高調して國民皆王に歸嚮して忠誠を盡すに至り、王權が盛になつた。

イスパニアはサラセン帝國の衰ふるに従ひ、多くの基督教國獨立して封建的國家をなしてゐたが、アラゴン王フェルチナンドはカスチラ女王イサベラと婚してこの二國まづ併合し、後次第に他の諸侯を征服し、一四九二年にはグラナダ王國を亡したから西班牙王國茲に成り、一統の政治が出来上つた。又隣國の葡萄牙は十一世紀の末に獨立の王國となり、リスボンを首都として商業を立國の基とした。

## 第六章 蒙古族の興起

### 本章の主眼點及び取扱方

歐羅巴人は黄色人種を恐れて黄禍イノロビキルといつてゐる。彼等歐羅巴人は中古末に黃禍の波に二回襲はれた。蒙古人の侵略と土耳其人の侵入がこれである。殊に蒙古人は前後三回に渡つて歐羅巴洲を侵略し、今の露獨奥の諸國人を驚かしたから彼等歐洲人は蒙古人といへば黄色人種、黄色人種といへ

は蒙古人である如く考へた。其れ故モンゴリアンと云ふは黄色人種全體を指すので我々日本人も支那人も皆この中に屬する。それ程蒙古人は彼等に深い印象を残したのである。たゞ遺憾に思ふのは蒙古人の侵入は恰も暴風雨の如く家屋農作物を暴らし人心をおびやかしたのみで何等の文化的影響を及ぼさなかつたことである。アレクサンドル大王が希臘文化を移植して世界人類に多大の裨益を與へたのに比べて雲泥の相違がある。アレクサンドル大王が移植すべき文化を所有してゐたのに反し、蒙古人種は撒布すべき文化の何物をも持つてゐなかつたからである。唯強暴と殘虐とを行つたのであるから寧ろ文化の敵であり人類發達の障害をなしたに過ぎなかつた。世界に覇を稱へんとするものは必ず先づ世界最高の文化を所有してゐることを要する。

#### 主要教材の解説

【蒙古族の勃興】 蒙古族ははじめオノン川とケルレン川との間に一部落をなしてゐた蠻族であつた。其の酋長に鐵木真といふ英傑出るに及び近傍の諸部落を征服して自ら大汗の位に即き、成吉思汗と號した。(一二〇六年)即位の後まづ南方の金を攻めて黄河以北の地を取り、勢に乗じて西遼を平けて花刺子模國(中央アジアにあり)と境を接した。成吉思汗使をやつて花刺子模と通商せんことを求めたが、花刺子模國は其の使者を殺したから、成吉思汗大に怒り大兵を發して花刺子模を征した。四子朮赤・察合臺・窩闊臺・拖雷皆從軍し其の都サマルカンドを攻めて之を陥れ、本軍は王子札蘭丁を

逐うて印度川を渡りパンジャブ地方を征服した。別軍は哲別・速不臺の二將之を率る王を追うて西に進み今のベルシアを従へコーカサス山脈を越えて露西亞に入りアゾフ海を渡りカルカ河上に露國諸侯の連合軍を破つて東に歸り本軍と合して歸着したのは一二二五年、即ち出征後七年目である。成吉思汗は更に西夏を亡し金を侵さんとしたが途中で病死した。之を蒙古の太祖といふ。

【拔都の西征】 太祖の子太宗は父の志をつぎ、金を攻め亡して江北の地を取り、姪拔都をして歐洲を征伐せしめた。拔都は大軍を率ゐてまづ露國を侵し、到る處掠奪を恣にしてモスコイに入り、更に西南に進みキエフに至つて軍を分ち、三道より進み、自らは本軍に將としてホンガリアに入り、別軍はポーランドを取り進んで獨乙のシレシアに入つた。獨乙の諸侯等はポーランド軍と聯合して之をリーグニツツに迎へ撃つたが、聯合軍大敗して殆ど全滅の悲運に陥つた。それよりウィーンに至り本軍と合して伊太利を席捲せんとしたが、太宗の訃報に接したので全軍歸國の途にいた。拔都は獨り留まりヴォルガ河畔にあるサライに都を定めて東歐の地に君臨した。之を欽察汗國といふ。これより二百四十年の間拔都の子孫はこの國を支配した。

【旭烈兀の西征】 太宗の後一代を経て憲宗位に即き、弟忽必烈をして南征せしめ、旭烈兀をして西南アジアを征服せしめた。忽必烈はまづ四川に入り進んで雲南を攻めて其の地を取り、別將をして安南を攻めしめ自らは東北に進んで揚子江を下り鄂州に陣して宋軍と對峙した。この時憲宗は忽必



烈を助けん爲に自ら出征したが、途中で病死したので、忽必烈は急に宋と和して北上した。

旭烈兀はベルシア地方を平らけて西に進み、東サラセン帝國の首都バグダードを陥れたから、サラセン帝國茲に亡びた。(一二五八年)旭烈兀よつてタブリスに都を定めて國を建て伊兒汗と號した。其の版圖は東は印度川より西は小アジアに及び、カスピ海・アラル海以南の地を占めて北は欽察汗國と境を接した。この頃、中央アジアにある察合臺汗國と合せて三汗國鼎立の姿をなしてゐた。

【元の世祖】 忽必烈は急ぎ北に歸り開平に都して自ら蒙古の大汗となり、後國號を元と云つた。之を元の世祖といふ。世祖は更に都を燕京(今の北京)に移し、頗に支那の文化を取り入れ、遂に大舉して宋を攻め滅して其の地を併せたから支那は元に一統せられた。(一二七九年)其の後緬甸・東蒲塞・安南等を征服し、ジャヴァスマトラ等の南洋諸國をも朝貢せしめて國威を海外に輝し、唯我が國の征伐のみは失敗に終つた。かくて元は三汗國を屬國としアジア洲の大半は元の勢力圏に入り未曾有の大帝國となつた。

【東西の交通】 かく元の領土は歐亞の二大洲に跨り、其の間に在つた諸國は皆滅びてしまつたから東西の交通が自由になつて大に開けた。殊に泉州・杭州の如きは外國人の來り住むもの多く商業頗る活潑であつた。

忽必烈は寛大なる政策を取り、朝廷には人種の差別なく才能ある者を重用したから漢人は固より

中央アジア・ベルシア等の人々を始め、西歐人の來り仕ふるものも多かつた。中にもイタリアのマルコ・ポーロは十七年の間蒙古の朝廷に仕へ、歸つて後東洋見聞録を著したが、歐洲の各國語に翻譯せられ大に廣まつたから東洋の事情は之によつて歐羅巴人に知られた。殊にジバングの名が始めて西歐人に知られたのはこの東方見聞録を通じてであつた。かゝる時代だから回教徒もこの頃支那の内地に移住したが、羅馬法王や佛國王も使僧を蒙古に遣した。されば世祖の末年より基督教の宣教師は陸續支那に來り教會を燕京に立て盛に布教したのである。

【元の末路】 元は世祖の時を最盛の時代とし、次代から衰運に向つたのである。なぜかく急速に衰運に傾いたかといふに、これには特殊の事情もあつた。蒙古では君主が死すれば一族諸將相會してクリルタイ(大會議のこと)を開き後嗣を定むる習慣であつたから、帝の生前に皇太子を定めておくと云ふことはない。英傑忽必烈なればこそ慣例を破つて舊都和林に歸らず開平で自ら帝位に即いたのである。かかる慣例ある故、皇帝が死ぬ毎に相續争ひが起つて而かも權臣が己の意中の帝を迎せんとする所から王族權臣の中に暗闘が絶えず行はれた。國政が亂れて衰運に傾くのは當然のことである。又蒙古は成吉思汗以來幾だひとなく大征伐を企てたから軍事費が莫大の額に達し、財政頗る困難に陥つた。且世祖以來帝后を始め多くの皇族が喇嘛教を尊信して喇嘛僧を崇敬し盛に佛事供養を營んだから其の費用は莫大の額に上つた。喇嘛教は佛教の一派で唐の中頃から西藏に行はれて

たが、元の頃から支那に入った。是等の事情から朝廷は重税を課しても尙足らぬので、交鈔(紙幣)を濫發して國費に宛てた。不換紙幣は人民に不安を増さしめるので貨幣は益々下落して物價は愈々騰貴し、國民も大に苦んだ。かくて元は國初から衰運の兆があらはれ國民が塗炭に苦しんでゐるのに加へて漢人種は蒙古人種を戴くことを心から好まなかつた。最後の順帝が遊樂に耽つて政を顧みなかつたので革命の亂が四方に起つた。中にも朱元璋は江南に起り頻に附近の群雄を平らけ勢力日々に加はり、遂に帝位に金陵(南京)に即き國を明と號した。之を明の太祖といふ。太祖は已に江南を平らけ徐達・常遇春をして兵を率ゐて北京を攻めしめ、順帝は逃げて蒙古の地に走つた。元は僅に八十九年で亡びた。この後順帝の子孫は蒙古にゐる北邊を侵し永く明の患をなした。

## 第七章 土耳其人の興起

### 本章の主眼點及び取扱方

土耳其人の侵入は中古末、第二回目の黃禍であつた。一千餘年間、東歐に雄視してゐた老大國東羅馬帝國は、遂に黃禍の犠牲となつた。或る歴史家は土耳其帝國の君府遷都の年を以て中古史の終りとする。されど東羅馬帝國の滅亡は必ずしも中世的思想の終焉、近世文明の出發點と見るべきではないから、正しい時代區分とは云へない。寧ろ古學復興、地理上の發見によつて歐羅巴人の思想

に一大變化を來し活動の舞臺に一轉機を來した時を以て時代を劃するのが至當である。本書はこの見解より中古史・近古史の時代區分をした。近古史は即ち宗教改革といふ新思想の勃興を以て始とする。教授者はよく思想の變遷に注意するを要する。

### 主要教材の解説

【土耳其の建國】 土耳其民族の西洋史に現はれたのは中古史の序幕ゲルマニア民族の大移住といふ大きな渦卷を起したフン族を以て始とする。其の後、セルジュック、トルコ族が西南アジアを侵しイエルサルムの要地を占領した爲に十字軍といふ前古未曾有の大動搖を歐洲諸國に惹起したが、セルジュック、トルコは民族的颶風を巻き起したのみで王國を建つるに至らずして跡を没した。十三世紀の末に至つて別派の土耳其族が酋長スレイマンに率ゐられて中央アジアから小アジアに移り、一時セルジュック、トルコの臣隷となつた。其の子オスマンに至り遂に獨立して帝と稱したから世にオスマン、トルコと呼んだ。これが土耳其帝國の基である。オスマンの子ウルカンは耶蘇教徒の青年を訓練してジャニザリーと名づくる親衛隊を編成したが、ジャニザリーは土耳其軍の中堅となつて國勢の發展に大きな力となつた。ウルカンの子ムラッド一世は始めて歐羅巴に進出してまづトラキアを取りセルビア・ブルガリアを平けて都をアドリアノーブルに奠めて背後から君府を脅かした。既にしてセルビアはボスニア・アルバニア等と同盟してトルコに抗したからムラッド一世は一三八九年之

をコソヴォボリエに撃つて聯合軍を粉碎したが、ムラッドも陣歿した。其の子バチャシッド一世は精悍父に優り、ブルガリア・セルビア・アルバニア・ボスニアを平定しワラキアを朝貢せしめマケドニア・希臘の地を併呑し、エーゲ海の諸島を略取したから歐洲諸國震駭し獨佛の武士等は基督教徒擁護の爲に匈牙利王シギスモンドを將とし東羅馬帝國の救援に赴き一三九六年のニコボリの大戦が茲に起つた。バチャシッドは一擧して聯合軍を粉碎し轉じてコンスタンチノーブルを包圍した。

【帖木兒大王】 東羅馬皇帝は第四十字軍に君府を取られて一たびニケーアに蒙塵したが、一二六一年君府を恢復して東歐に君臨して十四世紀末に及んだ。今や君府の運命は旦夕に迫つたので東ローマ皇帝は黃禍を以て黃禍を制せんとも考へたか、遙に急使を印度のデリーに派して援を帖木兒大王に求めた。帖木兒大王は成吉思汗の一族で、中央アジアに起りまづ察合臺汗國を亡してサマルカンドに都しついで伊兒汗國を亡して其の地を併せ、欽察汗國を降して臣従たらしめ、更に印度を略してデリーに進んだ。東羅馬皇帝の急を告ぐるや帖木兒大王は之に應じ急いで西に馳せ、小アジアのアンゴラにバチャシッド一世と會戦して大に之を破り、バチャシッド一世を虜にし土耳其の勢は一時沈衰した。

【東羅馬帝國の滅亡】 帖木兒大王はアンゴラの大勝後、東に轉じて明を滅さんとしたが途に死して果さず、帖木兒大王の王國は忽ち瓦解した。其の後バチャシッド一世の子ムラッド二世は國勢を

挽回し其の子ムハメッド二世に至り必ず東羅馬帝國を亡さんことを期し、急に君府を包圍し十四万の大軍と三百余艘の船艦を以て迫り大砲を以て城市を破壊したので城兵も力戦の功なく遂に陥落し、皇帝は戦死を遂げた。羅馬の文化は爲に一たび廢滅し、學者藝術家は遠く伊太利に逃れ、古學復興の運動を刺激することになつた。

## 第八章 文藝の復興 地理上の發見

### 本章の主眼點及び取扱方

古學復興は中世紀の時代相の殻から脱けて近世思想を作り上げる基礎工事であつた。中世紀は封建の武士と教會の僧侶とが最も勢力があつたから政治・社會・思想・藝術等一としてこの影響を蒙らぬものはない。つまり武士と僧侶の壓迫束縛を離れた自由の天地は何處にも見出されなかつたところが當時の時代相であつた。然るに十字軍の結果、この二つの勢力は地に墜ちたから今は強い壓迫から脱れ出でて凡ての束縛から解放されて近世の自由主義、個人主義の萌芽を見ることが出来たのである。古學復興は神の束縛から離れて人生の自由な天地を見出し、こゝに新生の傾向がまづ文學の方面に現はれたのである。

古學復興と前後して地理上の發見が新天地を開拓して活動の舞臺は擴大せられこゝにも新氣運が

勃興し、いよいよ中世紀の世相を一轉せしめ經濟的にも近世的・世界的となつたのである。

### 主要教材の解説

【古學の復興】 自由主義への第一歩を踏み出したのは十字軍時代に勃興したイタリアの自由都市であつた。彼等市民は逸早く東西貿易の鍵を握つて經濟上、自由の天地をきり開き、財力を以て封建武士の咽喉を扼し、強い壓迫から免れたのである。一たび自由の道へと突進した伊太利人は、他國人に先だつて自由への憧れが強烈であることは自然の勢である。かくして伊太利人は自由な思想を持ち自由な研究をするといふ自由の生活に入つたのである。しかもラテン文學やギリシア文學は全然クリスト教と關係なく個性を尊び自由を重んじたのであるから、古學復興は愈々新生の傾向を導いたのである。ルネサンスといふは古きものが亡びて新しきものが生れるといふことを意味するによつても此の間の消息が分る。

十三世紀の末に出たダンテがルネサンスの先驅者といはれる。其の名著神曲は中世紀最大の叙事詩で宗教の束縛を離れさまざまの人間其のまゝの姿を描き出した點に於ても古典的でなく近代伊太利語で書かれた點に於ても舊來の殻を脱してゐる。

ついで十四紀の中頃にベトラルカ・ボッカチオの二人が現はれた。ベトラルカは古代文學を推奨した最初の學者で、文學を通じて古人と交際せんことを求め、ボッカチオはデカメロン(十日物語)を

著はして人情話を描寫した。是等の學者は神の奴隸から脱して人間を題目としたのであるから、世に人道學者といひ、この派を人道學派といふ。

人道學派はやがてアルプス山を超えてドイツ・フランス・ネーデルランド等に弘まつた。獨のロイヒリンは伊太利に遊んで希臘語の教師につき、歸つて後、ヘブライ語をも研究して茲に人道學派は一轉して宗教改革派となつたのである。ネーデルランドのエラスムスはヘブライ語の聖書を直譯して世に弘めたが、かく智識の普及する時に方り、獨乙のグーテンベルヒは活版術を發明して大に學問の傳播を助けた。

【美術の復興】 古學復興の新氣運は忽ち美術の上にも現はれた。中世紀の建築では唯ゴート式の鋭き尖頂が空を衝いてよくゴート風を表現した外、見るべきものが無かつた。而も多く寺院の建築に用ひられて宗教の束縛を脱し得なかつたが、伊太利にまづ復興式の建築が現はれセント、ペートル寺は其の代表作である。ブラマンテが設計しミケランジェロが最後に出でてこれを完成した。設計構造等すべて自由の手腕を發揮してゐる。彫刻繪畫は中世紀には寺院の裝飾たるに過ぎなかつたが、レオナルド、ラファエリ、ミケランジェロ等は各々天才を發揮して思ひのまゝに色と形と線とで描き、自然界・人間界の美を寫した。故に繪畫は復興藝術の花といはれる。ミケランジェロは彫刻に絶大の手腕を揮ひ、多くの傑作を残した。中にもフロレンス美術館にあるダヴィッド像は最も名高い。

【地理上の發見】 マルコ・ポーロの東洋見聞録は大に歐洲人の冒險心をそゝつたが、葡萄牙の王子ヘンリーは大に航海探検を奨励したので、陸續新地が發見せられるやうになつた。ヘンリーはまづ船を出してアフリカ西岸を探検せしめ、ヴェルデ岬を發見したが、ついで葡王ジョン二世の時、バルトロミュー、チアズはアフリカの南端喜望峯を發見し、一四九八年ヴァスコ、ダ、ガマが始めて印度に達して印度航路を發見した。

これより先、伊太利ジェノアのクリストファー、コロンブスは地球は球形なりとの説を信じ、西に航して東洋に至る捷路を發見せんとし、西班牙女王イサベラの援助により、一四九二年夏バロス港を出帆した。三艘の帆船に百二十人を分乗せしめ、七十余日の後始めて陸地を發見してサンサルヴァドル(救世主の意)と命名し、アンチルス島を發見し、其の土人や産物を携へて歸り、女王イサベラに献上した。コロンブスはこゝを印度と考へたが、後其の然らざることが分つてから西印度と呼ぶことにした。コロンブスは前後四回渡航して幾多の島を發見したが、フロレンスの人アメリゴ、ヴェスプッチが南アメリカを探検して實測地圖を出版して世に弘めたので、この大陸をアメリカと呼ぶやうになつた。

一五一九年、マジエランは西王の保護によつて世界一週を企てた。五隻の帆船に二百人を分乗せしめ、大西洋を横斷し、南アメリカの南端マジエラン海峡を廻り、大洋に出でて太平洋と命名し、

西北に進みフィリッピン諸島に至つて土人に殺された。フィリッピンは時の王子フィリッブの名に因んだのである。かくて一行の生存者十八名は一七二二年イスパニアに歸着して世週一週の功を遂げ、世界の球形なることが實証せられたのである。これより探検熱益、旺盛となり、新地が陸續發見せられ、葡・西兩國はアメリカ大陸及び東洋に多くの領土を獲、兩國人はサラセン人・伊太利人を壓倒して貿易の利を獨占し、地中海・バルト海時代は去つて大西洋印度洋時代となり地中海諸港はこれより衰へて葡萄牙のリスボンが世界第一の貿易港となつた。

## 第九章 明の衰勢と西歐人の東漸

### 本章の主眼點及び取扱方

本章は中古史の末章であつて中古史の結末をつけるのである。前章の地理的發見の結果、葡西兩國人は新大陸及び東洋に活躍したが、新大陸は未開野蠻の情態であつたから、發見すれば直に其の領土とすることを得た。たとひベル・メキシコの如き王國ありしにせよ、一隊の進撃によつて能く之を服屬せしめることが出来たのである。之に反して東洋諸國は數千年來の文化を保ち強大なる帝國が成立してゐるから容易に之を領有することが出来なかつた。外交手段によるか又は多年の繼續戦によつて勝敗を決せねばならなかつたのである。故に西力の東漸を述ぶるにはまづ東洋の形勢を

明かにした上でなければならぬ。これ明の歴史をまづ説かなければならぬ所以である。然るに従來の如く東洋史教科書・西洋史教科書と分けて教授する時はこの東西の關係を忽かせにするから、自然、世界大勢の推移を理解せしめることが出来ない。これらの點から見ても外國史として連絡關係せしめて教授することの有理なることが明かである。

最後に中古史總括に於ては、東西兩人種の接觸・衝突の要點を概括して中古史一千年間に於ける世界の鳥瞰圖を見せるのである。これも東洋史と西洋史とを別々に教授するに比して優れること万々なるを証するものである。中古史は殊に東洋民族と西洋民族とは同等の資格で交渉してゐるから、東洋民族としては空前絶後の痛快事であつたのである。又我が國の世界史における地位如何と云ふにこれは僅に水平線に出たのみで室町時代末に於ける西歐文化の傳來がたゞ注意すべきことである。

### 主要教材の解説

【明の衰勢】 明の太祖は一三六八年に建國し千四百年頃最も隆盛を極めたが、その後間もなく衰運に傾いたから、西歐人の東洋に活躍した頃は隆盛時代を過ぎてゐた。

はじめ太祖は元の早く亡びたるに鑑み、子弟同族を封じて帝室の藩屏とした。これは漢の高祖が封建制を布いたのと同じ動機で而かも其れ以上の失敗を招いた。子惠帝の時、諸王の勢力強大となり叔父燕王棣は帝室の難を靖んずるを名として兵を挙げ、金陵を陥れて自ら帝位に即いた。これを

成祖(永樂帝)と云ふ。都を燕京に遷して之を北京といひ之に對して金陵をば南京と云つた。

成祖は遠征を事とし、北は韃靼(元の裔)を征し瓦剌(ウエラクト)を攻めて大勝を博し、又宦官鄭和に命じて南海諸國・印度支那半島及び南洋諸島を經略せしめ、又印度洋方面に船を出して朝貢を勧めたので朝貢するもの三十餘國に達し、通商貿易も盛であつた。

けれども、成祖死して後、瓦剌・韃靼は屢々北邊に寇し、倭寇は海岸を侵掠し明廷は南倭北虜として大に恐れ、國力も次第に疲弊した。加ふるに、神宗は朝鮮に出兵して我が軍と戦ひ、財政益、困難となり、宮中には黨派の争絶えずして帝室衰へたから、約三百年の國祚を保つたとはいへ、國民の元氣は常に振はなかつた。

【西歐人の東航】 葡萄牙人は印度航路發見の名譽を負ひ、羅馬法王アレクサンドル六世は一四九三年大西洋上アゾール島の西方百リーグの所に南北に互れる一線を畫し、其れより以東を葡國領、以西を西國領と定め、世界を二分して其の一を保たしめた。間もなく葡國は印度のゴアを根據地として頻に侵略を企て、セイロン・爪哇・スマトラ・ボルネオ及びマラッカ半島を取り暹羅國と通商を開き、更に北進して明の神宗より阿媽港(澳門)を租借し、天文十二年(一五四三年)以後は我が國とも通商した。西班牙人はマジユランがフィリッピン諸島を探検してより茲に植民して支那・日本とも通商し、明の末葉には和蘭人も東洋に來航し、頻に葡國の植民地を奪ひ、爪哇のバタヴィア府

を根據地としたが、これらは近古史に屬するからこゝには詳説しなくてよい。

【基督教の東漸】 東洋の新航路が開けてから基督教宣教師の東方に布教するもの多く、ジェズ・スイツト派のフランシス・サヴィエルが先づ印度のゴアに来て布教し、一五四九年には我が國にも來朝した。サヴィエルは明にも布教せんとしたが途中で死し、後に伊太利人利瑪竇始めて明の神宗より布教の許可を得て北京に教會を建て、それより陸續明に來て布教し、皇族大官の歸依するものが多かつた。東洋では之を天主教といひ我が國人は切支丹宗とも云つた。これら宣教師によつて西洋の學術も傳來し清代に至り湯若望を欽天監としてから曆法・數學・砲術なども頻に傳はつた。

### 第三篇 近古史

#### 本編大旨

近古史は約三百年に互り前半の百五十年間は宗教改革時代であつて新舊兩教徒相争つて戦亂絶えず、終に三十年戦役となり、ウエストファリア條約によつて宗教戦争が終りを告げた。この時代の初は葡西兩國の全盛時代といふべく、羅馬法王は大西洋上に南北兩極を通じて一線を畫し、葡西兩國が世界を兩分して領有すべきを宣した。十六世紀末に西王フィリップ二世は葡萄牙王を兼ねて一時世界を併有した觀を呈したが、屬領和蘭が獨立を企て英王之を助くるに及び一五八八年フィリップ二世必勝艦隊を編成して英・蘭艦隊を撃滅せんとして却つて大敗を蒙り西葡兩國はこれより衰へ、和蘭之に代つて世界の海運業を獨占した。

近古史の後半は絶對君主時代といはれ諸國の帝王は王權神授説を唱へて獨斷專制をした。これが近世史劈頭に起れるフランス革命を誘起せしむる原因となり、近古史は終を告げた。

列國の勢力關係もこの頃大いに變化した。英國はまづ航海條例を發布して和蘭の海運業に致命傷を與へ次第に和蘭に代つて海上に勢力を握つた。されど佛國はルイ十四世の隆盛時代を現出し植民貿易を盛にして英國と富強を競ひ、十七世紀には英佛の反目甚だしく、遂に英佛植民地の七年戦争

を見るに至り、英國は多くの植民地を佛國より割取して歐洲第一となるべき地歩を占めた。されども間もなく北米大陸に獨立戰爭起り、約十年に亘れる戦闘を續けて遂にアメリカ合衆國の獨立を認むるの已むなきに至つた。

また十八世紀の初には北歐に露、普の二國勃興して一躍強國の伍伴に入り英・佛・奥の三舊國と併せて五大強と云はれ、歐洲國際關係はこの五大強によりて支配せらるゝことになつた。清國の興起は恰も露國と時代を同じうしたけれども極東に偏在して歐洲の國際場裡に出なかつたから歐洲史と殆ど没交渉であつた。されば明末清初の東洋は西歐人の貿易と布教との爲の目的物たるに過ぎなかつた。

## 第一章 宗教改革

### 本章の主眼點及び取扱方

中世紀末に古學復興の氣運盛となり、ギリシア語・ラテン語の研究に興味を感じた人道學派が、アルプス山北に飛んでは、ヘブライ語の研究を促してバイブルの本義を闡明するに至つたから、人道學派はこゝに宗教改革派に變つていつた。されば宗教改革の叫びも、其の實は古學復興の雰圍氣の間に初聲を擧げたのである。中古末に於ける古學復興の直後に宗教改革といふ近古史の序幕が開

かれたのも當然の結果と云ふべきである。

宗教改革はまづ獨乙のマルチン、ルーテルによつて第一聲が擧げられ、フランスのカルヴィン、瑞西のツヴィングリは何れも羅馬教會の形式を排斥し、中にも英國のビュリタン派・クエーカー派等の新教諸派相ついで起るに至つた。是等新教に對して羅馬教會を舊教と呼ぶやうになつた。羅馬教會も亦自ら悟る所あり、まづ教會を刷新し僧侶に嚴肅なる訓練を施して衰勢を挽回せんとする運動が起つた。ジュスイット派是である。宗教改革の反動として起つたものである。かくて新教と舊教とは兩々相對立して各、其の信向を貫徹せしめんとして宗教戰爭を見るに至つた。

### 主要教材の解説

【ルーテルの宗教改革】 中古、教會の風紀紊るゝに方つて宗教改革の企てが屢々起つたが何れも失敗した。英のオクスフォード大學のジョン、ウィクリフは十四世紀の末、聖書を英語に翻譯して普く國民に讀ましめんことを企て眞理は聖書のみに見出さるべしと羅馬法王に反對したが、教會の爲に抑壓せられた。次いでホヘミアのフスはウィクリフの説を受け羅馬法王に反對しホヘミア人擧つて之に賛して獨帝に叛いたので、宗教會議の結果、火刑に處せられた。この後、宗教改革の聲は一時絶えた。

十六世紀の初、法王レオ十世はセント、ペートル寺建設の資を得んが爲に免罪符を賣らしめたが、



獨乙に於ては最も陋劣を極めたものであつた。時にウィッテンベルヒ大學教授マルチン、ルーテル憤然として立ち、一五一七年ウィッテンベルヒの寺院に九十五箇條の意見書を掲げ、大に法王及び教會を批難した。この意見書は旬日の間に獨乙の各地に流布され共鳴者が非常に多かつた。法王聞いて大に怒り、ルーテルを破門したけれども、ルーテルは公然破門狀を焼き捨て、愈々挑戰的態度を執つた。

【チャールス五世】 ルーテルの宗教改革は政治問題ともづれ合つて愈々紛糾を極めた。當時、西班牙王チャールスは祖父の後を承けて獨乙皇帝を兼ねてチャールス五世と稱したから、其の領土は廣大なものであつた。即ち獨乙・西班牙の本國の外、ネーデルランド(今の白耳義・和蘭)北部伊太利を屬領とし、植民地として新大陸の大部分(ブラジルを除く南北亞米利加)を有してゐたから、さながら全歐の覇者であつた。佛國のフランシス一世は之を以て國力の均衡を破るもの、歐洲の平和を害するものとして飽くまで反抗した。因みに近世の歐洲諸國が國力均衡を得るを以て外交の要諦とする様になつたのはフランシス一世を唱首とする。さてチャールス五世は佛王を挫かんにはまづ法王の歡心を得る必要があつたし、法王も其の呼吸を知つてゐたから獨乙國內の謀反者ルーテルを押しつぶすべきを暗に要求した。そこでチャールスは即位後はじめ獨乙國を巡察してウォルムスに獨乙國會を開き、列侯の面前にルーテルを招いで其の所説を捨てしめようとした。けれどもルーテルの信仰心

は到底威武を以て屈せしむることは出来なかつた。彼は皇帝の前に立ち、昂然として「余の信仰を變へることが出来ない、唯神のみ余を助ける」と言ひ切つた。獨帝は「帝國の法律はルーテルを保護せず」と宣告したから、ルーテルの身邊は危険此の上もなかつた。かくてルーテルは國會議事堂の門を出ると、覆面の武士が左右から出てルーテルを拉し去つた。圖らずもこれはルーテルを害せんとするものではなく、ルーテルの新教に共鳴しルーテルの氣概を賛歎し一國の存亡を賭してルーテルを庇護せんとするサクソニア王フレデリック賢王の兵士であつた。これよりルーテルは賓客としてワルトブルグ城中の一室を供せられてバイブルの翻譯に餘念もなかつた。これがバイブル獨語翻譯の始である。(ルーテルは一五二二年この城を出た。)チャールスは兵力を以てルーテルの徒を抑壓せんとしたが、この時、佛王は既に北伊太利に出兵してチャールスに戦を挑んだから、チャールスはまづ佛軍と戦はねばならなかつた。これより獨佛の戦争は二十餘年間續いた。第一役は一五二五年バヴィアの戦に勝ち佛王を擒にして首府マドリッドに凱旋し、和を約せしめて歸國を許した。然るに佛王は脅迫による條約は履行の義務なしとて、直ちに開戦し、茲に第二役が起つた。この役もチャールスの勝利に歸して一旦和約を結んだ(一五二九年)

外戦に少閑を得たので、一五二九年帝はスバイエルに國會を開いて新教禁止を一氣に決議し去らんとしたが、新教徒は信仰は多數を以て壓すべきものにあらざると飽くまでプロテスタ(抗論)した

から、遂に決議することが出来なかつた。是より世人は新教徒をプロテスタントと呼んだ。この故にプロテスタントといへば新教徒を意味することになつた。

翌年又國會をアウグスブルグに開いて各派其の主張を戦はせたが、新教徒はメラシヒトン（ルーテルの親友）の起草した信向條目を提出して大に主張したが、遂に容認せられず、國會は反つて新教徒を異端者と見做したので、新教徒は不安を感じるやうになつたから、自衛の爲にシマルカルデン同盟を結び、武力を以て主張を貫徹せんことを期した。（一五三一年）

かくていよいよ宗教戦争が起らうとした時、トルコ皇帝スレイマン一世は大舉してハンガリアを侵し、進んでウィーンを圍み佛王も之に應じてドイツに開戦したから、帝は暫らく新教の自由を許し舉國一致して敵に當り、遂に土軍を撃退し佛王と和約を結んだ。

【新教の公許、弘通】 それより帝は兵力を以て新教徒を抑壓せんとしたので、シマルカルデン戦争起り新教軍一たび敗れて、新教の首領サクソニア侯フレデリックは捕虜となつた。されどフレデリックの子モーリスは父の後をつぎ佛の新王ヘンリー二世も新教徒を助けて戦を開き、激烈な戦争となつたが、帝軍遂に大敗しチャールス五世はイスパニアに逃れついで西王の位を子フィリップ二世に譲りサン、ユスト寺に退隠した。

是に於て新教徒は一五五五年アウズブルクの宗教會議に於て公然自由を許され、これより新舊

兩教徒は獨國內にて全く同等の權利を得た。實にルーテルの死後十年目である。新教はこれより北獨乙を中心として瑞典・那威・丁抹等に廣つた。因みにルーテルはウィッテンベルヒの寺院内に親友メラシヒトンと柩を並べて永眠してゐる。

この頃、瑞西人ツウイングリも新教を唱へたが、一五三二年舊教徒と戦つて陣没したから、瑞西の外にはあまり弘まらなかつた。

佛國のカルヴィンは新教を唱へて國外に逐はれ瑞西のジュネーヴに於て新教を唱へ、信者が次第に殖ゑて更に佛國に布教して一時有勢となつた。佛人は之をユーグノーと呼んだ。佛國に巻き起つた新舊兩教徒の戦争は後章にゆづる。カルヴィン派は和蘭・スコットランドにも廣まつたが、これらの地方ではプレスビテリアン派と呼んだ。プレスビター即ち長老派と云ふ意味である。この派は僧侶の階級を設けず寺院に關することは町村から選舉せられた長老によつて處理せしめたから名づけたのである。

【耶蘇會】 宗教改革の反動として舊教の勢力を挽回せんとする運動が起つた。はじめ西班牙のイグナチウス、ロヨラ及びフランシス、サヴィエル等主唱となつた。耶蘇會（ジエズイット派）を創立した。彼等は戰場に兩軍の對峙ある如く世界に神と惡魔との二つありとし、新教徒を惡魔となし神の軍隊を以て撃滅せんことを期し、信仰と従順を以て基督の兵士としての訓練の第一義とし、僧侶に嚴肅

な精神的訓練を施した。又彼等は子弟の教育に力を盡し學校を以て「信仰の城塞」と名づけた。一五四〇年、ローマ法王の許可を得、盛に傳道僧を養成して異教徒地方及び新教地方に布教した。殊に新大陸及びアフリカ洲アジア洲に傳導して新教徒の爲に失へる所を償はんとした。我が國に傳來した天主教(又切支丹宗といふ)は即ちこの宗派である。又彼等が新教徒地方の大都會に於ては、盛に學校を建て、子弟を教育し寺院や慈善事業を起して献身的に努力したから、子弟病人等を通じて其の父兄家族を改宗せしめた。かくて十七八世紀の交には舊教徒の歐洲に於ける勢力は侮るべからざるものとなつた。今日では伊・佛・西等の南歐はすべて舊教國といつてもよい。

## 第二章 宗教戦争 西班牙の盛衰

### 本章の主眼點及び取扱方

本章は宗教改革の氣運盛となり新教徒漸く擡頭し來れる結果、新舊兩教徒の争は猛烈となり歐洲に到る處に新舊兩教徒の戦争を見るに至つた。まづ耶蘇會の發祥地たる西班牙國とブレスピテリアン派の巢窟たる屬領ネーデルランドとは激烈なる戦闘を演じ、其の結果政治問題を誘起して和蘭獨立戦争となつた。英國の宗教戦争も政治問題ともつれ合つて遂にローマ法王と絶縁して英蘭教會の成立を見たが、一時之が爲に内亂が起つたけれども、結局エリザベス女王によつて國教制が布かれ

た。佛國における新舊教徒の戦争は最も慘烈を極めたものであつたが、ヘンリー四世立つに及んで一時兩教徒の融和を見、國內も平穩となつた。

以上は何れもそれ／＼の國內に於ける新舊兩教徒の争であつたが、最後に歐洲諸國の新教徒が國境の別なく、一團となつて舊教徒と戦つたのは三十年戦役である。されども三十年戦争の初期にこそ單純な宗教戦争に過ぎなかつたが、中頃以後は全く列國間の勢力争ひとなり信仰問題は名のみとなつた。即ち瑞典王がバルト海の制海權を得んとしたる如き、佛國がライン左岸に領土を弘めんとした如きは何れも領土擴張を目的としたものである。かくして三十年戦役中、既に信仰心が薄らぎ列強の侵略主義が濃厚となつて宗教改革時代が終を告げ、次の絶對君主權時代を現出したのである。

### 主要教材の解説

【西班牙の強大】 西班牙が新大陸を獲得しメキシコ・ペルーの金銀礦を發掘し農商業の利益を収めて莫大の富を攫み歐洲第一の富強を誇るやうになつた。チャールス五世の子フィリップ二世は葡萄牙統絶ゆるに及び、葡王を兼ねて其の本國及び植民地を併領したから世界の富は凡べて彼一人の手に歸したといつてもよい。フィリップの驕慢心はこゝから起つたのである。

この時、屬領ネーデルランドは商工業早く發達ししかもブレスピテリアン派の新教を奉じてゐたから、フィリップは威力を以て新教徒を絶滅せんとして嚴しくネーデルランド人を抑壓し、商業の自

由を禁じ又新教徒を虐殺するに至つた。前者は生活の脅威であり後者は信仰思想の撲滅である。ネーデルランド人の反抗心は殆ど熱狂的であり、猫を噛む窮鼠であつた。殊に沈黙公といはれたオレンジ公ウィリアムは殉國の赤誠を以て陣頭に立つたから、叛軍の意氣は到底武力や暴壓を以てしづめることが出来なかつた。流血裁判も凡べてのネーデルランド人を滅し得ずとすれば寧ろ激昂の度を高めるに過ぎなかつた。かくて舊教信者たる南部十州(今の白耳義)はバルマ公の懐柔政策に釣られて歸服したけれども、北部七州は一五七九年ユトレヒト同盟を結び一七八一年には遂に獨立を宣言し、ウィリアムを推して世襲總督に推戴した。これが今の和蘭の起源である。ウィリアムは不屈不撓の精神を以て屢々西軍と戦ひ、遂に刺客の手に斃れたけれども、其の子モーリスは英國女王エリザベスの援を借り、蘭英聯合艦隊を組織して西王フィリップとの戦をつけた。

【英蘭の隆盛】 英國はこの頃既に宗教改革を遂げて新教國となつてゐた。はじめ英王ヘンリー八世はルーテルの宗教改革に反對して反駁文を草し、法王から「信仰の保護者」といふ稱號を與へられた。されどヘンリーは前王后を離縁して宮女アン、ボレインを娶らんとして法王に拒絶せられてよ、法王を敵視し遂に法王と絶つて一五三四年國會の決議によつて英蘭教會の長となつた。これが英蘭教會の起である。其の子エドワード六世(ヘンリー八世第三后の所生)の時大僧正トマス、クランマー祈禱書を草して國會の協贊を得た。エドワード早く死し姉メアリー(ヘンリー八世第一后カザ

リンの所生)後をつぎ西王フィリップ二世と婚して新教を抑壓したが、間もなく死して異母妹エリザベス(第二后アン、ボレインの所生)代つて王となり、新教を採用し統一令を出して新教を國教とした。エリザベス女王は西班牙を弱めて自國の海上權を擴めんとし、和蘭を助けて西王に宣戦した。フィリップ二世は必ず英艦隊を全滅せんことを期し、大艦隊を編制して必勝艦隊と名づけまづ英國を襲撃せんとした。一五八八年英將ハワード・ドレークは之を英海峡に要撃し交戦七日夜にわたり、多數の西國艦隊を撃沈したので、残りの艦船は北海を経て遁走せんとしたが、スコットランドの北角にて暴風に逢ひ殆ど全滅した。これが西國衰微の始まりである。其の後、フィリップ二世の子フィリップ三世立つに及び、一六〇九年和蘭と休戦條約を結んだから、事實上獨立を承認したことになる。しかし列國が公然和蘭の獨立を認めたのは一六四八年のウェストファリア條約である。

かくてエリザベス女王の時、英國は他日雄飛の基をおいたが、女王はなほ國民の海外發展を奨励し東印度會社の成立、ヴァージニア(女王の名を傳へんために名づけた)の植民はこの時に起つた。女王の時は文藝も隆盛を極め、文豪シエクスピア、哲學者ベーコン等の大家を出した。これまでは演繹的研究のみ行はれたが、ベーコンは歸納的研究法を唱へて近世科學研究の端を啓いた。

【佛國宗派の争】 カルヴァン派の新教が佛國に廣まると、舊教徒は之を忌みユーゲノーと呼んで大に之を壓迫し、遂に血を見る戦争となつた。はじめ佛王フランシス一世及びヘンリー二世は國策上

獨國の新教徒を助けなければ自國では之を嚴禁した。ヘンリー二世の子チャールス九世幼年であつたから、母カザリン攝政となつたが、舊教徒の首領ギーズ公の勢力あるを忌み之を除かんとして新教の首領ヘンリーを擧げて新教の自由を許した。ギーズ公大に怒り急に襲うて新教徒數十名を銃殺したから、茲に新舊教徒の戦争が起つた。之をユークノー戦争といふ。一五七〇年サンジェルメシオン和約を結び一たび平和に歸した。然るにカザリンは新教徒の首領が勢力あるを忌み今度はギーズ公と結托して之を殺さんとし、遂に王に迫つて新教徒擧殺の勅令に署名せしめ、一五七二年八月二十四日セント、バーソロミュー祭日の鐘を相圖にコリニー以下の新教徒を虐殺し、是より國內到處に新教徒の虐殺行はれ、其の數三万人の多きに達した。チャールス九世の弟ヘンリー三世王となるやギーズ公の專横を惡んで之を殺し、自ら新教徒の軍に投じ、間もなく舊教徒に暗殺せられた。こゝにヴァロア家の王統絶え、王妹マーガレットの夫ナヴァル王ヘンリー入つて佛王となつた。これがブルボン家の祖ヘンリー四世である。ヘンリー四世は舊教に改宗して舊教徒の心を和らけ、一五九八年ナントの勅令を發して新教徒に自由を許し、多年の戦亂始めて収まつた。

【三十年戦役】 獨國では、其の後、新舊兩教徒の軋轢甚だしく、一六一八年新教派のボヘミア人兵を擧ぐるに及んで、三十年の大亂となつた。三十年戦役は四期に分たる。第一期はボヘミアの亂である。はじめ、ボヘミア王フェルディナンド、獨帝となつてボヘミア人を壓迫するや、ボヘミア人は

新教徒の首領ファルツ伯フレデリック五世を迎へて王としたが、間もなく敗北して和を請ひこれより益々新教徒が壓迫せられた。

第二期は丁抹戦争といはれる。丁抹王クリスチアン四世は獨の新教徒が抑壓せらるゝを救はんとし、兵を率ゐて侵入した。獨帝フェルディナンド二世はワレンスタインをして之を討たしめ、一六二九年丁抹王遂に和を請ひ獨乙の内治に干渉せざることを約した。

第三期は瑞典戦争といはれる。瑞典王グスタフ、アドルフは獨國の新教徒を救ひ且つバルト海岸の主權を握らんとし、精兵を率ゐて獨國に入り連に帝軍を破り、一六三二年ワレンスタインとリユッセンに戦つて大勝を得たが、其の身は陣歿した。ワレンスタインは私財を投じて兵を養ひ富強を誇り、屢々皇帝の爲に戦功を立てたが、リユッセンの戦後、反逆の疑を受けて殺され、獨軍の勢これより衰へた。

佛國のリシユリユーは自國の勢力を東方に張らんとし、瑞典王を助けて軍資を出し、グスタフ、アドルフの死後、宰相オクセンスチエルナも佛の軍資を得て獨帝との戦をつけた。

第四期戦は瑞佛の獨國侵入である。一六三五年には佛國公然瑞典と同盟して兵を出し、頗に帝軍と戦つたが、一六四八年に至り列國遂に和を結び、三十年間の戦争は始めて終熄した。

【戦役の結果】 ウェストファリア條約はウェストファリア州のミュンステル及びオスナブリュックで締結

されたから名づけたのである。この條約は近古に於ける列國關係の基礎をなせる者で、爾後約百五十年間効力を保つてゐた。其の重要な條項は(一)カルヴィン派・ルーテル派・舊教派は政治上社會上同等の權利を得ること(二)佛國はメッツ・ツール・ヴェルダン及びエルザスの大部分を得、(三)瑞典は獨乙の北岸にある前ボメラニア及びリューゲン島を領して獨乙國會に出席する權を得、(四)獨帝國內の諸侯は完全に主權を認められ(五)列國は瑞西・和蘭に獨立を承認することなどである。最もこの戦役の慘害を蒙つたものは獨乙帝國であつた。田畑は荒され人口は減じ道徳はすたれ學問藝術は衰へ人心は墮落した。帝國の統一はこれより破れて神聖羅馬帝國は名のみとなつた。

### 第三章 和蘭の隆興 英國の革命

#### 本章の主眼點及び取扱方

十六世紀は西葡兩國全盛時代であつて世界の富はこの二國によつて吸収せられた觀があつた。然るに一五八八年の必勝艦隊の全滅が兩國衰微の動機となつて忽ち奈落の底へと沈んで、遂に今日のやうな劣等國となつた。この兩國に代つて世界の商權を獨占して歐洲第一の富國となつたのは和蘭である。されど英國はこの間に絶えず海上權の擴張、商業貿易の發展を圖つてゐたから、恰も背後から蛇(英國)に睨まれてゐる蛙の跋扈するやうなものであつた。而かも和蘭人は世界の富を獨占し

ながら眼前の利益のみを計つて國家百年の大計たる海上權を確得することを忘れた。不生産的の軍艦を作ることは商人根性の和蘭人の懷ろ勘定には合はなかつた。であるから一旦他國から強大なる艦隊を以て襲撃を加へられた時は幾千百の商船も忽ち粉碎されて仕舞ふ外はなかつた。和蘭全盛時代が僅に一世紀に過ぎなかつたのは當然のことである。

和蘭と反對に國力の充實、制海權の獲得を第一義として國家百年の計を立てたのは英國であつた。中にも共和政保護者として武斷政治を敢行したクロンウエルは和蘭の商權に第一の打撃を加へた。一六五一年の航海條約がこれである。實に和蘭の衰微はこの航海條約に兆したのである。和蘭の海運業者はこの時より營業不振となり、東洋及び新大陸における植民貿易も次第に萎縮する様になつた。この間に英佛二國は盛に東洋及び新大陸に活躍して各、自國の勢力を擴張したのである。殊に英國民は内治に於ても次第に權利を擴張して責任内閣制をはじめ政黨政治の基礎を固くした。十八世紀の初にはイングランド・スコットランドが合同して大不列顛國成立し議會も合一したから英國は益々鞏固なものとなつた。

#### 主要教材の解説

【和蘭の隆興】 和蘭は獨立戰爭中、既に北米及び東洋に向つて活躍し、一六〇二年には東印度會社を創立して印度と直取引をするやうにしたから、フィリップ二世が和蘭の商人に鎖ざしたリスボン

はこれより反つて衰へた。獨立後は頗に葡西兩國の植民政策が土民の心を失へるに乗じて其の領土と商權とを奪取した。かくて東洋では我が國と通商を開きジャヴァにバタヴィア府を建て、東洋の根據地として南洋諸島に勢力を張り、一時は臺灣をも占領した。又アメリカでは南にギアナ北にニューネーデルランドの植民地を開きニュー、アムステルダム市を開いた。ニューアムステルダムは即ち今のニューヨークである。かくて十七世紀には西葡兩國に代つて歐洲第一の富國となり殊に世界の海運業をば一手に収めたのである。

【英國の革命】 英のエリザベス女王は側近のものが結婚を勧むるを拒んで「朕已に英國と婚したから第二の夫を持つ必要がない」と云つた。この處女王は一六〇三年に死んでチュードル王家の血統が絶えたから、國會はスコットランド王ジェームスを迎へて國王とした。これがスチュアート王家の祖ジェームス一世である。ジェームス一世は當時の思潮の中心たる王權神授説を持して憲法を無視し、其の子チャールス一世も同様に國會を無視して解散のまゝ十一年間も召集しなかつた。一六四〇年スコットランドのプレスビテリアン派が反亂するに及び、軍費を得んが爲に國會を召集した。そこで國會は王の失政を攻撃して王の要求に應じなかつたから王は武力を以て之を抑壓せんとした。これより國會軍と王軍との戦となり、八年に互る内亂となつたが、名將オリヴァー、クロンウェルは王軍を破り又國會の反對黨を追つて王をば國民の敵として死刑に處し、王政廢止、共和制成立を宣言した(一六四九年)

【共和政治】 やがてクロンウェルはアイルランド・スコットランドの勤王黨を討ち滅し、推されて、【共和政府保護者】となつた。クロンウェルは、内は武斷政治を行ひ奢侈を禁じ風俗を矯め舞踏場演劇場までも閉鎖し、外は和蘭と戦つて其の海上權を脅かし一六五一年航海條例を發布して和蘭の海運業に大打撃を加へ又佛國と結んで西國と戦つて其の勢力を挫き、ジャマイカ島を取り、外交政策の活潑なること前古未曾有であつた。しかし、其の施政が峻厳に過ぎたので、國民は之を怨むやうになり、其の身は自殺し、子リチャードは共和政保護者の職を辞した。

【名譽革命】 國民今や王政の昔を慕ふに至り、前王の子チャールス二世を迎へ立てた。されど王も憲法を無視して民權を壓したから國會は人身保護律及び審査律を議決して之を防いだ。王の死後、弟ジェームス二世も憲法を守らず舊教を保護したから國民怒つて王女メリーの夫和蘭王ウィリアムを迎へて王とし、スチュアート家こゝに亡びた。(一六八八年) 之を名譽革命といふ。血を見ずして革命を遂げたから名つけたのである。ウィリアムはまづ「權利の宣言」を公にして民權を伸張し責任内閣制を實行せしめ政黨内閣の基礎を啓いたから、英國憲法は茲に牢乎として動すべからざるものとなつた。

【大不列顛王國】 ウィリアムの後、女王アン立ちイングランド・スコットランドの議會を合一し、兩

王國を併合して大不列顛王國と稱することとなつた。(一七〇七年)英蘭と蘇格蘭とは同一の王を戴いてゐたけれども議會は別々に開かれたが、この時から一王國となつた。一七二四年ウィリアムの血統が絶えたので、獨乙のハノーヴァー家からジェームス一世の曾孫ジョージが入つて英王の位をついだ。これが今の英吉利王家即ちウインゾル家の祖ジョージ一世である。

#### 第四章 佛國の強盛

##### 本章の主眼點及び取扱方

葡西兩國は十六世紀の覇者、和蘭は十七世紀(前半)の覇者であるとするれば、佛國は十七八世紀における歐大陸の覇者といつてよい。佛國の強盛はルイ十四世時代を絶頂とする。國際的に覇を稱することは列強に妨げられたけれども、王權神授説をふり翳して當代諸帝王の指導者を以て自ら任じ、ヴェルサイユ宮殿は佛國貴族崇教の的となり、列強帝王の羨慕を受け、佛國の學藝は歐洲文化の中心となつた。かくして大洪水以前の佛國平原は百花爛熳の極致に達したことを知らしめる。

##### 主要教材の解説

【十七世紀前後のフランス】 宗教戦争の暴風はフランス國中を吹き荒らしたが、ブルボン家の祖ヘンリー四世は賢相シュリトを任用してまづ國內の秩序を復し行政財務の整理を遂げたが、子ルイ十

三世の時カーチナル、リシュリユーは非凡なる手腕と決斷力を以て佛國を強大ならしめた。まづ諸侯を抑壓し王權を伸張することを以て對内策の要諦とし、新教徒等がラ、ロシユル以下の要塞に立籠つて王命に抗するを惡み兵を發して之を攻め、遂に諸要塞を毀つて新教徒の横暴を根絶して王權を伸張せしめた。對外策としては獨西二國の勢力を殺がんことを期し、三十年戦争に干渉して豫想の効果を収めたが、戦争中、彼は刺客の手に斃れた。リシュリユーの次にカーチナル、マザレン宰相となり前相の遺志を遂行して内は諸侯を抑へ外は國威の發揚に力め、又ウエストファリア條約によつて東境の土地を獲得し又西國の内亂に干渉してピレネー條約を結ばしめてアルトア等の地を得た。こゝに至つて内は中央集權制を完成し外は國威を發揮して歐洲第一の強國となつた。

【ルイ十四世の内治】 ルイ十三世の死後、五歳のルイ十四世が即位し、マザレンが之を輔佐した。されど、其の死後は萬機を親裁し勵精治を圖り非凡の財政家コルベールを登用して其の經濟政策を厲行せしめた。コルベールは保護貿易政策を執り輸入品に高率の關稅を課し、毛織物・レース・硝子等の新工業を興し、自國の産物を盛に輸出して正價の流入を計つたから、國庫の收入を増し人民も富裕となつた。又コルベールは植民政策を敢行して北米にはミシシッピ河流域一帯の地を得て王の名に因んでルイジアナと名づけ、印度にも植民貿易の根據地をおいた。

ルイは王權神授説の權化と云はれ、自ら神の代行者を以て任じ、王の身體に危害を加へるものは



瀆神罪に問はるべしとした。又朕は國家なりと揚言し、王權を絶対無限のものとして極端なる専制政治を行ひ、廷臣貴族は王の左右に奉仕することを最大の名譽とした。王は其の威嚴を内外に示さんが爲にヴェルサイユに廣大壯麗な宮殿を營み、林泉の美を盡し、天下美術の粹を集めた。但し建築史上より見れば、寧ろ墮落したもので卑俗に近いといはる。之をロココ式建築といふ。この頃、文學美術大に發達し、ラシーヌ・コルネーユ・モリエール等の大家出でて文學史上未曾有の隆盛といはれる。これよりフランス語は各國上流社會の通用語となり、佛國は歐洲文化の中心となり、パリーの服裝は世界流行の源泉となつた。

【ルイ十四世の外國侵略】ルイ十四世は國の富強を恃み、頻に外國侵略を企てた。王后は西王フィリップ四世の女なるを以て西領ネーデルランドを相續する權ありとし、兵を出して侵略したが、和蘭は自衛の必要上、英國・瑞典と三國同盟を結んで之に抗したので、ルイは志を果さなかつた。(一六六八年)其の後、ルイはまづ英國・瑞典と同盟して和蘭を孤立せしめ兵を出して和蘭に侵入した。蘭人舉國一致して之に當り頻に佛軍を破つたが、後獨西二國之を援けたので、ルイは和約を結び、侵地を返し僅少の地を得た。(一六七八年)間もなく獨乙のファルツ伯死して繼嗣が無かつたからルイは王弟オルレアン公が伯の妹婿なる故を以て相續權ありと主張して出兵した。既にして列國の反對に逢ひ、僅にストラスブルクの地を得て兵を解いた。(一六九七年)最後にルイは西國王位繼承戰役

を起して歐洲の大亂を醸した。はじめ西王チャールス二世子なきにより、ルイはチャールスに己の孫フィリップを繼嗣と定めしめ、一七〇〇年、チャールス死して王位をつぎ、フィリップ五世と稱した。列國は之を以て國力の均衝を失ふものとし、歐洲の平和を破らんことを恐れ、英王主唱し蘭獨諸國と大同盟を作つて戰を開いた。この役に、勇將マールボロ公、帝軍の將サヴォイ公エージン、善く兵を用ひ屢佛軍を破り、ルイ大に窮した。既にして英國の内閣更迭し平和黨政を執つたので形勢一變し且つ列國が西王候補者としたチャールス六世が獨帝となり、同盟の目的が破れたので、遂にユトレヒト和約を結ぶに至つた。其の結果、(一)列國は西佛が永久合同せざるを條件としてフィリップ五世の西王たるを認め(二)英國はジブラルタル及びミノルカ島を西國よりハドソン灣地方アカチア等を佛國より得(三)サヴォイはシ、リー島を得て王國となり、普國も王號を承認せられた。翌年獨帝は別に佛國とラスタット條約を結び西領ネーデルランド・サルチニア島及びナポリ等を得た。かくてこの戰に佛・西兩國は多大の地を割き、英國は地中海を制する根據地を得た。サヴォイ王は後にシ、リー島とサルチニア島を交換してサルチニア王國と稱した。(一七二〇年)今の伊太利王家の祖である。

## 第五章 露西亞の勃興 ポーランドの滅亡

## 本章の主眼点及び取扱方

中世紀末蒙古族の下に屈した露國は一躍して強國の伍伴に入つたのは全くペートル大帝の功業である。大帝は西歐文化の輸入と港灣を獲ることを以て經國の二大方針として遂に之を成し遂げたのである。其の後、女王カザリン二世の外國經略が功を奏し、ポーランド王國を亡して其の東部を取り、トルコより黒海北岸を得たから露國は優に海上に雄飛する素地を作つたのである。

### 主要教材の解説

【ペートル大帝の新政】 露西亞諸侯は久しく蒙古人の治下に屈伏したが、モスコイ大公イワン三世は東羅馬帝の姪を娶り自ら其の後繼者を以て任じ、一四八〇年遂に獨立して露國統一の基を開いた。其の後イワン四世始めて皇帝の號を用ひシベリア侵略の端を開いた。イワン四世の死後、内亂起り國勢衰へたが、ミカエル、ロマノフ之を鎮定し、一六一三年帝位に上つた。これが最近の革命に付れたロマノフ家の祖である。ミカエル、ロマノフの孫が即ちペートル一世(大帝)である。

大帝は露國の粗野なるを改めてまづ西歐の文物制度を採用して國民の文化を向上せしめんとし、即位の後、政を姉ソフィアに托し自ら獨・蘭・英等の諸國を巡遊し、技術家・軍人・職工等を聘して歸國し、海軍を編制し教育を興し商工業を獎勵したから露國の面目は爲に一新した。大帝は和蘭にある時、ザーングムの造船所に入り職工に伍して造船術を究めたと云はれ、歸朝の後、自ら手を

下して軍艦の模型を造つた。これを「露國海軍の船」と名づけて今も博物館に藏してゐる。大帝は急進的にて風俗制度を改革し剃髻令を出し髻を貯ふる者に罰金を科し又洋服の見本を官衙の前に掲げて之に倣はしめなどしたから、頑固の人々からは大に嫌忌せられた。

大帝は又「朕の欲する所のものは陸にあらずして水なり。」と揚言し、海上の門戸を開くことを二大經綸の一として頻にバルト海及び黒海方面に進出する機會をねらつてゐた。

【北方戦役】 大帝は外遊の前にトルコからアゾフ海を得たが、一七〇〇年、瑞典王チャールス十二世の年少を侮り、丁抹・ポーランドの二王と同盟して其の地を分割せんとした。チャールス十二世は北方の獅子と云はれたが、早くも之を泄れ聞き、まづ兵を發し丁抹を伐ちて之を降し、ついで大帝の大軍をナルヴァに撃破し、(一七〇〇年)轉じてポーランドを略しサクソニアに入つた。この間、大帝は兵を練つてフィンランド沿岸の地を侵し、新都をネヴァ河口に築きペテルブルグと名づけた。(一七〇三年)最近の世界大戰にスラヴ人の獨乙を恐むこと甚だしく首都の獨乙名なるを嫌ひスラヴ語に改めてペトログラードと云つたが、ソヴィエツト政府は更にレニングラードと改めた。

一七〇九年、チャールス十二世は大舉して露國に侵入したが、大帝は退いてホルタヴァに兵を集注し、このホルタヴァの戦に瑞典軍を迎へ撃つて其の主力を撃破した。チャールスは一旦トルコに逃けて露國を伐たしめんとしたが成らずして歸國し、後、那威の亂を平けんとしてフレドリックス

ハルドに陣歿した。(一七二八年)一七二二年、露・瑞兩國の間にニスタット和約成り、露國はエストランド・インゲルマンランド・リヴォニア等バルト海岸の地を得た。これより露國はバルト海岸に根據をおき北方の強國となつた。

【カザリン二世とポーランド分割】 ペートル大帝の後、五代を経てペートル三世立つや、皇后カザリン、ペートル三世を弑せしめて即位し、頻に外國を侵略して國威を輝した。西隣ポーランド王國は十四世紀の初にスラヴ族の立てた國で、國政一時大に振つたが、十六世紀の後半より貴族跋扈し、リベラル、ヴェトーの制を利用して恣に王を廢立し、國運次第に衰運に傾いた。カザリン之を機として兵を出し、寵臣スタニスラ、ボニアトウスキーを其の王位に即けた。ポーランド人之を怒りトルコと同盟して兵をあげたので、まづポーランドの亂を鎮め、ついで海陸よりトルコを攻め、黒海沿岸の地を占領した。普王フレデリック二世(大王)之を見て安んぜず、奥國と共にポーランドの分割を謀り、カザリンを賛同せしめ、三國、兵を出して境上の地を奪つた。(一七七二年)是がポーランド第一回分割である。其の後、カザリン、ポーランドの内政に干渉したので、志士コシューシコ義兵を起して露軍に抗したので、露軍獨りポーランドを略取せんとしたが、普國も兵を出して露國と第二回分割(一七九二年)を行つた。コシューシコ憤慨措かず、翌年義兵をあげたので、露・奥・普の三國は第三回の分割を行ひポーランド王國は全く亡びた。(一七九五年)

## 第六章 清の興隆 清露の交渉

### 本章の主眼點及び取扱方

東歐のペートル大帝が銳意改新を圖る時に方り、清の康熙帝は外、國威を張り内、制度を定めて東亞に雄視し、境界問題については清露兩國の間に國際的交渉が起つたが、其の結果ペートル大帝の東略方針は一時挫折した。これが清國が露國との交渉問題に於て有利の地歩を占めた最後のものではあつた。この後、清國は一步一步と退讓して露國に壓せられ、多く邊境の地を失ふに至つた。

### 主要教材の解説

【清の興起】 清の興起は露國のローマノフ王家と略、時を同じくし清の太祖奴爾哈赤が滿洲族を統一し、後金皇帝と號したのはミカエル、ローマノフ家勃興後僅か三年であつた。初め滿洲族に愛親覺羅部と云ふあり、其の部長奴爾哈赤は兵を今の興京に起して遂に滿洲諸部落を統一し、一六一六年都を瀋陽(奉天)に定めて帝と稱した。是が清の太祖である。其の子太宗は蒙古を征し朝鮮を従へて國號を清と改め、子世祖をして南の方明の境を侵さしめた。明の末帝毅宗は吳三桂をして之を防がしめたが、流賊李自成北京を陥れて毅宗自殺するに及び、吳三桂は清に降つた。世祖よつて直ちに北京に入り、李自成を逐うて都を遷した。明の遺臣は王族を奉じて江南に據り、頻に回復を計つ

たけれども、何れも敗亡した。中にも鄭芝龍の子鄭成功は魯王を奉じ清軍に抗して戦つたが、後、逃れて台湾の王となつた。子経を経て孫克塽に至り清に亡された。

さて世祖は北京に入りて後、辮髮の令を下して滿洲の風俗に従はしめ、明の王族を亡して支那を一統し、子聖祖(康熙帝)に傳へた。

【清の極盛】 康熙帝は天資英邁にして文勳武功共に高く、在位六十餘年間に於ける内治外交は頗る振ひ、清朝の基を固くした。即位の始、藩王を廢して清朝の禍根を除かんとしたが、雲南王吳三桂は帝の心事を悟つて先づ謀反し、福建王耿精忠、廣東王尙之信之に應じ清朝を喜ばざる漢人も之に加はり、江南の地大に亂れた。帝は兵を出して之を討たしめ、交戦九年の後、漸く之を平らけた。(一六八一年)之を三藩の亂といふ。ついで台湾を攻め鄭克塽を亡して其の地を併せた。(一六八三年)帝はまた兵を外蒙古に出して其の地を併せ、更に準噶爾部の酋長噶爾丹を親征したが、其の地を領土とするまでには至らなかつた。

康熙帝の子は世宗(雍正帝)といふ。世宗は青海・西藏を平らけて拉薩に駐藏大臣をおいて治めしめた。世宗の子は高宗(乾隆帝)である。乾隆帝は祖父の志をついで征伐を事とし、天山北路にある準噶爾の内亂を鎮め、ついで天山南路を平らけ、更に緬甸を征して朝貢國とし、またネパールをも攻め降した。かくて清の領土は支那本部の外、滿洲・蒙古・青海・西藏・新疆を領して漢・滿洲・

蒙古・西藏・トルコ(新疆)の五大民族を統治し、緬甸・暹羅・安南等を朝貢せしめた。康熙乾隆の二代は清の極盛時代といはれる。

【清の學藝】 元明時代には、宋學流行し、明の中ごろに王守仁(陽明)出でて良知良能説を唱へて、宋學に對して陽明學を開ひた。かくて是等の學者は何れも哲學的理論のみを重んじたが、明末清初の頃、顧炎武出でて正確なる典據を研究する所の考証學を開き、經書・歴史・地理・文學などの穿鑿は著るしく進歩した。従つて辭書・叢書の類が澤山編纂せられた。閻若璩は考証學者として名高い。又康熙・乾隆の二帝は多くの學者を集めて有益な書籍を勅撰せしめた。佩文韻府・康熙字典・四庫全書(十七万二千卷)は最も名高い。この頃、西洋の學術も傳來して天文・地理・砲術・數學等の學問も起り、又天文臺を作つて天文觀測をなさしめた。康熙・乾隆の二代には制度も完成した。中央政府に内閣あり、其の下に吏・戸・禮・兵・刑・工の六部あつて政務を分掌した。各部の長官を尙書、次官を侍郎といふ。中央政府の官吏は凡べて同數の滿漢人を任命することにしたから、何れも偶數であつた。高宗の時、軍機處大臣をおいて専ら軍國の機務を掌らしめ尙書・侍郎の中から勅選したが、これより内閣の實權は軍機處に移つた。

【清・露の交渉】 露國はイワン四世の時、コサツクの酋長イェルマク始めてシビリ城を陥れ、庫程汗國を亡して其の地を露帝に獻じた。これをシベリア侵略の端とす。シベリアはシビリから訛つた名

である。これより次第に東進して土人を従へ、盛に本國民の移住植民を奨励したから十七世紀の中頃にはカムチャツカ半島にまで達した。それより南下して黒龍江沿岸を征服しイルクツク・ネルチンスクに保壘を作り、ペートル大帝の頃、屢、清の境土を侵し、茲に清露の交渉が起つた。

清の聖祖も大に意を北境の經營に用ひ、黒龍江岸に城を築いて露西亞の東略に備へ、書を露帝に送つて境界を議定せんことを求めた。ペートル大帝、ゴローヴィンを康熙帝は索額圖を全權委員に任じ、<sup>ネルチンスク</sup>尼布楚に會して條約を結ばしめた。この條約は殆ど皆清國の要求通りに決し、霧國はアルゲン川より外興安嶺に至る一線を畫して其の以西に退くこととなり、黒龍江を航行することをも禁ぜられた。其の後、世宗の世に至り、清・露の使臣恰克圖に會して蒙古の境にて兩國人が貿易することの規程を定めた。

其の後、カザリン二世は東洋經營に着眼しイルクツクに日本語學校を立て一七九二年(寛政四年)我が日本に使節ラクスマンを遣して通商を求めしめたが、我が幕府は祖法變すべからずとして之を拒絶した。我が鎖國後外國使節の來朝した始である。

## 第七章 普魯西の興隆

### 本章の主眼點及び取扱方

十七世紀まで獨乙帝國內の一公國であつた普魯西國が第十八世紀の劈頭に始めて史上の舞臺に上つた。普魯西の勤儉尙武は間もなく雄國の地位にすゝめフレデリック大王の英主によつて忽ち強國の伍伴に入つたことは驚異に價するものがある。

### 主要教材の解説

【普魯西の興起】 普魯西の地はもと獨乙騎士團體がスラヴ民族を追つて領有した所で、後、ポーランド國に屬した。十七世紀の初、ブランデンブルグ選舉侯が之を併合した。ブランデンブルグ侯は十五世紀以來ホーヘンツォレルン家が任封せられた所であるが、一六四〇年フレデリック、ウィリアム(大選侯)立つに及び、三十年戰役に新教を助けて後ボメラニアの地を得、又フランスからユグノー信徒二萬の職工を移住せしめて工業を盛にした。其の子フレデリック三世に至り、一七〇一年ケーニヒスベルヒにて戴冠式をあげ、プロシア王ウィリアム一世と稱し都をベルリンに定めた。後、一七一三年のユトレヒト條約によつて列國から王號を認められた。普魯西亞王國の始である。

其の子フレデリック、ウィリアム一世、節儉を守り粗衣粗食に甘んじ下士王と綽名された程である。又軍隊を訓練し巨人を各國から備ひ入れて巨人聯隊を編制し、日夕訓練するを見ることを唯一の樂とした。又教育を振興し産業を奨励したので國富み兵強く、晩年には八萬の常備軍をおき、國庫も充實したから、子フレデリック二世(大王)が其の餘澤によりて雄飛することが出来たのである。

【フレデリック大王と奥太利戦役】 フレデリック大王は皇太子たる時、佛の文學者ヴォルテールを師とし文學美術を好み音楽に耽り文弱の風があつたので、父王から叱責せられ傳育官の爲に死を免れたといはれる。一七四〇年父の後をついで王となるや、奥太利と戦端を開いた。この年獨帝たる奥太利王チャールス六世男子なくして死し、皇女マリア、テレサは生前に定めた相續令に基づいて後を繼いだ。バヴァリア侯チャールス、アルバートはチャールス六世の姉の子なる故を以て相續權を主張し、佛王・西王・サクソニア選舉侯を後援として戦を宣し、一七四〇年奥太利戦役が起つた。

そこでフレデリック大王はシレシアの地を要求し、突然、兵を出して之を占領した。聯合軍、境上に迫りバヴァリアのチャールスは皇帝に選ばれてチャールス七世と稱したから、マリア、テレサは已むなく一七四二年ブレスラウ條約を結びフレデリック大王にシレシアの地を割いた。かくてホンガリア人の義憤に訴へて勤王軍を募り、聯合軍と戦つて大に之を破つた。フレデリック大王はシレシア領有が危くなるを恐れ、再び出兵して奥軍を破り、一七四五年ドレスデン條約を結んでシレシアの領有を確認せしめた。既にしてチャールス、アルバートも死んだので、列國は一七四八年アヘン和約を結び、互に侵地を返しテレサの繼承權を承認した。

【七年戦役】 マリア、テレサは深く大王を怨んで之に報復せんとし、先づ内政を改善し國力を充實し露國・瑞典・サクソニアと同盟して普國に當らんとした。大王之を諜知し機先を制してドレスデ

ンを占領し、一七五六年一七五九年この役、大王は英國より軍資を得たる外、殆ど全歐を敵として戦ひ、ロスバハ・ロイテン・ツォルンドルフの戦に大勝を得たが、クネルスドルフの戦に露奥の聯合軍に破られてより（一七五九年）勢頓に挫け、首府ベルリンは占領せられ、英王も軍資の供給を中止したので、大王は落膽のあまり自殺しようとした程である。然るに、露國のエリザベス死んでペートル三世立つや、大王に好意をよせて奥國と絶ち反つて援軍をさへ送つたから、局面一變して大王は勢をもち返した。尋いで英佛植民地戦争終局し、佛兵を獨國より撤退したから奥國孤立となり、普奥二國はフベルツスブルグ和約を結び、普國のシレシア領有を確認し、普國はマリア、テレサの子ジョセフを皇帝に選立することを約して七年戦役終を告げた。大王はこの戦によつて何等得る所がなかつたけれども、獨力にて列強を敵として戦ふこと七年の永きに及んだので列國は普國の根強き潛勢力あるを憚るやうになつた。

【フレデリック大王の功業】 大王は兩度の戦役に武威を輝し領土を擴張したばかりでなく、戦後なほ二十餘年間、王位に在つて國力の充實をはかり殖産興業を盛にし、「朕は國家の最高奴隸である」と公言して銳意國事を勵んだ。殊に親しく國內を巡歴して人民の勞苦を慰め、土地の改良、運河の改通、製煉・織物・製塩等の工業を盛にしたから國力次第に振興して歐洲強國の伍伴に列することとなつた。

## 第八章 英佛植民地の争 アメリカ合衆國の獨立

### 本章の主眼點及び取扱方

十八世紀に於ける英佛兩國の植民地戦争は歐洲の兩雄が最後の勝敗を賭する争覇戦であつた。はじめ和蘭が世界の海運業を獨占して十七世紀に於ける世界の覇者と云はれたが、十七世紀後半より次第に衰へて漸く昔日の勢威を失つて來た。けれども英國が直ちに之に代つて歐洲の覇者たるを得なかつたのは佛國が最盛時代を現出して自ら覇者を以て任じてゐたからである。當時の大勢を見るに、十六世紀は西葡兩國の覇權時代、十七世紀前半は和蘭の覇權時代、十七世紀後半より十八世紀前半までは英佛兩國の争覇時代といつてよい。しかも十八世紀の劈頭に起れる西國王位繼承戦役は佛國をして昔日の地位を失墜せしめユトレヒト條約によつて英國はまづ佛國から多くの植民地を割取した。されども佛國はなほ昔日の餘威を振つて英國の下流に立つことに甘んじなかつた。これより英佛の植民地競争は猛烈を極め本國に争が起れば植民地にも戦が始まり、植民地に戦が起れば本國にも争ひが始まるといふ有様であつた。かくして英國はじり／＼と佛國を弱める政策を採つてまづオートリア繼承戦役（一七四〇—一七四八年）には佛國が西國と共にマリア、テレサと戦ふを見てマリア、テレサを助けて佛國と戦ひ、印度及び北米の植民地に鎬を削つて戦つた。つぎの七年戦役（一七五六—一七六

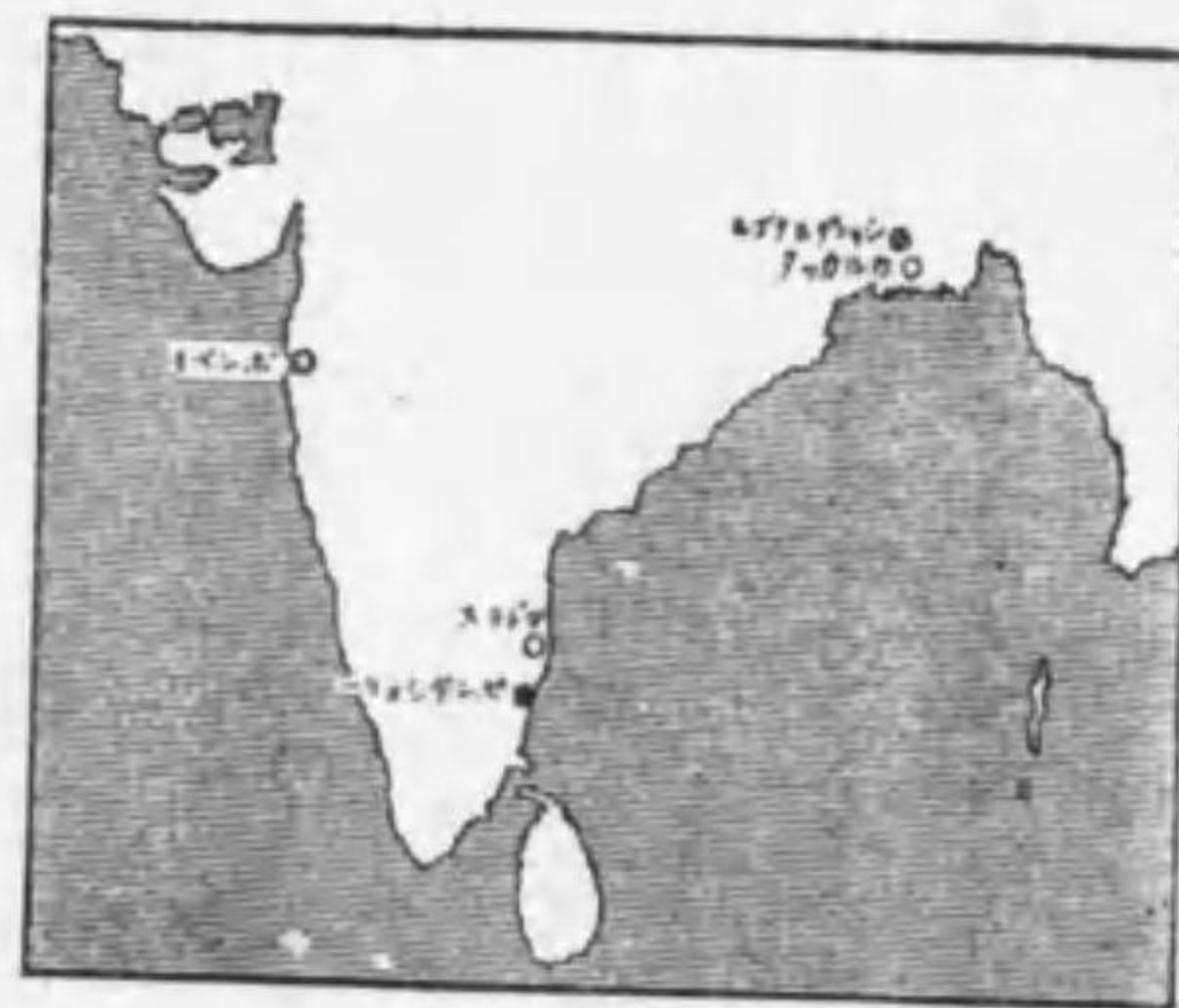
年<sup>三</sup>)には佛國がマリア、テレサを助けて普國と戦ふに方つては、英國は普王フレデリックを助けて復佛國と烈しい植民地戦争を起した。かくして一七五六年のパリ條約には多大の植民地を佛國から割取して佛國に植民帝國としての致命傷を與へ、この時より英國は東西兩半球に植民地を有して國人は「我が國には太陽の没することなし」と誇稱するに至つた。間もなくアメリカ合衆國の獨立戦争起り、佛國は獨立軍を助けて英國に報復する所あつたが、英國は之が爲に莫大の植民地を失つたけれども、世界の海上權を把握する爲の支障とはならなかつた。このアメリカ合衆國の獨立はまた次の十九世紀以後に於て世界の強國として世界史の舞臺に活歩するに至つたことは歴史上の重要な一事件である。

【莫臥兒帝國の衰勢】 上古の印度は世界文明史上に重要な地位を占めてゐるけれども、中古以後は全く印度人衰頽の歴史であつて殆ど世界史として述べる價値がない。中にも近世に至つては、回教徒の侵入によつて國內の分裂甚だしく、殊に信教上の争が絶えなかつた。この頃、印度には佛教全く衰へて婆羅門教の一新派なるヒンヅー教流行してゐたが、回教徒と烈しく戦つた。

帖木兒大王五世の孫バベルは中央アジアよりアフガンに入つて王國を立て、一五二五年印度河を涉り大軍をバニバットに破つて王朝を亡し、アグラに都を奠めた。(一五二七年)これが莫臥兒帝國の始である。バベルの子をフマユーンといふ。人君の器なくフマユーンの子アクバル大帝に至つて莫

臥兒帝國隆盛を極めた。大帝は自らヒンヅー教徒と婚を通じてマホメット教徒とヒンヅー教徒との感情を融和することを力めたからヒンヅー教徒も之に心服して南印度の外、悉く版圖となつた。大帝の死後子ジャハン、ギール(世界征服者)孫シャー、ジャハン(世界の王)相ついで立つた。ジャハンは世界、ギールは征服者、シャーは王と云ふ意味である。シャー、ジャハンの子アウランゼブ立つに及び、始めて南印度を征服して全印度を統一した。アウランゼブは又の名をアラム、ギールといふ。宇宙征服者といふ意味である。されどアウランゼブはマホメット教を信向すること最も篤く、爲にヒンヅー教徒を冷遇したので、これより叛亂相ついで起り、紛争絶えなかつた。殊に帝の死後、歴代庸君のみであつたから莫臥兒帝國は次第に衰微した。英人が印度に來侵したのは恰もこの頃であつたから帝國は遂に瓦解した。

【英佛の植民貿易】 英の女王エリザベスは盛に植民貿易を奨励したので、國民はアメリカ新大陸と印度との兩方面に活躍した。一六〇〇年には東印度會社を創立し、印度のマドラスに支店をおいて印度經營に力め、遂にカルカッタ・ボンベイをも取つて次第に莫臥兒帝國を蠶食した。この頃佛國も植民貿易に力め、一六〇四年には東印度會社を創立し、マドラスの側にボンチシエリー、カルカッタの側にシャンデルナゴルの根據地をおき英國と勢を競うた。印度に於ける英佛の競争は恰も碁客が碁盤の上に烏鶯を戦はす様な感がある。但し印度と云ふ碁盤は方形でなく三角形をなしてゐる。



かくして何れが碁盤の面積を多く占領するかが勝敗の分るゝ所である。然るに、始めは佛國の印度總督デュブレースはベンガル王其の他の諸侯を懐柔して英國に背かしたから、ボンチシエリーからシャンデルナゴルまでの碁盤上の面は殆ど皆佛國領となつた。(碁盤の目は黒を以て埋められた)それはオーストリア繼承戦役の頃であつたが、佛國政府は反つて之を喜ばず、デュブレースを召還した。其の後佛國は退嬰主義を執つたのに反して英國には東印度會社のマドラス支店書記ロバート、クライヴ出でて社員を訓練し土兵を備うて盛に勢力の擴張を圖り、一七五七年ブラッシーの戦に佛兵及びベンガル王の聯合軍を破つてから、カルカッタよりマドラスに至る土地は英國の勢力下に歸した。(碁盤の目は白の勝となつた)これが英領印度の始である。後クライヴは莫臥兒帝國の爲に收稅法を改革し、功を以て多くの土地を賞賜せられた。

北米大陸では英人は東岸に植民してニューイングランド十三州を立てたが、佛人は今の英領カナダ地方及びミシシッピ川流域に植民地を開いて廣大な領土を有してゐた。七年戦役の起るや、英國の將軍ウォルフはセント、ローレンス川に臨めるケベックの城砦を包圍し、激戦の後、城を陥れ、城



頭高く英國旗を掲げたが、ウォルフはこの戦に敵弾に中つて斃れた。されど英軍の意氣大いに昂り、遂に進んでモントリオール城砦を陥れた。かくてパリイ條約によつて英國はカナダ全部とアンチルス群島の大部分を佛國より割取し、又ミシシッピ川右岸の地(ルイジアナと稱す)を佛國より西國に割かしめ、西國よりはフロリダの地を獲、かつアフリカ洲のセネガル地方をも佛國より割取した。これより佛國の植民地は、印度ではボンヂシェリー・シャンドルナゴルを返還せられたけれども、佛國の植民地としては北米・印度の兩方面にて殆ど其の根幹を失つてしまつた。

【アメリカ合衆國の獨立】北米の植民地はもと信仰の自由か政治の自由を得んが爲に移住したもので、他の植民地の如く食ひつめ者の集まりではなかつた。始めから自由の精神に富み他の束縛や壓制を嫌ひ氣骨ある紳士の集團であつた。それ故、かねて本國政府に對して好感を持つてゐなかつたのみならず、クロンウエルの航海條例は植民地と本國以外の諸國との通商を禁じ、又本國の工業保護のためアメリカに於ける工業の勃興を抑へたから不平は益々大きくなつた。かくてジョージ三世の時植民地戦争に要した費用は植民地が負擔すべきものとの見解より、一七六五年、印紙條例を發布し、商取引、土地の賣買、訴訟、結婚の契約等には凡て印紙を貼布せしむることにした。植民人は大に憤り代議士を出さざる議會の決議に服従する義務なしと宣言して、本國政府の反省を促した。中にもバトリック・ヘンリーの如きは聲淚共に下り、慷慨悲憤の演説をなした。英國政府は遂に印紙條例

を撤廢したけれども、茶・硝子・紙等の輸入品に課税したので、植民地人の反抗心は益々昂まり、血氣の士は土人に粉裝し、ボストン港外の茶船に亂入して茶箱三百四十餘箱を海中に投げ棄てた。

英國政府は一七七四年ボストン港の封鎖を宣言し、十三州の植民地人は代表者を出してファイラデルフィアに會合して最後の決意を票決した。之を第一大陸會議といふ。翌年第二回大陸會議を開きジョージ・ワシントンを總督に推し、一七七六年、七月四日、獨立宣言書を公にし自由の鐘を打鳴らして奮起した。ジュッファーンソンは獨立宣言書を起草し、ベンジャミン・フランクリンは歐洲に渡り、パリイにあつて頻に佛國其他歐人の同情援助を求めた。

獨立軍は烏合の衆なるを以て其の始、連戦連敗の悲境に陥つたが、ワシントンは堅忍不拔の精神を以て之に當り、青年を訓練して最後の成功を期待した。佛の貴族ラファイエット、普國のストイベン、ポーランドのコシューシコを始め、歐洲諸國の志士來つて獨立軍を助くる者多く、佛西二國が公然英國に宣戰するに及び、獨立軍益々振ひ、ワシントンは英軍の根據地ヨークタウンを陥れたので、英將コーンウォリスは七千の兵と共に降参した。英國遂に屈し、一七八三年ヴェルサイユ和約を結び、(一)アメリカ合衆國の獨立を認め(二)西印度のトバゴ、アフリカのセネガルを佛國に譲り(三)ミヌルカ島及びフロリダを西國に還すことを約した。これより植民人はワシントンを議長として憲法の制定に着手し、一七八七年に完成し、一七八九年ワシントンを大統領に選びこゝにアメリカ合衆

國が成立した。

憲法はランドルフの意見に據れるもの多く、まづ立法部・行政部・司法部の三つに分つた。立法部は元老院・代議院より成り、元老院は各州より二名を出し、任期は六年とし、二年毎に三分の一を改選し、副大統領が其の議長となる。代議院は人口三万人毎に一人を出し、任期は二年とする。兩院共に十二月第一月曜日に開會する。

行政部は大統領・副大統領をおき任期四年とし、再選に限り之を許す。元老院・代議院の議員數と同數の選舉人を選出して選舉せしむ。之を複選法といふ。

司法部には高等法院と普通法院とがある。高等法院は大統領と州、又は州と州との争訟を決し、判官は終身官で大統領が任命する。

## 第九章 近古の文化

### 本章の主眼點

近古文化の特徴は科學の勃興を以て第一とする。殊に十七八世紀は科學の黄金時代といはれる。はじめ中世紀に於てたゞ慣習傳統と神學とを本として神を唯一絶対のものと考へてゐたのが、古學復興と諸發明諸發見によつて舊來の慣習傳統は破壊せられ、各人が自己に目ざめて自己に眞實なる

者を眞理とするやうになつたから、あらゆるものを疑ふと云ふ懷疑的思想となり、すべて實驗觀察を主とし思索を續けると云ふ學風になつた。之が爲に科學勃興して、あらゆる學問に於て未曾有の發見發明を見るに至つたが、他面には懷疑論者・無神論者さへ起るやうになつた。これを唯物學風といふ。

十八世紀の末から十九世紀にかけて科學の應用として社會生活や産業に有功なる諸器械が發明せられて後の産業革命を起す原因となつた。十八世紀には社會生活・政治生活の改革を叫ぶ所の革新文學者が佛國に起り、國民に莫大の刺激を與へて遂にフランス革命を始とし、歐洲各國に政治的大革命を起す誘因となつた。

### 主要教材の解説

【科學の進歩】 まづ獨逸のコペルニクス（一五四三年）が地動説を立て、より地球其れ自身の動く事に驚かされ、英國のベーコン（一五六一年）が事實現象事物を實驗し、其の中から法則を發見すべきことを唱へてから歸納研究法が行はれ、あらゆる方面に新發見が起つて科學の黄金時代が現出せられた。伊太利人ガリレオ（一五六四年）は地球の自轉が二十四時間なるを計算し、晝夜の別を生ずる理を説明し、英國のニュートン（一六四二年）は引力の大原則を發明し、伊國のヴォルタ（一七四五一年）はヴォルタ電池を作り、佛のラヴァアジエー（一七九四年）は燃焼の説明をなし、瑞典のリンネ（一七〇七年）は

植物分類の鼻祖となり、佛のビュッフォン(一七七〇—一七九四)は動物學を大成し、英のジェンナー(一七四九—一八二三年)は種痘法を發明して人生に裨益した。

科學の發達に伴ひて人生産業に有功なる諸器械も發明せられた。米國のフランクリン(一七〇六—一七九〇)は避雷針を作り、英國のジェームス・ワット(一七三六—一八一九)は蒸氣機關を大成し、アークライイト(一七三二—一八二三年)は紡績機を、カートライト(一七四三—一八二三年)は力織機を發明し、遂に産業革命を促すことになつた。産業革命とは機械工業起つて手工業に代るに及び、手内職が廢れて大工場の勃興を見るに至り、中民亡びて大工場の持主即ち資本家と勞働とによつて産出せらるゝことを云ふ。

【哲學】 中世紀に神を唯一絶對の實在であると考へたるに對して自己に目ざめて自己に眞實なるものを眞理とするやうになり、中世紀にあつた凡ての物を疑ふ懷疑的思想となつた。こゝに大陸と英國とで解釋が二派に分れた。

佛國のデカルト(一五九六—一六五〇)は「宇宙にある凡ての物は實在しない、眞の實在は唯我のみである」と言つた。オランダのスピノザ(一六三二—一六七七)はデカルトの如く自我を認めただけでも、自我よりも更に永久的な完全なものとして神が宇宙の眞實在であると主張した。故に大陸の哲學者を唯心派と云ふ。英國の哲學者は之に反して實驗を本としてゐるから經驗派といふ。ジョン・ロック(一六三二—一七〇四)は万物を實在なりと認識するのは經驗に基づくものと主張し、デヴィッド・ヒュームは五官を閉つれば物

を感じず唯感覺あるのみと説いた。故に之を感覺説と云ふ。

獨乙のカント(一七二四—一八〇四)は唯心派と經驗派とを綜合してこゝに近世哲學の基を立て現代哲學の淵源となつた。其の著純粋理性批判と實踐理性批判とはカント哲學の眞髓をなすものと云はれる。

文學は英國に英詩の父と稱せられるチャールズ・サウザン早く十四世紀に現はれ、十六世紀のシェクスピア(一五六四—一六一六)は劇作家として古今獨歩といはれる。ウエニス商人、ハムレット・マクベスなど傑作といはれる。又デフォーは(一七〇一—一七三三)ロビンソン、クルソーを著し、ミルトン(一六〇八—一六七四)は樂園を著して名高い。

佛國にはルイ十四世時代の劇作家にコルネーユ(一六〇六—一六八四)喜劇作家にモリエール、(一六二三—一六七三)悲劇作家にラシーヌ(一六三九—一六九九)出でて世にもてはやされた。

獨逸ではレッシング(一七二九—一七八一)まづ出で、ついでゲーテ(一七四九—一八三二)シルレル(一七五九—一八〇五)出るに及び獨逸文學は世界的光彩を放つた。ゲーテはウエルテルの悲み、ファウスト、シルレルはウィルヘルム、テル・ワレンスタインなどの傑作を残してゐる。英のシェクスピア、獨のゲーテ・シルレルは世界の三大文豪といはる。

【革新文學】 佛人には純理を尊ぶ風があるから一旦目ざめると、舊來の因習と迷信の非理を打破して純理に基いた自由平等の社會國家を作らうとした。革新文學の現はれたのは之が爲である。ヴォ

ルテール(一六九四—一七七八年)は輕妙の筆を以て教會僧侶並びに貴族の腐敗横暴を攻撃し、この特權階級を破壊して理解ある君主の善政に俟たんことを唱へて革新文學の先驅をなした。フレデリック大王・カザリン二世の如きも彼に學んだ。モンテスキュー(一六八九—一七五五年)は英國に遊んで其の憲法政治の完全せるを見、留まつて研究すること二十年、遂に方法精理を著し立法・行政・司法三權の分立すべきを主張した。ついでジャン、ジャック、ルソー(一七一二—一七七八年)出でて民約論を著し人は生れながら平等自由の權利を有すとて盛に自由民權説を鼓吹し、不平等不自由の現社會を打破せんことを叫んだ。この書は廣く世人に愛讀せられ國民に多大の刺激を與へたが、これが終にフランス革命を促がす誘因となつた。

【近古史總括】 近古史三百年間は之を前後の二期に分つて見る事が出来る。前半即ち千六百五十年頃までは宗教改革時代であつて、一六四八年のウェストファリア條約によつて列國は新教舊教の同等を認むることになり、後半は其れ以後十八世紀末までを含み、諸國の帝王は王權神授説を唱へて絶對權を行使し專制政治を行つた。中にも佛國のルイ十四世・ルイ十五世の朝廷は驕奢遊樂に耽り國民を虐けたので、所謂大革命はまづ佛國に起つたのである。

列國勢力の消長より云へば、十六世紀は葡西兩國の全盛時代であつて、十七世紀は和蘭がこの二國に代つて世界の商權を獨占した時代である。されど一六五一年に英國のクロンウェルが發布した

航海條例は和蘭の海運業に大打撃を與へ、これより次第に和蘭の勢力は沈衰した。しかし和蘭の後を受けて英國が其の商權を壟斷することは出来なかつた。當時佛國は殖民貿易を盛にして英國と拮抗して相譲らなかつたから、十七世紀末から十八世紀中頃にかけては英佛兩國の競争時代であつた。一七六三年のパリ條約によつて佛國は多大の植民地を失ひ、これより英國は歐洲第一の富強を極めることになつた。

又十九世紀は蒸氣電氣利用時代と云ふべく、汽車汽船の發明は交通運輸の上に一大革命を促し、世界の距離を短縮したから、前時代に比して海上の利用は著しく擴大せられた。或る歴史家は海上利用の廣狭によつて世界歴史の發達を畫してゐる。即ち上古史を地中海利用時代、中古史を地中海・バルト海利用時代、近古史を大西洋利用時代、近世史を大西太平洋兩洋利用時代としてゐる。これも面白い見方であるからこゝに附記しておく。

## 第四編 近世史

### 本編大旨

本編は外國史を教ふべき終極の目的である。例へば佛像を彫刻するに幾歲月の努力をなした後、最後に至つて佛眼を入れることが最も大切で、佛眼の如何によつて佛像の眞價値が發揮されるやうなものである。又、畫龍點睛といふ詞があるが、本編は即ち畫龍に睛を點するといふ最後の仕上げである。歴史教授に於ては、授業の進度を遅くせることが大の禁物である。若し歴史の授業時間に不足を生ずる恐れある時は、上中古史を簡單にして、成るべく多くの時間を本編に費すがよい。この點について十分に注意を要する。

さて本編は近古史末に起つた革新文學者の思想が佛蘭西全國に漲ぎり、新思想を以て政治的革命を起すに始まる。この政治的革命は佛蘭西社會を攪亂させたのみならず、全歐洲に大波瀾を捲き起し、遂に英傑ナポレオンの出づるに及び、歐洲の大半は佛蘭西帝國の治下に歸した。しかしナポレオン帝國が諸國民を無視したと云ふことが禍根をなして諸國民の奮起となり、遂に帝國瓦解してナポレオンはセント・ヘレナ島に貶謫せらるゝに至つた。かくてウィーン會議は全歐洲を革命以前の舊態に復したけれども、これは革命の慘禍に懲りた一時的反動に過ぎない。一旦革命に目ざめた

新思想は到底政略や壓制を以て抑止し得るものではない。自由主義・民族主義の運動は次第に擡頭し來り、千八百二十九年には希臘まづ獨立して民族解放の實現となり、フランスの七月革命及び二月革命は益々自由主義の凱歌を擧げたのである。されど獨逸・伊太利國民の統一運動は諸種の複雑なる事情もあつて、しかく容易に實現し得なかつたから、千八百六十七年に至つてはじめて其の目的を達成し得たのである。

十九世紀最後の三十年間は歐洲の天地は平和に歸し、列國は産業の振興、貿易の隆盛、植民地の擴張に全力を傾け各國はいやが上にも富強を増し、學問藝術の進歩發達も前古未曾有といはれた。されど、各國勢力の競争は次第に激甚となつて平和を裝へる間に一脈の暗流が歐洲列強の間に流れてゐた。かくして二十世紀の劈頭に戰雲はまづバルカン半島にたなびき、奧國とセルビアの衝突が端なく獨・露・佛諸國を禍中に投じ、白耳義・英吉利も參戰して前古未曾有の世界大戰となり、アジア・アメリカ・アフリカ・オーストラリアの四大洲にまで戰雲が漲るに至り、一九一四年より一九一八年まで五ヶ年間に互つて慘烈なる戦争がつゞいた。一九二〇年パリ平和條約締結せらるゝや國際聯盟成立して戰禍を未然に防がんことを期してゐるけれども、世界地圖は全く改造せられて新興の諸小國は未だ全く安定するに至らず、獨・奧・露の三大帝國亡びて新容未だ全く整はず、今後における國勢の推移はなほ測り知るべからざるものがある。況して戦後の經營については英・佛・

伊の戦勝國さへも苦心慘憺たるものがある。たゞ獨り米國のみは其の富盛を誇り隠然世界の覇者たる觀がある。我が帝國はこの間に處して如何なる覺悟と努力とを要すべきか。これが吾々國民に與へられたる一大難問題であらねばならぬ。我が青年の責任や實に重く且大なりと云ふべきである。

## 第一章 佛蘭西大革命

### 本章の主眼點及び取扱方

佛蘭西革命は歐洲の人心を動搖させ世態を一變させる所の一大事件であつて、しかも政治的改革の一新轉機であるから、外國史教授の上では最も重要な見逃すべからざる史實である。然るに或る教育家が「西洋史を教ふる爲に、我が國生徒の思想を惡化させる恐れがある。革命について悉く教ふることも一つの弊である。我が國にはこれ迄革命が無かつた。將來も革命があつてはならぬ、今の青年が革命を好むやうになつたのは西洋史を學んだ結果である。」と云つて革命の歴史を教ふるのを危險視してゐるやうであるが、これは大きな間違ひである。元來政治革命と云ふは必ず施政者が悪い爲に人民が其の虐政に堪へかねて起すのである。殊に佛蘭西革命の起る以前の佛國王政の暴横、貴族僧侶の跋扈は言語に絶えたるものであつて我が國に於ては未だ曾つて見ない所である。佛蘭西革命を教ふる時は、革命以前の佛蘭西政府の有様を悉く知らせ、如何にも革命が起らずに

はゐられなかつたといふことを生徒に合點させねばならぬ。教師は單に教科書に記載してある革命の經過や王政を顛覆した事や王を斷頭臺にかけたことばかりを數ふるからよくない。何處の國でもこんなことをするものだと思はせるやうな教へ方をするのはいけない。それこそ危險思想を作り上げることになるのである。教師はよくこの點に注意せねばならぬ。佛蘭西革命以前における王族貴族の横暴はどんなであつたかをまづ十分教へねばならぬ。例へば王族等が毎夜宴會を開き舞踏會を催して享樂に耽つてゐるから費用も莫大にかゝるので、收入の道を色々考へた末、王室の所領である市街地へ貸家を澤山立て、而かもバーとか酒屋とか料理屋・茶屋・待合のやうな惡錢を取るものゝに貸し付けて、高い家賃を取る算段をしたのである。労働者は終日働いて來た財布を叩いて王族の貸家である酒屋・茶屋に行つて酒を飲んで終日の勞を慰めたのである。王族等が高い家賃を取つて贅澤な生活をし享樂に耽つてゐるのに反して、終日働いた金はこの酒屋・茶屋で遣ひ果して仕舞ふのであるから、不平でたまらない。革命思想を煽つた志士デムレンはこの機微を知つてゐたから彼が屋外演説をするには必ずこの酒屋・茶屋の前にある廣場でやつたのである。今も其の廣場にデムレンが高い壇に立つてゐる所の銅像が立つてゐる。かくてデムレンは酒屋・茶屋にゐる労働者を集めて「君等の飲代から高い家賃を拂つてゐる。其の高い家賃を取つて彼等王族は享樂に耽つてゐる云々」と叫んだのである。他の國ならば王の所領は之を公園にするとか公會堂を立てるとか

して市民を慰安させるのに、當時の佛國王族は貸家を立て、市民から膏血を絞つたのである。又貴族等は當時好んで狩獵をやつたのであるが、農夫等が刈り取りをすると、野獸が人里にゐなくなるから農夫に令して「狩獵の終るまで穀物を刈り取つてはならぬ、野獸の餌食に備へて成るべく多く野獸が人里に来るやうにせよ」といつたのである。何といふ横暴さであらう。農夫の所謂粒々辛苦から収得した穀物であるのに、わざと貴族の狩獵の便に供する爲に刈り取らずにおいて野獸の餌に備へねばならぬのである。かゝる暴横を極める貴族が他の國にまたとあらうか。革命の起る頃まで忍耐してゐた佛蘭西の農夫こそ寧ろ感心なほどである。これらの事情をよく話して聞かせた上で貴族僧侶の特權廢止を叫んだ革命黨の話をして聞かせれば、生徒も革命の起るのが尤もだと合點するであらう。我が國には起り得ぬことも分るであらう。又、歐洲の君主は多く外國から頼んできたのである。今の英吉利王でも白耳義王でもとは外國人である。始めの王などは外國人でありながら王として尊敬せられたのだから、政事上についてあまり意見も述べなかつたが、其の間に王權が次第に制限せられたのである。我が國のやうに天皇から國民の權利利益を與へられたものではなかつた。

以上のやうな西洋諸國の國情國勢をよく理解せしめ國王と人民との關係もよく知らしめた上で、革命の話をして聞かせると、危險思想を誘發するどころではない、ますます我が國體の尊い所以、

萬國にすぐれたる所以が明かになり、堅實な國民思想が作り上げられるであらう。

### 主要教材の解説

【革命の原因】 革命の原因は色々あるけれども其の主な原因は佛蘭西全國民の間に漲つてゐる革新文學者の唱へた自由民權説である。これについては前編の末章に述べてゐるからこゝに略する。

大革命を起すに至つた直接の原因の第一はブルボン王朝の悪政である。ルイ十四世は「朕は國家なり」といふ信條を以て天下無類の專制政治を行つたが、三部會は一六一四年以後、全然召集しなかつたから、勝手に人民に課税して盛に遠征土木を起し、若し王の意に違ふものあれば恣に禁錮した。ルイ十五世・ルイ十六世の時代も重税を課して人民を苦しめたからルイ十五世の嬖妾ボンパヅルは「余の後に大洪水が起らん」といつた。これによつても人民が如何に王政を咒つてゐたかが分る。第二の原因は貴族僧侶の暴横である。重税を課せられて國費の凡てを負擔するのは貧困な平民のみであつた。多數の平民は僅に全國の土地の三分の一を有するに過ぎないのに、少數の貴族僧侶は全國の三分の二の土地を領有しながら、一錢の税をも出さないのである。かく免税の特權を有しているから勝手に豪奢の生活をすることも出來たのであらう。第三には平民の生活が困難の絶頂に達し、この上、課税を負擔する能力が無かつたから政府の財源は殆ど涸渴したのである。第四にはモンテスキューが頻に英國の憲法政治の美を賞賛し、王の絶對權を攻撃したから、佛國民はこの新

思想を實現して憲法政治を布かんことを切望したのである。第五には最近アメリカ植民地人が強大なる英國政府に反抗してよく獨立を全うしたるを見て、自分等の目的も之を達することが不可能でないかと考へるやうになり、一圖に革命を實現せんことを努力するに至つたのである。かゝる時に際して佛王ルイ十六世は國債山の如く國家が破産に瀕し、百七十五年間召集しなかつた三部會を召集したから遂に革命が爆發したのである。

【革命の發端】ルイ十六世は一七七四年王位をついだが、財政窮乏の極に達したので、財政通のチユルゴを擧げて整理せしめ、ついでネツケル・カロヌ等を擢用したが、何れも成功しなかつた。殊にカロヌが特權社會に課税する案を立て貴族等の反對に逢うて辭職し、再びネツケルを擧げた。ネツケルは三部會を召集し、國民と共に國費を議定せんとし、一七八九年三部會をヴェルサイユに召集した。然るにネツケルは決議の方法を定めなかつたので、議論沸騰し、平民は貴族僧侶と分離し、國民議會を組織し、憲法制定を終るまでは解散せざることを誓ひ、貴族僧侶にも之に加はるものがあつた。王は兵力を以て之を威嚇せんとしたので、バリーの暴民は俄に起つて七月十四日バスチーユの牢獄を破壊した。これが革命の發端であつて、これより暴動地方に波及し、殺人・放火・掠奪等到處に行はれた。

國民議會時代(一七八九——一七九一年) 革命の叫びはまづ階級打破、特權廢止といふにあつた

から、暴民は貴族僧侶の邸宅を襲うて焼き打ちにし、貴族等は争うて國外に逃れた。ついで國王は群衆に擁せられてヴェルサイユ宮殿よりバリーのチュイレリー宮に移つた。皇后マリー、アントアネットは奥國の皇女であつたが、王を誘ひ奥國に逃れんとし、ヴァレンヌにて國民に捕へられてバリーに連れ歸られた。國民議會はまづ人民の權利を宣言して人民の自由・平等・友愛を標榜し、一七九一年、新憲法を制定し、立法議會を召集することにして自ら解散した。

立法議會時代(一七九一——一七九二年) 立法議會はじめミラボーの率ゐる立憲王政黨が勢力を占めたが、ミラボー死して後は、ローランの率ゐるジロンド黨(溫和共和黨)及びダントン・マラー・ロベスピエール等の率ゐるジャコペン黨(過激共和黨)が勢力を占むるに至り、次第に過激になつて來た。この時プロシア・オーストリアの二國は革命思想の波及せんことを恐れ、兵を出して來り攻めたので立法議會は王が敵に内通せるを疑つて王を幽閉した。これに對する佛國の敵愾心は全國に充ち、南方の佛人は勇壯なる行進曲マルセイユ曲(今の佛國々歌)を高唱しながら、國境の敵に向ひ遂に大勝利を得た。已にして立法議會は共和黨の説、勝を占め、新憲法を制定して自ら解散した。

國民集會時代(一七九二——一七九五年) 一七九二年に國民集會新たに召集せられたが、ジャコペン黨最も優勢であつて、革命的色彩が益々濃厚になり、まづ王政廢止、共和制成立を宣言した。時に一七九二年九月二十二日で、この日を自由の第一年第一日とし、共和曆を作り、晝夜平分時の



秋分を以て年の始とし、一ヶ月を三十日とし残れる五日を餘剰日として休日とした。保安委員會を作つてマラー委員長となり、ダントン・ロベスピエル等暴威を振ひ王を國民の敵なりとして死刑を宣告し、翌年一月コンコルド廣場にて斷頭臺に上せて王を刎ねた。斷頭臺は外科醫ギョチーヌの發明に係る故、發明者の名を採つてギョチーヌと云ふ。又革命裁判所を設けて王后マリー、アントアネットを始とし、政敵千余人を殺した。これを恐怖時代といふ。ジャコベン黨は過激派と温和派とに分れて軋轢し、ダントン・エベール等皆殺され、ロベスピエル獨り全權を握つて益々残酷を極めたが、國民集會の議員を所刑せんとするに及び、國民集會先だつてロベスピエル等捕へて斷頭臺上に刎ねたので、ジャコベン俱樂部解散し、恐怖時代終りを告げた。

國民集會時代には諸制度を改革した。己に地上の王を廢したから天の王をも廢せざるべからずとし、クリスト教を廢して道理教をはじめ、眞・善・美を理想とし、無垢の美少女を其の表象とし開院式にはノートルダム寺院の祭壇に立たしめ、議長美少女に接吻すれば議員一同自由万歳を唱へ拍手すると云ふ狂態をさへ演じた。又度量衡を一定してすべてメートル法を用ひたが、今日世界共通に用ひてゐるのがそれである。かくて國民集會は新憲法を作つて一七九五年自ら解散し國民集會時代ここに終つた。

【總統官時代】（一七九五年——一七九九年）新憲法は五人の總統官において行政を掌らしめ、元

老院・五百名會の二院制度とした。

是より先、國王死刑の報傳はるや、國內の勤王黨亂を起すと同時に、諸外國も武力を以て革命の氣勢を挫くを必要とし、英・普・奧・蘭・西の諸國は同盟を作つて佛國の國境に進入した。之を第一回列國同盟と云ふ。（一七九三年）國民集會は新軍隊を組織し同盟軍に抗し、奧領ネーデルラントを攻略した。總統官政府の成るや、三軍を編制して奧太利に侵入せしめたが、第一・二軍は共に敗れ、獨りナポレオン、ボナバルトの率ゐる第三軍のみはアルプス山を越えて北伊太利に入り、連に奧軍を破り長驅してウィーンに迫り奧國をしてカンボ、フォルミオ和約を結ばしめ、奧領ネーデルラント及びライン川左岸の地を獲得して凱旋した。第一回列國同盟ここに崩れて佛國の敵は英國のみとなつた。

ついでナポレオンは英國の印度交通を絶たんが爲に埃及を略取すべきことを建議し、政府の命を受けて埃及遠征を企てた。（一七九八年）其の海軍はアプキール灣内にてネルソンの率ゐる英國艦隊に撃滅せられたが、陸軍は埃及を征服し、シリアにまで進撃して埃及に歸つた。

## 第二章 ナポレオンの業

本章の主眼點及び取扱方

本章はナポレオン一代の功業を語るもので、ナポレオンの立身に始まりナポレオン最後の敗戦ワテルローの戦に終り、革命勃發以來の國境問題、國際問題を解決する所のウィーン會議の結末までを含んでゐる。ナポレオンは蓋世の英雄で、兵を用ふること神の如く、身を砲兵士官に起し、先にバリーの暴動を制して總統官政府の確立を助け、また伊太利に大功を立て、威名を全歐に轟かした。總統官政府の無能なるを見るや、一蹴して自ら政權を握り、一時全歐を己れの願使の下においたが、唯英國のみは飽くまでナポレオンに屈しなかつた。ナポレオンの蹉跌は實にこの一英國を敵としたるに因し、歐洲の國民的奮起と相俟つて再び起つ能はざるに至らしめたのである。露國遠征の失敗がナポレオン敗亡史の第一齣、諸國民の奮起が其の第二齣、ワテルローの敗戦が最後の舞臺であつて、これよりナポレオンは永久に歐洲史の舞臺から滑り落ちたのである。彼は一八二一年五月瘴烟にこめられたセント、ヘレナ島にて胃痛を患へて斃れた。されど一八四〇年、佛國民はこの國民的英雄を崇慕するの念に堪へず、英國政府の許可を得て遺骨をバリーのアンヴァリード寺に改葬し永遠に崇敬を致してゐる。

#### 主要教材の解説

【ナポレオンの外征】 ナポレオンが歴史の舞臺に上つて大役を演じたのは既に總統官政府時代に在つたことは前章の末尾に述べたところである。ナポレオンが埃及に遠征して英國に經濟的打撃を加

へんとするや、英國の青年首相ピットは奥・露・葡・土等の諸國を誘ひ、第二回列國同盟を作り、頗に佛軍を破つて其の國境に迫つたので、佛國民の良將を懷ふこと痛切であつた。この時ナポレオンは埃及にあり、國內の形勢を聞知し、急に本國に歸り、其の威望によつて武力を以て總統官政府を仆し、新憲法を作り、執政三人において自ら首席執政となつた。實に一七九九年のことである。立法機關としては、三つの議會を設けたけれども、凡てナポレオンの願使に従ひ、共和政は名のみにて實は武斷政治となつた。

【ナポレオンの帝政】 ナポレオンは列國と和親を圖つたけれども、英・奥の二國は飽くまで敵意を有してゐたから、ナポレオンは再びアルプス山を越えて北伊太利に入り、奥軍をマレンゴに破り、別將モローもホーエンリンデンに大勝を占め、翌年奥國をしてリュネヴィル和約を結び、ライン左岸の地を悉く佛國に割かしめた。英國も平和論者勝を占めてピット辞職し、一八〇二年佛國とアミアン條約を結び、トリニダード及びセイロン兩島を除き、其の他の侵地を返した。

これよりナポレオンは銳意國內の政治を整へ、財政を整理し、實業を奨励し、交通を開き、教育を盛にし、舊教を再興してローマ法王を首長と仰ぎ、又有名なナポレオン法典を編纂して不朽の名を留めた。かくて一八〇二年終身の執政にあけられ、一八〇四年には國民大多數の投票を得て世襲皇帝の位に即き、ナポレオン一世と號し、翌年伊太利王をも兼ねた。十二月二日、ノートルダム寺

院にて戴冠式を擧ぐるや、ローマ法王はローマより來て金冠を加へたが、ナポレオンは頭上に持ち來れる冠を己の手に取り、自ら帝冠を加へたといふ。ナポレオンの意氣が窺はれて面白い。

英國ではピット再び宰相となり、塙・露諸國と共に第三回列國同盟を組織して佛國に宣戰した。ナポレオンはまづ英國に進撃せんとし、大兵をブローニーに集め、提督ヴィルヌーヴに命じ佛西聯合艦隊を率ゐて英國艦隊を牽制せしめ、虚に乗じて英京ロンドンを襲はんとした。然るに、聯合艦隊はトラファルガル沖にてネルソンの艦隊に撃破せられ、(十月二十一日)ナポレオンの計畫水泡に歸し、海上權は全く英國の手に歸した。ナポレオンは「朕をして六時間制海權を握らしめば、必ず英國を亡さん。」と云つたが、遂に永久に實現することが出来なくなつた。因つてナポレオンは鋒を東に轉じて塙國に向ひ、アウステルリッツの戰に塙・露の聯合軍を破り、塙國をしてブレスブルグに和し、ヴェニスを割讓せしめた。(一八〇五年)一八〇六年には西南獨逸の十六州をしてライン聯邦を組織せしめて自ら保護者となつたから、獨逸全く解體し、神聖ローマ帝國は名實共に亡びた。普魯西は第一列國同盟以來久しく中立を守り、戰局の外に立ち、學藝大に進歩したが、今やナポレオンの凌辱を憤り、遂に露國と結んで佛國に宣戰した。(一八〇六年)

ナポレオンは直に普軍をイエナ等に撃破し、進んで伯林を占領し、翌年進んで露普の聯合軍をフ

リードランドに破り、普王露帝とチルジツト和約を結び、普王をしてエルベ・ライン兩河の間の地を割かしめ、こゝにウエストファリア王國を立て、弟ジェロームを王とし、露帝をしてポーランドの地を割かしめてそこにワルソー大公國を立て、サクソニア王をして大公を兼ねしめた。

又ナポレオンは英國侵入の企圖敗れたるを以て、經濟上より之を苦しめんとし、伯林滞在の間に大陸封鎖令を發し、歐洲大陸諸國をして英國と通商することなからしめた。之を伯林勅令とも云ふ(一八〇六年)然るに、ポルトガル王は其の命を奉ぜず、英國と通商をつけたので、ナポレオンは將を遣りて之を征せしめ、又西王父子を斥けて己の兄ジョセフを西班牙王たらしめた。ついで西國人は英國の援を得てジョセフを逐うたからナポレオンは親征してマドリッドを占領して兄の位を復せしめた。(一八〇八年)

塙帝はナポレオンの西班牙に在るを機とし、またも兵を擧げて佛國に迫らんとしたので、ナポレオンは急に鋒を轉じて塙軍を討ち、長驅してウィーンに入り、大にワグラムに戰つて塙軍の主力を撃破した。(一八〇九年)塙國力盡きてウィーン條約を結び、ダルマチアを割き大陸封鎖令を守ることを約した。翌年ナポレオンは塙帝の皇女マリア、ルイザを納れて皇后とし、ジョセフを離別した。ついでマリア、ルイザはナポレオン二世を擧げた。これがナポレオンの全盛時代であつて英土二國の外、歐洲列國はすべてナポレオンの威令に服した。

【露國遠征の失敗】 チルジツト條約締結後、プロシアではスタイン・ハルデンベルヒ等相ついで宰相となり、銳意内政を改革し軍備を整へたが、中にも現役・豫備・後備の制を定め、ナポレオンの制限下に在つてなるべく多數の兵士を訓練することにしたのは、普軍をして優勢ならしめる効果があつた。又ベルリン大學の哲學教授フイヒテは「ドイツ國民に告ぐ」といふ演題の下にドイツ國民統一の急務を説き、民間には道德會など起つて愛國心を鼓舞したから、舉國ナポレオンに對する報復の機を待つてゐたのである。

然るに露國は大陸封鎖令を破つて英國と通商したので、ナポレオンは諸國の兵五十五万を率ゐて露國に遠征した。行き／＼露軍を撃破しボロヂノの激戦に大勝を得、九月モスコのクレムリン宮殿に入つた。偶々モスコに大火起り、炎燒五晝夜に及んで全市を烏有に歸せしめたので、五十万の大軍は寢るに所なく、食ふに物なく、加ふるに十月の寒氣に苦しめられ、凍死するものも夥たしかつた。ナポレオンはベテルブルグに逃れてゐる露帝に降伏を勧めたけれども、露帝は佛國兵の全部が露國內を退却するにあらざれば決して降参せぬと力んでゐるので、ナポレオンも今は詮方なく退軍する外なきことになつた。しかも退軍の途中、コサツク兵が出没して雪中に巧みな騎馬と長槍とを以て追撃し、飢寒に苦しめる佛兵は殆ど皆慘殺せられ、ナポレオンは僅に身を以てパリに逃げ歸つた。(一八一二年)

ナポレオンの敗報を聞いた列國は、四たび同盟を結んで積年の怨を晴らさうとした。(一八一三年)百獸の王たる獅子も傷いては野鹿と格闘することさへ出来ないのである。殊に普魯西の國民的奮起は其の熱烈なること鐵をも鎔かす勢であつた。ナポレオンもさるもの、同盟軍の結束成らざる中に之を撃破せんとし、急ぎ大兵を提けてプロシアに向ひ、こゝにライプチヒの戦が起つた。普魯西軍主力となり露軍も之に加はつて猛烈な白兵戦が三日間に互つて行はれた。ナポレオン包圍の中に陥り戦の利あらざるを見、南方に血路を開いて退却を令した。さて數万の軍を退却せしむるには數時間を要する故、ナポレオンは、この間にあり、僅に二時間ばかりの坐睡をなして連日の疲れを癒したといふ。今もナポレオン石と唱へて其の遺跡を残してゐる。プロシア人はこの戦を國民戦と名づけた。これは獨逸國民として佛國に抗したからである。この戦を歐洲獨立戦役といふも同じ意味である。

【ナポレオンの末路】

ナポレオンの聲望これより地に墜ち、普・墺・露の聯合軍は潮の如くパリに押し寄せ、英將ウェリントンもイスパニアより北上してパリに向つた。ナポレオン遂にパリを棄て、フォンテンブロー王宮に入つたが、同盟軍の使來り、ナポレオンの退位を迫つたので、ナポレオンはこの王宮にて退位の詔書を草した。

かくて同盟諸國はルイ十六世の弟ルイ十八世を立て、佛王とし、ナポレオンに帝號を稱すること